

もしも比企谷八幡が嘘
つきだったら

くいな9290

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作では『本物』を願った比企谷八幡。しかし、もしも彼がもとより偽物で雪ノ下陽乃のような仮面を被っていたら、彼の高校生活はどうなってしまうのか。

八幡の性格改変されており、かつ高スペックです。

処女作ですので、おかしな点があるかもしれません。

アンチヘイトタグは一応です。

タグが突然増える可能性もあるのでご了承ください。

目次

番外編

番外編 戸塚彩加は望んでいる

1

本編

e p. 1 比企谷八幡は青春を肯定す

12

e p. 2 いつでも比企谷八幡は一貫し

ている 15

e p. 3 そして由比ヶ浜結衣は知らぬ

まま 37

e p. 4 やはり比企谷八幡は退部でき

ない 58

e p. 5 然るに比企谷八幡は努力を

否定せず 69

e p. 6 されど比企谷八幡は努力せ

ず 90

e p. 7 どうしても比企谷小町はお

兄ちゃんと同じ学校に通いたい 109

e p. 8 由比ヶ浜結衣は騙され続け

て 118

e p. 9 ようやく彼は彼女との始ま

りを知る 129

e p. 10 ついに由比ヶ浜結衣は

144

e p. 11 雪ノ下雪乃は感謝してい

語り合う	—	248
e p. 17	彼と彼女らは夜空の下に	234
宣言する	—	234
e p. 16	やはり雪ノ下雪乃はそう	212
休みはない	—	212
e p. 15	やっぱり比企谷八幡に夏	195
形作られる	—	195
e p. 14	こうして彼らの居場所は	176
e p. 13	由比ヶ浜結衣は選ばない	166
e p. 12	雪ノ下陽乃は不敵に笑う	152

e p. 18	どうしても比企谷八幡は	263
e p. 19	やっぱり比企谷八幡の目	280
は死んでいる	—	280
e p. 20	とかく彼女の恋路はまま	288
ならない	—	288
e p. 21	彼女は馬鹿げた見世物を見	306
物する	—	306
e p. 22	およそ比企谷八幡の芝居は	323
影にすぎない	—	323
e p. 23	どうしても比企谷八幡は	348
舞台上に立ちたくない	—	348
e p. 24	そうして彼と彼女の文化	

祭が幕を開ける



366

番外編

番外編

戸塚彩加は望んでいる

「昼休み特別棟の一階、保健室の隣に来てください、か。」

今朝、靴箱に入っていた手紙の几帳面な文字を読む。

同封された簡単な地図を見ると、指定された場所はテニスコートを眺める形になるどころだ。

裏を見ると学年とクラスと名前が書いてあった。

「聞いたこと、ないんだけどなあ。」

僕はそう呟きながら指定された場所に向かう。

書かれていたのは知らない人の名前。名前の隣に書いてある数字は三なので三年生なんだろう。

もしかしたら、テニス部の先輩の知り合いなのかな、なんて考えていると、その場所に到着する。

そこには、既に僕を呼び出したと思われる男子生徒が一人立っていた。

「えっと……、何か用ですか？」

実際に会ってみても全く見覚えがなかった。

一体僕に何の用なんだろう……。

戸惑う僕をよそに目の前の男子生徒は緊張した声で尋ねてくる。

「戸、戸塚彩加さん、だよね？」

「はい、そうですけど……。」

そう確認した後、彼は意を決したように息を吸い込んだ。

「好きです！」

一目惚れでした。付き合ってください！

……え？

一瞬、彼の言葉が理解できなかった。

好き？一目惚れ？僕に？

僕は差し出されたその手から数歩後ずさる。

「え、えーつと、僕、男……なんですけど……。」

僕が真実を告げると、その場の空気が凍りついた。

そして、その沈黙を破ったのは、頭を下げて手を差し出していた彼の間の抜けた声

だった。

「……はい？」

「だから、僕は男の子……です。」

もう一度、勘違いされないように僕ははっきりとそう告げる。

お辞儀したままの格好で顔だけを上げた彼はポカンと口を開けて啞然としている。

「それじゃあ、僕はこれで……。」

言つてこの場から去ろうと回れ右をして歩き出す。

しかし……。

「待ってくれ！」

突然、背後から大声で呼びかけられ、足が止まる。

ゆっくりと振り返ると、距離をとったはずの彼がすぐ目の前にまで迫っていた。

「な、何です……」 「そんなの信じられない！」

僕の小さな声は彼の大きな声に掻き消える。

「し、信じられないと言われても……。」

信じてもらうしかないんですけど。」

「なら、確かめさせてよ。」

僕が後ずさりながらそう言つても、同じ分だけ距離を詰めてくる彼は一切耳を貸さない。
い。

「……確かめる？」

「どうやって?」と問いかけようとしたが、何も言わずに詰め寄ってくる彼を見てすぐに察する。

「や、やだっ!」

そう叫んで逃げ出そうとするが、僕はすでに壁際まで追い詰められていた。

僕は身を小さくしてその場でしゃがみこむ。

そして、目をぎゅつとつむり、現実から目を逸らそうとした。

けれど、目の前に立つ人の気配は消えることはなかった。

このままじゃー!ー。

バンツ!!!

突然、大きな音がその場に響き渡った。

恐る恐る片目だけを開いて状況を確認する。

すると、普段生徒は利用しないはずの校舎の裏のドアが開いていた。

そして、開け放たれた勢いに乗ってまだ揺れ続けるドアから、ビニール袋を持った男

子生徒が出てくる。

そのまま我関せずと言った表情で、テニスコートに面した小さな階段に腰掛け、何か

黄色い缶の飲み物の蓋を開けて飲み始める。

一息ついたのか、その男子生徒は缶から口を離すと、おもむろに僕らに目を向ける。

ううん、違う。

僕の目の前に立っている先輩の目を凝視していた。

「な、何だよお前っ!!」

先輩はその謎の男子生徒の方に向き直り怒号を飛ばす。

僕に向けられた訳じゃないのに、その声の大きさについビクツと驚いてしまう。

でも、その叫びを向けられた張本人は涼しい顔でそこに座ったままだった。

「俺、いつもここで飯食ってるんっすよ。」

だから、あなたがいたところに俺が来たんじやなくて、俺が来るところにあなたがいたんっすよ。」

その上、彼を挑発するように不敵に笑いながらそう言った。

「ふざけんな！」

今立て込んでるのが分からねえのか!？」

当然、興奮している先輩に対してその男子生徒の煽り文句は効果覿面、怒り心頭と
いった風に怒鳴り散らす。

「立て込んでる……?」

ああ、そりゃ女子生徒を襲ってるんだから大変っすよね?」

対照的に、彼はあくまでも落ち着いて、冷静に言葉を紡ぐ。

口の端を歪めながら。

そして、先輩はと言うと我慢の限界だったのか男子生徒に詰め寄り胸ぐらを掴んで無理やり立ち上がらせる。

「いい加減にしろよ！」

さつさとどっかに行けって言ってるのが分からねえのか!!」

今にも殴りそうな勢いで先輩は言う。

そんな状況になっても、その男子生徒は表情を崩さない。

「女子生徒を襲って、その上生徒に暴行行為……か。」

先輩、三年生つすよね？

俺、ビビリなんで殴られたら怖くて先生に洗いざらい話してしまうかもしれないね？」

ニヤリと口角を吊り上げ、不敵に笑いながら言う。

ここで殴ったらあなたの将来はどうなるか分からないぞ、と。

「……っ！」

お前……。」

「さて、どうします？」

俺としては殴られたくないんですけど。」

「……くそっ！」

先輩は自らの劣勢を悟ったようで、悪態をつきながら彼の胸ぐらを掴んでいた手を離す。

「良かったですよ。」

先輩が損得勘定できるお方で。」

彼は最後まで嘲るような口ぶりで先輩を挑発する。

「お前、覚えてろよ……。」

最後まで先輩は怒りが収まらなかったようで、最後まで拳を固く握りながらこの場から去っていった。

結局、僕は何もできずにそこにしやがみ込んだままだった。

一方、僕を助けてくれたその男子生徒は無言で掴まれた胸元の服装を直した後、小さくため息をつくと校舎へと体を向けた。

「あ、あの！」「保健室。」

このまま何も言わなかったらダメだ、と思って声を上げるが、裏返った僕の声とは反対の落ち着いた彼の声に遮られる。

「え？」

「だから、保健室。行くなら付き添うが。」

ぶつきらぼうに彼は言う。

けれど、その口調はとても優しく、暖かかった。

「う、ううん。大丈夫……です。」

「そうか。」

教師に訴えるのはお前の自由だが、俺のことは話すなよ。」

彼は簡潔にそう告げると、校舎の中に戻っていった。

結局、最後まで僕は彼にお礼を言えなかった。

僕を助けてくれた男子生徒はすぐに見つかった。

というか、僕のクラスメイト、比企谷八幡君だった。

一年生になってまだ一月しか経っていないのに加え、比企谷君と話したことはなかったの、まだ彼のことを知らなかったのだ。

同じクラスの比企谷君。

だから、毎日彼と会うんだけど、まだ僕は声をかけられていない。

助けてももらったんだから、お礼を言わなくちゃいけないのは分かってるんだけど

……。

こんな時、僕は自分の内気な性格が嫌になってしまふ。

でも、僕が見た比企谷君はいつも一人だった。

誰かと話しているところなんか見たことがない。

休み時間は自分の席で寝ているか、ふらりと教室から出て行ってしまふ。

どうしてあんなに優しいのに友達がいらないんだろう……。

彼に助けられた自分を棚に上げてついそんなことを考えてしまった。

そして、僕は一年生が終わるまで一回も彼にお礼を言うどころか話すことすらできなかった。

何もできないまま、一年が過ぎて僕は二年生になった。

幸か不幸か今年も比企谷君と同じクラスになった。

でも、二年生になっても比企谷君は何も変わらないままずっと一人で、僕も何も変わらずに遠くから彼を見ることしかできない。

このまま今年も何もできないまま過ぎて行つちやうのかな、なんて思っていたら、

チャンスは突然訪れた。

二年生になって部活から三年生の先輩達が引退して、僕一人になった昼休みの練習中、何気なく一年前、彼に助けられた場所に目を向けると、そこに見知った顔が立っていた。

由比ヶ浜さん……？

どうしてあんなところにいるんだろう？

普段人気がないあんなところに由比ヶ浜さんがいるのは初めて見たので、少し気になる、近づいてみる。

すると、由比ヶ浜さんの隣に意外な人物、比企谷君が座っていた。

びっくりして、僕の足は止まってしまふ。

ダメだ、ここで逃げたら何も変わらないままだ。

そう自分に言い聞かせて足を無理やり進める。

きつと、比企谷君に名前すら覚えられてないと思うけど、それでもお礼は言わなくちゃいけないから。

そう心に誓って、僕は彼らに近づく。

すると、由比ヶ浜さんが僕に気づいたようで声をかけてくる。

「おーいー！さいちやーんー！」

僕はその声を聞くと同時に少し足を速めて彼らに近づく。

いつか、比企谷君に頼られて、助けることができたらしいのにな、なんて思いながら。

本編

e p. 1 比企谷八幡は青春を肯定す

『高校生活を振り返って』 2—F 比企谷八幡

青春とは善であり、真理である。

青春を送る舞台である学校生活とは、自らを社会にとって必要な人材に高めるために勤しむ場であり、また、友人たちと語り合い、自分の欠点を悟り、人格を形成する場でもある。

勉強が学生の本分。

この言葉は至極まともだと思うが、私はそれに異を唱えよう。決して、勉強をしたくないからというわけではない。

学校で学ぶべきことはそれが全てではないと私は思うからだ。

社会の縮図とも言える学校において、他人との関係を持ち、コミュニケーションをとることは将来、社会での人間関係の形成における大きなアドバンテージとなることだろう。

つまり、他人との関係を築く。

それこそが我々学生が学ぶべきものではないだろうか。

ところで、『人』という漢字の成り立ちを知ってるだろうか。『人』は人と人が支えあつてできているというやつだ。

私は学生こそ、この漢字を体現しているのではないかと思う。

我々が作る友人という関係は素晴らしいものだ。

決して見返りを求めず、お互いがお互いを労わり、支え合う。

もし、友が致命的な失敗を起こそうものなら皆が彼を助けようと奮起することだろう。

そして、きっとその経験はいつか思い出となり、我々の心に残り続けることとなる。

つまり、見返りを求めず、支え合う関係である友人を作り出す環境にある学生は『人』という漢字を体現していると言っても過言ではないと私は思う。

しかし、誰もがそんな輝かしい青春を送っているとは言えない。

人間関係の形成に失敗した者だって少なからずいるのは事実だ。

そして、彼らの一部が友人関係は嘘だ、欺瞞だ、という声を上げているのもまた事実だろう。

確かに、その関係の中に嘘や秘密が一切含まれていないというわけではない。

人には必ず他人には話せない秘密、のようなものがあるからだ。

では、友人になるためにはその秘密までもを暴かなければならないのか。

否。その必要はないと思う。

秘密があつてはいけないのか。

嘘があつてはいけないのか。

それを許容できる関係ではいけないのか。

嘘が、秘密があるからその関係は悪であり、偽物と断ずるのはあまりにも早計である

と私は思う。

つまり、友人関係は偽物では、悪ではないはずだ。

逆説的に考えて、その関係は、青春は本物であり、真理であり、善であると言えよう。

だから、青春を謳歌せし者は善であり、真理である。

結論を言おう。

学生たちよ、『今』は今しかない、青春を精一杯楽しめ！

e p. 2いつでも比企谷八幡は一貫している

「なんだね、これは。」

目の前に座る教師、平塚静は俺が書いた作文を読み上げ、不機嫌そうにそれを机に叩きつけた。

「何かと言われても、作文としか……。」

推敲を重ねたわけでもないのに、自分でも稚拙な文章だと思いが、文法的なミスはなかったはずだ。

けれど、平塚先生はため息をつきながら言う。

「はあ……。比企谷、君はこの作文のテーマが何かを覚えているかね？」

『『高校生活を振り返って』です。』

「それを聞いた上でもう一度聞くぞ。これはなんだ？」

「俺がこれまで送ってきた高校生活を作文にしたものです。」

俺は正直に答える。

しかし、彼女は否定的な態度を崩さない。

「君の青春はこんなに輝かしいものじゃないだろう。」

「いや、それなりの青春を過ごしてきたと思いますよ。自分で言うのもなんですが、成績学年トップ、スクールカーストトップ、友人も多いし——嘘をつき続けてな。」

平塚先生が俺の言葉を遮る。

「作文はな、自分が感じたことを文章にするものなんだ。問題なのはこれが君の本心じゃないことだよ。」

本心……か。そんなものは犬にでも食わせちまえよ。

心の中でそう思いながら、俺は爽やかな笑顔を浮かべる。

まるで真実を述べているかのように。

「何言ってるんですか、先生。これが俺の本心ですよ？」

けれど、彼女は俺の嘘を看破する。

そして、哀れむような表情を浮かべた。

「仮面を被るのはよしたまえ。君のそれを見るのは少し痛々しい。」

どうしてこの人には俺の嘘が分かるのだろう。

俺の嘘が通用しないのは家族以外で数えるほどしかない。

まあ、平塚先生なら特に問題はないだろう。俺の嘘について言いふらすような人でもない。

俺は先ほどの笑顔とは似ても似つかないようなニヤリとした気味の悪い笑顔を浮かべた。

「仮面もつけ続けなければいつか本物になるとは思いませんか？」

「ならないよ。君のそれは偽物だからな、いつまでたつてもそれが本物になることはない。」

……それにしてもあれだな、素の君の目はまるで生気がない、死んでいるようだな。戯れ程度に聞いたただけだ。本物にならないなんてことは分かりきっている。

それよりも今はこの作文の処理についてだ。

「そつすか。妹にも言われたことありますよ。」

それで、俺はこの作文を書き直せばいいんですか？」

「いや、書き直す必要はない。そもそも悪い内容ではないからな。」

ただ、君の性格、というか外面はどうにかせねばならん。」

「俺は別にこのままでも……。」

「だめだ。君はあいつと違っていつか潰れるかもしれん。作文にもそれが現れてい

る。」

「あいつ？」

「君と同じくらい嘘をつくのが上手いやつだよ。」

さて、君をどうするかだが、部活動をしてもらう。

そこで性格を正してもらおう。」

部活動？

そこに俺の人格強制と何の関係があるんだ？

「部活で人格矯正ってどういうことですか？」

「行けば分かる。」

「そもそも何部ですか？」

「行けば分かる。」

「……理不尽だ。ちなみに拒否権はあるんですか？」

「拒否してもらっても構わないぞ。ただし、次の日には学校中が君の嘘を知ることになるがな。」

実質拒否権なしかよ。

「さて、行こうか。」

平塚先生はタバコを灰皿に押し付け、立ち上がった。

連れてこられたのは特別棟の一教室の前。

ネームプレートには何も書かれていなかった。

「ここが部室ですか？」

「そうだ。」

平塚先生は短く答えて、教室のドアをからりと開けた。

その教室の端つこには机と椅子が無造作に積み上げられている。倉庫として使われているのだろうか。

他の教室と違うのはそこだけで何も特殊な内装はない、いたって普通の教室。

けれど、そこがあまりに異質に感じられたのは、一人の少女がそこにいたからだろう。少女は斜陽の中で本を読んでいた。

世界が終わったあとでも、きつと彼女はここでこうしているんじゃないか、そう錯覚させるほどに、この光景は絵画じみていた。

それゆえに、白々しく、嘘くさい。

「平塚先生。入るときにはノックを、とお願ひしていたはずですが。」

「ノックをしても君は返事をした試しがないじゃないか。」

「返事をする間もなく、先生が入ってくるんですよ。」

平塚先生の言葉に、彼女は不満げな視線を送る。

「それで、どうして彼がここに？」

ちろつと彼女の冷めた瞳が俺を捉えた。

俺はこの少女を知っている。

二年J組、雪ノ下雪乃。

名前を知っているだけで、会話をしたことはない。

先ほどの反応を見る限り、あちらも俺を知っているようだが。

彼女は定期テストでも実力テストでも常に俺の一つ下、次席に鎮座する成績優秀者。

そして、その類い稀なる優れた容姿で常に注目を浴びている。

まあ、さして興味があるわけでもないの、その程度のことしか知らないが。

「彼は比企谷。入部希望者だ。」

平塚先生が簡単に俺を紹介する。

俺も一歩前に出て、愛想の良い笑顔を作る。

相手が誰であっても俺のすることは同じだ。

「俺は二年F組、比企谷八幡。入部とかはまだよく分からないんだけど、初めまして、雪ノ下さん。」

「俺は二年F組、比企谷八幡。入部とかはまだよく分からないんだけど、初めまして、雪ノ下さん。」

平塚先生に連れてこられた男子生徒、比企谷八幡は私に向かってそう挨拶をした。私はもちろん彼を知っている。

むしろ、常に成績において私の一つ上を行く彼を知らない方がおかしいだろう。

しかし、平塚先生が彼を入学させようとする理由が分からない。

彼が自発的に入学しようとしていないのはその態度を見れば明らかだ。

「入学、と言いますと？」

「端的に言うると、彼の性格を直してやって欲しいんだ。」

先生の解答に私はますます混乱する。

彼の噂は何度も聞いたことがある。

それは、クラスの人気者で、明るく、優しいなどと言った好評価であり、悪評など聞いたことがない。

先ほどの挨拶も愛想の良いもので、性格を直す必要があるようには思えない。

「彼の性格に何か問題があるんですか？」

すると、平塚先生は少し不思議そうな顔をして答えた。

「おや？君は気づかないのかね？ まあいい、どうせ話すことになる。」

そして、平塚先生は比企谷八幡の方を見た。

彼はやめてくれと言わんばかりの表情で先生の目を見ている。

「……やめてくれはしませんかね?」

「君の人格矯正だ。バラさなければ意味がないだろう。」

大丈夫だ。彼女は秘密を言いふらすようなやつではない。

まさか雪ノ下が気づかないとは思わなかったが。」

彼らの話の意味が全く分からない。

バラす? 気づく? 何のことなのだろうか。

そして、次の平塚先生の発言は私をひどく驚かせた。

「彼はな、嘘つきなんだ。」

「はい?」

「嘘つきなんだよ。さっきの挨拶にも彼の本心は一切現れてない。」

きつと君が聞いたことのある彼の噂も全て彼が嘘をつき続けて作り上げたものだ。」

私は平塚先生の言葉が信じられなかった。

先生の言ったことが真実ならば、そこで頭を抱えている彼は、姉さんよりも嘘が上手

いということになる。

私は姉さんの嘘は大抵見抜けるのだから。

「おい、比企谷。君はこの部活内で仮面を被ることを禁止する。」

私が驚いて何も言えない間に話は勝手に進んでいく。

「……拒否権は？」

「拒否したときは、私が君の秘密をバラす人数が増えるだけだ。」

「ほとんど脅迫じゃねえか……。まあ、いいか。」

彼は面倒くさそうにブツブツ独り言を言った後、再び私の方に向き直った。

その表情はさつきとは様変わりしており、輝いていたはずの目はまるで生気がなく、死んだような目をしていた。

「改めて、不本意ながら入部することになった比企谷だ。よろしく。」

全く、いきなり人の秘密をバラすやつがあるかよ。

心の中で平塚先生に悪態を吐く。

すると、平塚先生はこちらをジロリと睨んできた。

あれ？ 読心術でも身につけてるのか、この人。

慌てて先生から目を逸らし、雪ノ下に目を向ける。

彼女は驚いたような表情でこちらを見ていた。

「それでは、頼めるか？ 雪ノ下。」

平塚先生の呼びかけに、雪ノ下は我を取り戻したように姿勢を正して答えた。

「え、ええ。大丈夫です。先生からの依頼ですので無下にはできませんしね。」

はあ、ここで部長(?)である彼女が俺の入部を拒否したらまだ望みはあったのに……。

「そうか。なら、後のことは頼む。」

平塚先生はそれだけ言うと、さっさと帰ってしまった。

さて、どうしたものか。

帰るわけにもいかないし、とりあいず下校時刻まではここにいたべきだろう。

「ハイ、座るぞ。」

雪ノ下と反対側にある椅子に座ろうと、この部屋の主である彼女に了承をとる。

「ええ、構わないわ。」

「ありがとよ。」

俺は椅子に座って持ってきた文庫本を開く。

俺は人格矯正を受けようと思わないし、必要もないと思う。

二、三日部活に来て、その後は適当にばっくれよう。

葉山たちには適当に言い訳するとして、この暇な時間は本でも読もう。

これからどうするかをざっと考えた後、手元の本に目を向け、読み始めた。

「……………」

「……………」

え？何こいつ。なんでずっと俺の方凝視してんの？興味津々なの？

そんなガン見されたら集中できんわ。

「……………何か？」

「あら？見つめられているとでも思ったのかしら？」

私があなたなんか見るわけないわ、自意識過剰よ。」

「別に見られてるとは言っていないが。」

「……………。」

「……………。」

こいつ、確信犯だ。

「……………あ、あなたはこの部活が何か平塚先生から聞いているのかしら？」

「いや、行けば分かるのでしょうか言われてねえな。」

雪ノ下が露骨に話題を変えてくる。

しかし、先ほどの気まづいに雰囲気能耐えかねたのは俺も同じなのでその話題に乗る。

「なら、ゲームをしましょう。」

「ゲーム？」

「そう、ゲームよ。ここが何部かを当ててるの。学年主席なら分かるわよね？」

「どうしてそこで成績を引き合いに出すかは分らんが、何部かどうかは気になった。当てるよ。」

最初に考えたのは文芸部。

特殊な機材もなく、見る限り部員は一人、そしてその一人も本を読んでいた。しかし、これは間違い。誤答だろう。

文芸部なら俺の人格矯正などするわけがない。

なら人格矯正部か？ そんな部活があるわけがない。

ヒントはある。彼女の言葉、*“先生からの依頼”*だ。

依頼、ということはクライアントの望みを叶えるのだろう。

ならば、答えは絞られる。

「悩み相談部か？」

しかし、俺が考えた末の答えを聞いた彼女は少し得意げな表情を浮かべた。

「ハズレよ。学年主席さんはこの程——」なら、ボランティア部か？」

悩みを聞く部活でなければ、報酬をもらわずに依頼を受けるボランティアが一番しつくりくる。

ボランティアの中に人格矯正が含まれるのかは甚だ疑問だが。

さて、どうだろうか。まあ、正否は雪ノ下の表情を見れば一目瞭然だが。

「……………正解。ここは奉仕部よ。偶然とは怖いものね。」

その皮肉な彼女の発言と、悔しそうな顔で俺は確信した。

こいつ、超絶負けず嫌いさんだ。

だとすれば、事あるごとに学年主席という単語を出してくる意味も合点がいく。

次席の彼女はきつと俺に敵対心を抱いているのだろう。

どうでもいいけどな。

「それで、具体的にはどんな活動をするんだ？まさか人格矯正だけじゃないだろ？」

すると雪ノ下は少し満足そうな顔をして、高らかに宣言した。

「持つ者が持たざる者に慈悲の心をもってこれを与える。人はそれをボランティアと呼ぶの。途上国にはODAを、ホームレスには炊き出しを、モテない男子には女子との会話を。困っている人には救いの手を差し伸べる。それがこの部の活動よ。」

いつの間にか雪ノ下は立ち上がり、俺を見下ろしていた。

「ようこそ、奉仕部へ。歓迎するわ。」

……………あー、うん。かつこいいんじゃないやね？

とても口には出せないことを考えていると、雪ノ下が再び口を開いた。

「平塚先生曰く、優れた人間は憐れな者を救う義務がある、のだそうよ。頼まれた以上、責任は果たすわ。」

あなたの問題を矯正してあげる。感謝なさい。」

「俺は平塚先生に言われて仕方なく今みたく振舞っているけどな、学校に知り合いも多いし、それなりには人気者なんだよ。別に矯正なんて必要ねえよ。」

「あなたはその仮面を被り続けて生きていくつもり？嘘をつき続けていくつもりなの？」

「ああ。誰にも迷惑はかけてねえよ。」

俺がそう答えると、雪ノ下は眉をひそめる。

「あなたのその考え方、酷く不愉快だわ。」

嘘をつき続けて生きていくのか本当に正しいと思ってるの？」

「正しいとか正しくないかじゃねえよ。」

俺が考えた生きていくための最適解がこれだ。お前に文句を言われる筋合いはない。

俺は嘘をついて生きていく。それはあの時決めたことで、変えるつもりは一切ない。

雪ノ下は俺との問答が無駄だと感じたのか、少し考える素振りを見せた後、俺に聞いてきた。

「嘘、と言つても、今のあなたは嘘を言ってるようには見えないけれど。」

「お前にはもうバレてるし、嘘をつく必要がない。」

それに、素でいる時は正直にするようにしてんだよ。」

「あら、嘘をつかないとは言わないのね。」

「俺が今言ってることが真実になるとは限らないからな。」

俺の発言を受けて、雪ノ下は何か思い出したようで、にこやかな表情でこう言った。

「真実は正直の後についてくる。あなたもそう考えているの、船首谷君?」

『『羊をめぐる冒険』かよ。選ぶにしてもシーンがマニアック過ぎるだろ。後、船首谷つて……。』

そんな嫌味の言われ方されたことないぞ。

「……意外だわ。村上春樹なんて読むのね。」

「まあな。」

村上春樹は嫌いじゃない。

あの自分を探しているような文章には中々好感が持てる。

「結局、俺の人格矯正して何するんだ?」

とりあえず、当面の動きを具体的に尋ねる。

まあ、すぐに来なくなる予定だからあんまり意味はないけどな。

「……そうね。考えないといけないわ。」

ノープランかよ。

まあ、プランがあろうとなかろうと関係ないが。

さて、雪ノ下は考え事を始めたようだし、やつとゆっくり本を読める。

俺は座り直して本を広げようとする……が、つかの間の静寂を打ち破るように、ドアを荒々しく引く無遠慮な音が響いた。

「雪ノ下。邪魔するぞ。」

「ノックを……。」

「悪い悪い。まあ気にせず続けてくれ。様子を見に寄っただけなのでな。」

ため息交じりの雪ノ下に鷹揚に微笑みかけると、平塚先生は教室の壁に寄り掛かった。

そして、俺と雪ノ下を交互に見る。

「仲が良さそうで結構なことだ。」

この人、どこに目をつけてるんだ？

「比企谷もこの調子で嘘つき体質をどうにかしたまえ。」

では、私は戻る。君たちも下校時刻までには帰れたまえ。」

「ちよつと待っててください。」

引き留めようと俺が先生の手を取った。その瞬間、腕がぐいと引つ張られる。

あ、これまずいやつだ。

俺は直感的に体を反らし、無理やり手を引き抜く。

「ふむ、今の体勢から抜け出すか。」

「何感心してるんですか、生徒に技を極めようとしなくてください。」

本題ですけど、矯正ってなんですか？必要ありませんよ。」

俺がそう言うのと平塚先生は雪ノ下に声をかける。

「雪ノ下。どうやらてこずっているようだな。」

「本人が問題点を自覚していません。」

先生の苦い顔に雪ノ下は冷然と答えた。

……こいつら、いい加減にしてくれよ。寛容な俺もそろそろ腹が立ってきたぞ。

「さつきから、矯正だの問題だの言って盛り上がってますけど、そんなもん俺は求めてませんよ。」

「何を言ってるの？あなたは変わらないとこれからまずいことになるわよ？」

傍から見ればあなたは人間ができてるように見えても、実際がそれでは問題しかないわ。

自分を変えたいと思わないの？向上心が皆無なのかしら。」

「変われ変われって言うけどな、俺がこうなった理由、いや、こうなってしまった原因も何も知らずに『俺』を語るな。」

それともなんだ？変わったフリでもしてやろうか？俺は自分を偽るのが結構上手いと自負してるからな。俺の嘘を見抜けないならきつと分らないぞ。」

俺もイライラしているようだ。

いつもよりも感情が表に出て、挑発的な言葉になってしまっている。

もちろん、俺の言葉に雪ノ下が反応しないわけもなく。

「理由？理由があるのかしら？なら話してみなさい。」

「話すとしてもお前には話さねえよ。そもそも他人に話すようなことじゃない。」

「あら、お得意の嘘かしら？相変わらずお上手ね。」

「そう思うのは勝手だ。だが、お前はどうかなんだ？変わってるのか？

そもそも変わるなんて現状からの逃げなんだよ。

逃げるために変わる、逃げないから変わらない。それを選ぶのはどっちでも構わな
い。

だけど、俺は逃げたくないから変わらない。今の自分や過去の自分を否定したくない
からな。」

……嘘だ。

今の自分も過去の自分もきつと俺は否定したくて、今も否定し続けている。

「……それじゃあ悩みは解決しないし、誰も救われないじゃない。」

そして、雪ノ下は俺の言葉を聞いて、何か思いつめたような表情になり、そう言った。きつと普通なら怯むような鬼気迫る表情なのだろう。

だが、俺は怯まない。

『救う』ねえ。じゃあ、俺をその救う対象の『誰も』に含めんな。」

雪ノ下は俺を睨んでくる。しかし、俺はそれを軽く受け止め、見つめ返した。

当然だろう。俺に気づいてすらいのないのだから、救うなんてできるはずがない。

俺たちの険悪になった、いや、もとより険悪だった雰囲気のを和らげたのは平塚先生だった。

「二人とも落ち着きたまえ。」

君たちの言いたいことは分かった。なら勝負だ。」

「はい?」

「古来よりお互いの正義がぶつかったときは勝負で雌雄を決するのが少年マンガの習わしだ。」

「いや、何言ってるんすか。」

俺が呆れていると、雪ノ下が口を開く。

「勝負、というの?」

あれ?こいつノリノリじゃねえか。

「端的に言うなら、どちらがより奉仕活動に従事できるかだ。基準は私の独断と偏見だ。構わないかね?」

「ええ、構いません。」

「拒否権は……。」

「全校生徒が……。」

「……ですよね。」

分かつてましたよ、そんなこと。

「何かメリットを用意せねばならんな。勝ったほうが負けたほうになんでも命令できる、というのはどうだ?」

「もうなんでも構いませんよ。」

「問題ないです。私が負けるはずありませんから。」

若干ヤケクソ気味な俺に対して、雪ノ下はやる気満々だ。

そんなに俺のことが嫌いだよ。

まあ、さっきのやり取りから考えると当然だが。

「それでは、まあ適当に妥当に頑張りましたまえ。」

平塚先生はそう言い残すと教室を後にした。

残されているのは俺と、とつても不機嫌そうな表情をした雪ノ下だけ。

「まあ、無駄だとは思いうけれど、張り合いがないと面白くないから頑張りなさい。」
雪ノ下がなぜ勝ち誇った表情でそう言った。

「はいはい。」

こいつ、真性の負けず嫌いだな。

そして、雪ノ下も教室を後にしようとドアへと向かう。

もちろん、別れの挨拶なんてない。

しかし、颯爽と去ろうとする雪ノ下を呼び止め、俺はここまで彼女と話して感じたことを伝える。

「なあ、雪ノ下。」

「なにかしら?..」

俺が彼女と会話した中で分かった彼女の性格。

嘘が大嫌いで、負けず嫌い。

皮肉屋で、その言葉はナイフのように鋭く、容赦なく相手の心を抉る。

きつと、平塚先生は俺と雪ノ下を会わせれば、その正直さと嘘つきが混ざり合い、ちょうど良くなるでも思ったのだろう。

それは見当違いだ。

暖気と寒気はぶつかってもすぐには混ざらず、明確な境界線を作り、混ざり合うこと

はない。

だから、俺と雪ノ下が混ざり合うこともない。

お互いがお互いを糾弾し両極端に分かれるのが関の山だろう。

だから、俺はこの言葉を彼女にかける。

「お前とは友達になれないな。」

「奇遇ね。同感よ。」

そして、雪ノ下は部室から出て行った。

e p. 3そして由比ヶ浜結衣は知らぬまま

奉仕部に入った翌日の放課後、俺は教室に残り、談笑していた。

「最近、だんだん暑くなってきたじゃん？このまま夏になったらマジ部活がヤバイわー。」

汗かきまくりでヤバイわー。」

「暑いからって部活サボんなよ？」

「それにさつきからお前、ヤバイしか言ってるねえぞ。」

「それな。」

「それあるわー。」

「うわー、マジ隼人君とハチきびしーわ。」

まあ、今年は俺ら、マジで全国狙ってるから。」

「お、なら今日は練習量二倍にするか。」

「え？ちよつ、それはヤバイって。」

戸部が何か話題を振り、俺と葉山が反応して、大岡と大和が相槌を打つ。

いつもの日常。いつもの会話だ。

こんな無意味な、偽物のコミュニケーションで俺たちの関係は成り立っている。

それでいいと割り切ったはずの俺だったが、なぜか今日は妙に馬鹿馬鹿しく思えてしまい、何気なく廊下の方を見る。

「あーし今日、フォーティンワン行くんだけど、姫菜と結衣も行くよね？」

「いいよー。今日はダブルが安いんだっけ？」

「そうそう。あーしシヨコラとチヨコが食べたい。それで、結衣は？」

「ごめん、優美子。今日、ちよつと外せない用事があるんだ。」

「えー、そうなん？じゃ、じゃあ隼人は？」

「悪い、今日は部活あるからさ。」

「隼人も来れないの？じゃあハチは？」

「……………」

「ハチ？」

「ヒツキー？」

三浦と由比ヶ浜の呼びかけに俺ははっと気づいた。

「……………つは。わ、悪い、実は俺も部活に入っけ、また今度にしてくれ。埋め合わせはするから。」

「ヒツキーが部活？」

「おう、また明日話すから！」

そして俺は教室を飛び出す。

ヤバイ、話全然聞いてなかった。何の埋め合わせをすればいいんだろう。

でも、仕方ねえだろ。平塚先生が鬼の形相で教室のドアに張り付いてたんだから。

……今度からは止めてもらうように頼もう。

明日、あいつらに部活のこと話さなくちゃならねえのか。

……はあ。

俺は心底めんどくさいと感じながら、何も書かれていないネームプレートを見上げる。

後二、三日の辛抱だ。

そう自分に言い聞かせて俺は部室のドアを開けた。

教室の中には昨日と寸分違わぬ位置と姿勢で雪ノ下が本を読んでいた。

あいつはいつもこうして一人で本を読んでいるのだろうか。だとしたら羨ましいことこの上ない。

俺は雪ノ下には声をかけずにはす向かいの椅子に腰掛ける。

そして、バッグから本を取り出し、読もうと思った瞬間、彼女が声をかけてきた。

「人に会ったら挨拶、とご両親から習わなかったのかしら？ 非礼谷君。」

「集中してる人には話しかけるな、と習わなかったか？雪ノ下。」

後、お前は俺の名前に恨みでもあるのか？」

「いえ、恨みはないわ。ただ、聞くと虫唾が走るわね。」

「全力で嫌悪してるじゃねえか。一体比企谷の何がお前をそこまでさせてるんだよ。」

「それは自分の心に聞いてみることもね？」

「何もやってねえよ。俺はお前に嫌われるようなことをした覚えがない。」

それともあれか、俺の存在がっていうことか？」

「ノーコメントよ。」

「それ、イエスって言うてるようなもんじゃねえか。」

雪ノ下は満足気に微笑むと、再び手元の文庫本に目をおろす。

俺もそれに合わせて本を読み始める。

沈黙。

それも気まずいものではなく、心地の良い沈黙。

話題を広げる必要も、取り繕う必要もない空間。俺が今までの学校生活で得られなかったものだ。

すぐに退部するつもりだと分かっているもこの環境は惜しいと感じざるをえない。

この心地よい沈黙に身を任せて、俺は本を読み始めた。

三十分ほどたったただろうか。

静寂を破ったのは俺だった。

「なあ、ずっと本読んでていいのか？一応部活なんだから、これ。」

さすがに本を読んでいるだけの部活動というのはいささか問題があるのではないかと思う。

「基本的に依頼者が来るまでは何もしないわ。依頼者は大抵、平塚先生が連れてくる

のだけけど。」

そう言つて雪ノ下が俺をちろつと見る。

俺も例外ではない、というわけだ。

「了解。つまり、誰か来るまで暇な部活つてことだな。」

「その言い方は少し不服だけれど、否定はできなわね。」

そこで雪ノ下は一度言葉を区切った。

そして、俺のいる方に向き直り、真剣な表情になる。

「ねえ、比企谷君。あなたはこの前——」

コンコン。

しかし、雪ノ下が何か言おうとしたその時、部室のドアがノックされた。

雪ノ下はため息をついて、座り直す。

そして、こほんと小さく咳をした後、ドアの向こうにいるであろう何者かに向けて声をかける。

「どうぞで。」

彼女の声に反応して、ゆっくりとドアが開く。

入ってきたのは、明るい茶髪で、少し制服を着崩した俺のよく知る少女。由比ヶ浜結衣だった。

「し、失礼します。」

おずおずと彼女が部屋に入ってくる。

さて、どうしたものか。

「平塚先生に言われて来たんですけ………どう？」

ど、どうしてヒッキーがここにいるの？」

「放課後、言っただろ。部活に入ったって。それがここなんだよ。まあ、とりあえず座れよ。」

結局、俺はいつも通り彼女に接することにした。

雪ノ下がいる方向から嫌悪に満ちた視線を感じるが、無視して俺は由比ヶ浜に椅子をすすめる。

「あ、ありがとう。ヒツキーが入ったのって奉仕部なんだ。優美子、怒ってたよ？今度絶対奢らせるんだって。」

「悪かったな、突然出て行つて。まあ、奢るくらいなら大したことはないか。」

何を奢ればいいのだろうか……。

由比ヶ浜と俺が話していると背後から雪ノ下がせきばらいをする。

いい加減本題に入りたいようだ。

「2—F由比ヶ浜結衣さんね。あなたは どうしてここに？」

「……平塚先生から聞いたんだけど、ここって生徒のお願いを叶えてくれるんだよね？」

かすかな沈黙の後、由比ヶ浜はそう切り出した。

しかし、雪ノ下は彼女の淡い願いを冷たく突き放す。

「少し違うかしら。あくまで奉仕部は手助けをするだけ。願いが叶うかどうかはあなた

次第。」

「どう違うの？」

怪訝な表情で由比ヶ浜が問う。

まあ、今の説明で由比ヶ浜が理解できると思わないので、一応俺がフォローを入れておく。

「飢えた人に魚を与えるか、魚の獲り方を教えるかの違いだ。ボランティアってのはそ

う言った方法論を与えるもので、結果のみを与えるわけじゃないんだ。

つまり自立を促すってことだな。」

俺も雪ノ下から明確に聞いたわけではないが、大体これで合っているはずだ。

それに、雪ノ下の私が説明するつもりだったのにと言わんばかりの恨みがましい視線を感じるので間違っていないようだ。

そして、俺の説明を聞いた由比ヶ浜というと。

「な、なんかすごいねっ！」

相変わらず純心というか、単純というか……。

悪い宗教に引っかけたりそうで心配だなあ。

俺が慈愛の目で由比ヶ浜を見つめている一方で、雪ノ下は冷たい目で彼女を射抜く。「必ずしもあなたのお願いが叶うわけではないけれど、できる限りの手助けはするわ。」

その言葉で本題を思い出したのか、由比ヶ浜はあつと声を上げる。

「あのあの、あのね、クツキーを……。」

言いかけて俺の顔をチラツツと見る。

あー、はいはい。俺がいると話しづらいですね。

「ちよつと飲み物買ってくる。雪ノ下さん、何がいい？」

「私は『野菜生活100いちごヨーグルトミックス』でいいわ。」

「了解。由比ヶ浜は？」

「あ、あたしは大丈夫だよ。」

「分かった。んじや、行ってくる。」

パシリを自ら買って部屋から退散する。

さて、由比ヶ浜の依頼はなんだろうか。

とりあえず、話が終わるまでにMAXコーヒーと野菜生活と紅茶でも買ってくるか。

俺が部屋に戻ってくるとちようど話が終わったところのようだった。

とりあえず俺は二人に飲み物を手渡す。

すると由比ヶ浜はポシエツトみたいな小銭入れから百円玉を取り出す。

「別にいいよ。」

紅茶一本程度で文句を言う俺ではない。

というか、雪ノ下さん。あなたは金を出す素振りすら見せずに飲み始めるんですね。

いや、別にいいんだけどさ。

「……ありがと。」

「ああ、気にすんな俺が勝手に買ってきたものだ。

それで、話は終わったのか？」

「ええ、あなたがいないおかげでスムーズに話が進んだわ。ありがとう。」

ついでに活動にも俺が必要なければ楽なんだけどな。

心の中でそう思いながら、俺は爽やかな笑みを浮かべる。

「手厳しいな、雪ノ下さんは。それで、俺はどうしたらいい？」

仕方ないだろ。お前にだけやけに扱いが適当だったら怪しまれるじゃねえか。

だから、そんな汚物を見るような目で俺を見るな。

「……………家庭科室に行くわ。比企谷君も一緒にね。」

「家庭科室？由比ヶ浜がなんか作るの……………か？」

自分でそう言いながら思い出す。彼女の料理の腕を。

あの葉山隼人ですら撃沈させた恐怖の鍋パーティーを。

「うん、クッキーを作るんだ。……………お世話になった人に渡そうと思って。」

「そ、そうか。まあできる限りのことはする。」

俺、死なないかな。

そんなことを考えながら、俺はさっさと部室から出て行く雪ノ下に着いて行つた。

家庭科室に着き、雪ノ下と由比ヶ浜がエプロンを着る。

うん。制服にエプロンというのはいいものだ。むしろ最強の組み合わせかもしれない。

い。

「どうでもいいことを考えながら二人を見ていると、雪ノ下が冷ややかな目線を送ってくる。」

「え、えつと、俺は何をしたらしいのかな？」

「あなたは味見係よ。クッキーが焼きあがるまで隅っこで座っていなさい。」
「分かった。」

こいつ、ピンポイントで俺の心を抉ってくるの上手すぎだろ。

そんなことばかり言われたら八幡泣いちやうよ？

密かに傷ついている俺をよそに雪ノ下と由比ヶ浜はクッキーを作る準備を始める。

俺も備え付けのエプロンを着て、料理をする準備を始める。愛する我が妹のためにお菓子でも作ろうという魂胆だ。

「座っていなさいと言ったはずだけれど。」

「いや、座って待つているよりかは、何かした方が気が楽なんだよ。気に障ったのなら謝る。」

俺が視界の端で何かしているのが気に触るのか、雪ノ下が文句をつけてくるが、俺はそれを適当にあしらう。

「ヒツキーって料理できるの？」

「ちよつとだけだけだな。マカロンでも作って家に持って帰ろうと思ったんだよ。」

「マカロン作るの!？」

あー、そういうえば一昨日くらいにマカロン食べたってこいつ言ってたな。

「由比ヶ浜の分も作るか？」

「うん! ありがと、ヒツキー。あ、でもこれじゃあ……。」

由比ヶ浜が元気に返事した後、ブツブツ何か言い始めたが、放っておくことにする。

それよりも、小町と由比ヶ浜、それに雪ノ下。三人分か……。材料足りるかな？

俺のマカロンと由比ヶ浜のクツキーが焼きあがったのはほとんど同時だった。

そしてそれらが机の上に並べられる。

かたや色鮮やかで美味しそうなマカロン。

かたや真つ黒なホットケーキみたいなもの。いや、木炭だなこれは。

「な、なんで?」

由比ヶ浜が愕然とした表情で木炭を見つめている。

「理解できないわ……。どうやったらあれだけミスを重ねることができるのかしら

……。」

雪ノ下が呟く。

というか、まじでこれを味見するのか？

死ぬぞ、俺が。

「と、とりあえず、こつち食べながら問題点を洗い出そうぜ。」

自作のお菓子を勧めて、味見のことを忘れさせようとする作戦だ。

当然、この作戦に由比ヶ浜はすぐにひっかかる。

「いったきまーす。……うまつ！何これ、お店で売られてるやつじゃん!？」

昔から親がないときは俺が飯を作ってたからな。慣れてるんだよ。

雪ノ下もどうだ?」

「ええ、後でいたたくわ。比企谷君。先にこつちを食べるわよ。」

雪ノ下が神妙な面持ちで指差すのは由比ヶ浜作の木炭。

「まじでこれ食うのか?」

「ええ、彼女のお願いを受けたのは私よ?責任くらいとるわ。」

そう言つて雪ノ下は皿を自分の側に引き寄せ、黒々とした物体をひとつ摘み上げる。

「……死なないかしら?」

「俺が聞きてえよ。」

そう言いながら由比ヶ浜の方を見ていると、由比ヶ浜は仲間になりたそうな目でこちらを見ている。

……ちようどいい。こいつも食べばいいんだ。人の痛みを知れ。

結果から言うと、由比ヶ浜のクッキーはギリギリ食べれた。

吐き出すような不味さではなく、リアルな不味さだった。

「うう、苦いよ不味いよ。」

「なるべく嘔まずに流し込んでしまった方がいいわ。舌に触れないように気をつけて。劇薬みたいなものだから。」

さらりとひどいこと言うなこいつ。

なんとか由比ヶ浜のクッキーを食べ終えて、雪ノ下が口を開く。

「さて、じゃあどうすればより良くなるかを考えましょう。」

「……………」

「……………」

正直、由比ヶ浜が二度と料理をしないってのが一番いいと思うが、口が裂けても言えねえな。

俺たち二人が黙っていると、雪ノ下がふうつと短いため息をついた。

「……………なるほど。解決方法がわかったわ。」

「どうするんだ？」

「努力あるのみ。」

「それ解決方法か？」

「やっぱりあたし料理に向いてないのかな……。才能ってゆーの？そういうのなし。」

由比ヶ浜ががつくりと肩を落として深いため息をつく。

その姿に雪ノ下が即座に反応した。

「才能がない？まずはその認識を改めなさい。最低限の努力もしない人間に才能がある人を羨む資格はないわ。成功できない人間は成功者が積み上げた努力を想像できないから成功しないのよ。」

雪ノ下の言葉は辛辣だった。そして、反論を許さないほどにどこまでも正しい。

由比ヶ浜もここまで直接的に正論をぶつけられた経験なんてないだろう。その顔には戸惑いと恐怖が浮かんでいる。

そしてそれを誤魔化すように由比ヶ浜はへらつと笑顔を作った。

「で、でもさ、こういうの最近みんなやらないって言うし。……。やっぱりこういうの合っていないだよ、きつと。」

……。これだ。

由比ヶ浜の最も嫌いなところ。周囲に合わせようとして自分の意見を何も言わない。

そこが彼女が一番嫌いなところだ。

俺の嫌いとするところは雪ノ下にも共通だったようで、彼女の表情には嫌悪感がありありと浮かんでいる。

「……その周囲に合わせようとするのやめてくれるかしら。ひどく不愉快だわ。自分の不器用さ、無様さ、愚かしさの遠因を他人に求めるなんて恥ずかしいの？」

雪ノ下の語調は強い。もちろん、由比ヶ浜はそれに気圧されている。

さて、この後どうやって由比ヶ浜を慰めるかな。

由比ヶ浜は少しの沈黙の後、か細い声を漏らす。

「か……」

帰る、とても言うのだろうか。

まあ、彼女の性格からしたらありえそうだが。

「かっこいい……」

「は？」

「建前とか全然言わないんだ……。なんていうか、そういうのかっこいい……」

由比ヶ浜が熱っぽい表情で雪ノ下をじっと見つめる。

当の雪ノ下といえればこわばった表情で二歩ほど後ろに下がっていた。

「な、何を言ってるのかしらこの子……。話聞いてた？私、これでも結構きついことを言ったつもりだったのだけれど。」

「ううん！そんなことない！あ、いや確かに言葉はひどかったよ。でも、本音って感じがするの。あたし、人に合わせてばっかだから、こういうの初めてで……。」

雪ノ下の正論から、由比ヶ浜は逃げなかった。

「ごめん、次はちゃんとやる。」

謝つてからまつすぐに雪ノ下を見つめ返す。

予想外の視線に今度は逆に雪ノ下が声を失った。

「……正しい作り方を教えてやれよ。由比ヶ浜はちゃんと言うことを聞くんぞぞ。」

俺はそれだけ言つて近くの椅子に座る。

きつと、この二人なら大丈夫だろう。

俺は安心しながら二人の作業を眺めていた。

大丈夫？

そう思っていた時期が私にもありました。

由比ヶ浜の料理スキルは俺の想像を絶するものだった。

雪ノ下がどれだけ注意しても卵に殻は入るし、分量は間違える。きつと、彼女が料

理に向いていないのは事実なのだろう。

そして完成したクッキー。

最初ほどは悪くない。

クツキーと呼んでいいレベルのものにはなっているだろう。

しかし、由比ヶ浜も雪ノ下も納得がいかないようだった。

「……どう教えれば伝わるのかしら？」

「……なんでもうまくいかないのかなあ……。言われた通りにやってるのに。」

はあ、そろそろ助け舟を出しますか。

俺は立ち上がって二人に声をかける。

「なあ、なんでお前らはうまいクツキーを作ろうとしているんだ？」

「は？人にあげるんだから美味しい方がいいに決まってるじゃん。」

由比ヶ浜がこいつ馬鹿か、と言わんばかりの表情で俺を見る。

「お前が誰にこれをあげるかは知らないけど、男にあげるんだろ？」

「……えっと、その……うん。」

由比ヶ浜が躊躇しながらも肯定する。

「せっかくの手作りクツキーなんだ。手作りの部分をアピールしなきゃ意味がない。店と同じようなものを出されたって嬉しくないんだよ。むしろ味はちよつと悪いくらいの方がいい。」

雪ノ下は俺の言葉に納得がいかないようで、聞き返す。

「悪い方がいいの?」

「ああ、そうだ。上手にできなかったけど、一生懸命作りましたっ! つてところをアピールすれば、男心なんて簡単に揺れるんだ。

男は残念なくらい単純なんだよ。」

俺がそう締めくくると、由比ヶ浜が不安げな表情で俺に問うてくる。

「……ヒッキーも揺れんの?」

「そうだな、揺れるぞ。超揺れる。」

「そ、そっか……。」

俺の適当な返事に由比ヶ浜は小さく返事をした後、鞆を掴んで帰ろうとする。

その背中に雪ノ下が声をかけた。

「由比ヶ浜さん、依頼の方はどうするの?」

「あれはもういいや! 今度は自分のやり方でやってみる。ありがとね、雪ノ下さん。」

振り向いた由比ヶ浜は笑っていた。

「また明日ね。ばいばい。」

手を振って、由比ヶ浜は今度こそ帰って行つた。

雪ノ下はドアの方を見つめたまま眩きを漏らす。

「本当に良かったのかしら。」

「本人がそれでいいって言ってんだ、これでいいんだよ。」

「そうかしら……。」

「そうだ。」

雪ノ下の不安げに呟きに、俺は確信を持って答える。

どうせあのクツキーをもらうのは俺なのだから。

俺は人の好意には敏感になった。人気者を演じるようになってから告白されたことも何度もある。

だから、きっと由比ヶ浜は俺に好意を向けている。

けれど彼女が恋しているのは俺の外面であり、仮面だ。

手作りクツキーをあげようと、その恋が実ることはない。

そんなことを考えていると、雪ノ下が話しかけてきた。

「それにしても、あなたって話し方は変わってないのに、どうして由比ヶ浜さんがいるときに話すときはあんなにも爽やかに聞こえるのかしら。」

「さあな。人に合わせる内にこうなったんだよ。」

「人に合わせる……。あなたと由比ヶ浜さんって似ているのかもね。」

「ばっか、全然似てねえよ。あいつは変わろうとしてんだ、俺よりよっぽど偉い。」

「そうね、精神的に向上心のないものは馬鹿だって言うもの。」

「次は『こころ』かよ。まあ、実際俺に向上心はないんだけどな。

それじゃあ、俺も帰るわ。」

俺はそう言い残して家庭科室を出る。

夕焼けに染まる廊下を歩きながら、俺は先ほどの会話を思い出す。

俺と由比ヶ浜が似ている……か。

現時点では似ているかもしれないが、きつとこれから由比ヶ浜は変わっていくのだろう。今日の雪ノ下との関わりで俺はそう感じた。

彼女の人に合わせる癖。俺が嫌いな彼女の癖も直っていくのだろう。

では、俺は。人に合わせ続けて生きてきた俺はどうなのか。変わろうとする思いも、向上心もない俺は、俺のことをどう思っているのか。

答えは簡単。

俺は俺のことが大嫌いだ、今も昔もずっと。

e p. 4やはり比企谷八幡は退部できない

由比ヶ浜の依頼を終えた後、俺はそのまま寄り道せずに帰宅した。

「たでーま。」

「およ？遅かったね、お兄ちゃん。」

俺が玄関で靴を脱いでいると、妹の小町がトコトコ歩いてくる。

「部活に入ってたな。遅くなっちゃった。」

「え!?!お兄ちゃんが部活!?!何部なの?」

うお、めっちゃ食いついてきた。

適当にはぐらかすか。奉仕部の説明とか面倒くさ過ぎる。

「また後で教えてやるよ。それよりも、ほれ。マカロンだぞ。」

注意を逸らそうと小町の眼前にマカロンの入った袋を差し出す。

けれど、小町はなぜか神妙な顔つきになる。

「……料理部?」

「違うわ。いらんのか?なら俺が全部食うぞ?」

俺がそう言って袋を下げると、小町はあたふたし始める。

「いるいる、超いるから、食べるから！マカロン食べたいから！」
「ほれ。」

俺が袋を手渡すと小町はリビングへと戻っていった。
やっぱり家はいいものだ。

仮面を被る必要もないし、気を使う必要もない。

なにより小町がいる。

俺が安らげる唯一の場所だ。

おっと、感慨に浸っている場合じゃない。夕飯をさつきと作らなければ。

俺がリビングに入ると小町がマカロンをリスのように頬張っていた。

「一個だけにしとけよ。夕飯食えなくなるからな。」

「ふぁーい。」

「口に物入れながら喋るな、行儀悪いぞ。」

「はーい。」

鞆を置き、エプロンを着ながら今日の献立を考えていると不意に小町が話しかけてきた。

「何してるの？お兄ちゃん。」

「何って、夕飯をだな……。」

「夕飯なら小町が作つといたよ。帰ってくるの遅かったし。」

食卓に目をやると、美味しそうな料理が並べられている。

なぜ今まで気づかなかつたのだろう。きつと疲れてるんだ、そうに違いない。

「あー、悪いな。今日の当番俺なのに。」

ちなみに比企谷家の晩御飯は当番制である。

月曜から土曜までが俺。日曜が小町だ。

あ、別に俺が虐げられてるのではなく、小町が料理してケガする危険性を減らすために自分からこの割り当てを提案したのだ。

「いつも作ってくれてるんだから気にしないで。それよりも食べよ。お兄ちゃんが帰ってくるの待ってたんだから。あ、今の小町的にポイント高い。」

「はいはい、高い高い。」

その言葉自体は嬉しかったのだが、最後のポイントつてのが蛇足過ぎる。

俺は適当に返事しながらテーブルにつく。

小町は俺の反応が不満だったのか頬を膨らまして俺を非難してくる。

「むー、何その反応。ポイント低いよ?」

「だから何なんだよ、そのポイント制。というか、早く食うぞ。」

小町はまだ納得がいかなそうな表情だったが、おとなしくテーブルについた。

「いただきます。」

黙って飯を食べていると、小町が話しかけてくる。

「お兄ちゃんの作つてくれるお菓子はいつも美味しいけどさ、昔食べたあのお菓子も美味しかったな。」

「どんなお菓子か言えば作つてやるぞ?」

「えつとね………思い出せないなあ。お兄ちゃんが事故した時に犬の飼い主さんが持ってきてくれたものだったんだけど……。」

「おい、それ食べてねえぞ、俺。」

「………てへっ。」

そんな顔をしたからって許さな………かわいいから許す。

それにしても、懐かしい話を持ち出したな。

そう、俺は高校一年生の時に事故に遭っている。

入学式の日、ずっと続けている早朝ジョギングをしている時に、アホな飼い主が犬のリードを離して犬が車の前に飛び出したのだ。

その時は体が勝手に動いて、車の前に飛び出して犬を助けたのだ。

まあ、助けたと言ってもその時の記憶は全くなく、病院のベッドの上で聞いたことな

のだが。

そして俺は足の骨を折って、二週間入院することになった。二週間後に登校して、既にグループが出来上がっているところに割り込むのがどれだけ大変だったか……。

そういうえば、結局犬の飼い主の名前は聞いていなかったな。まあ知ったところでどうしようとも思わないが。

確か、車に乗っていたほうの名前は……。

そこまで考えたところで俺の思考は硬直した。

ああ、どうして今まで気づかなかつたのだろう。

自分の馬鹿さ加減に腹が立つ。会った瞬間に思い出してもおかしくはなかつたはずなのに。

車に乗っていたやつの名前は雪ノ下……だ。

「あら、来たのね。」

翌日の放課後、俺が部室に行くと既に雪ノ下が定位置で本を読んでいた。

「来て悪かつたな。というか、奉仕部に入ったことを説明すんに大変だったんだよ。」

本当、大変だった。

まあ、ずっと葉山たちからサッカー部に誘われているのにそれを押しのけて黙って奉

仕部に入部したのだから当然なのだが。

「大変ね。友達がいるというのは。」

雪ノ下が皮肉を込めて友達という部分だけを強調する。

「全くだ。」

友達なんて煩わしいだけだ。相手の顔色を伺い、気を使う偽物の自分を演じなければならぬ。

自分でこうすることを選んだのだが、それでも面倒くさいものは面倒くさいものなのだ。

「で、今日も依頼者が来るまで待機か？」

「そうね。」

「了解。」

短い言葉を交わした後、俺たちは手元の本を読み始める。

俺は文字列を目で追いながら、昨夜思い出したことを考える。

事故した相手が雪ノ下。

だが、俺の雪ノ下への接し方は変わらない。

そもそも、事故に遭った車が雪ノ下の家ものであったからと言って、あいつが乗っているとは限らないはずだ。

それに、乗っていたとしても俺がその車に轢かれたことなど覚えていないだろう。もしかすると、事故のことすら忘れてるかもしれない。

覚えていたとしても、正直どうでもいいというのか本心だ。あの事故は俺が飛び出したのが悪いのであって、あいつに非は全くない。

こんなことを気にする方が馬鹿に思える。

むしろ、こんな楽な部活を作ってくれたことに感謝しているまでである。

まあ、この楽な時間を過ごすのもそろそろ頃合いだけだな。

依頼を一つ受けて、その依頼者を納得させたのは俺だ。

そして、その活動を通して俺自身は何も変わらなかつたことをはつきりと平塚先生に伝えればあの人も諦めるだろう。

あの脅しはきつとはつたりだ。あの人は人の弱みを言いふらすような人ではないはずだ。

結局、なぜ平塚先生が俺を脅してまでこの部活に入れようとしたのかは分からずじまいたつたが、元々、無理矢理入れられた部活だ。退部するのも多少無理矢理で構わないだろう。

……ただ、どうしても惜しいと感じてしまうのはこの環境だ。学校でみんなの『比企谷八幡』を演じなくていい唯一の場所を失うことが。

けれど、これはきつと甘えだ。自らこの道を選んだのにそれから目をそらすことはただの逃げであり、過去の自分を否定することになる。

「なあ、ゆきのし」「失礼しまーす。」

しかし、俺の言葉を遮り、不躰な挨拶が部室に響き渡る。

……奉仕部の依頼者というのは一々人の話を邪魔してからじゃないと入室できないのか？

誰だ、空気読めない奴は。戸部か？戸部なのか？明らかに女の声だったけど。

「えっと、邪魔しちゃったかな？」

入ってきた由比ヶ浜は俺の視線に萎縮して少し怖がっているようだ。

「い、いや、構わないぞ。それより何の用だ？」

危ねえ、今の目は素だった。突然入ってこられると咄嗟に反応できないな。

「そうね、あなたの依頼は完了したはずだけれど。」

雪ノ下は冷めた視線で由比ヶ浜を見つめる。

「あ、昨日のお礼をしにきたの。クッキー焼いてきたんだ！受け取ってくれる？」

……由比ヶ浜クッキー（毒物）を受け取るとか、何の罰ゲームですか？と、喉まで言葉が出るが、何とか抑える。

「あ、ああ。悪いな、わざわざ。」

「い、いえ、今日はあまり体調がすぐれないから……。」

あの雪ノ下が嘘をついてまで……。由比ヶ浜の料理スキルすげえ。

そんなことを考えている俺をよそに、由比ヶ浜は心配そうな表情で雪ノ下の顔を覗き込む。

その自然な行為に雪ノ下のATフィールドは簡単に突破されてしまう。

「どっか悪いの？大丈夫？」

そして、その距離の近さに雪ノ下は困惑する。

「え、ええ。大丈夫だから……ち、近いわ。」

「なら良かった！じゃあこれ！」

由比ヶ浜はにっこりと笑うとラップリングされはクツキーを雪ノ下に差し出す。

「え、ええ。ありがとう。」

「昨日頑張ったんだよ？ママに手伝ってもらってさ。あ、ヒツキーにも！」

由比ヶ浜が振り返って俺にもクツキーを渡す。

「お、おう。ありがとう。後で食べさせてもらおうわ。」

由比ヶ浜は俺の反応に満足げに笑顔を浮かべる。

そして、突然思いついたような顔つきになる。

「あ、そうだ！あたしも奉仕部に入っていない？」

……はい？

「あたし、ヒツキーたちのお手伝いしたいんだ。それに、ヒツキーがいるし……。」

尻すぼみになっていく言葉をよそに、俺は由比ヶ浜を聞いたです。

「は、入るのか？奉仕部に!？」

「うん、ヒツキーも続けるんでしょ？」

「お、おう。」

ダメだ。そんな言い方をされた後に辞めるなんて言ったら、飽きつぽいやつだと思われて俺の株が下がる。

それに、子犬みたいにウルウルした目で俺を見つめるな、由比ヶ浜。断れる気がしないだろう。

……なら。

「ゆ、雪ノ下?？」

最後の頼みの綱である雪ノ下に声をかける。部長が拒否すればまだ可能性はある。

「そういうことは顧問の先生に言うべきよ。ただ、私は構わないし、平塚先生も了承するんじゃないかしら。」

雪ノ下ああああ！

そうだった。こいつのATフィールドは由比ヶ浜にとづくに突破されているんだっ

た。

「……ヒツキーはあたしに入部して欲しくないの？」

俺の反応が不審だったからなのか、由比ヶ浜が不安そうに俺に聞いてくる。

はい！そうです。

なんて絶対に言えない。

もちろん、みんなの『比企谷八幡』は爽やかな笑顔を浮かべて言う。

「いや、嬉しいくらいだ。歓迎するぞ、由比ヶ浜。」

こうして、俺の奉仕部残留が決定し、自分を偽らなくても良いこの空間は崩れ去った。

e p. 5 然るに比企谷八幡は努力を否定せず

体育でテニスを選択した俺たちは五人でローテーションしながら打っていた。

「おーい、戸部。次交代だぞー！」

俺が声をかけると、ベンチに座っていた戸部は慌てて立ち上がる。

「わりー、今行くー！」

そして、ラケットを手にこちらに走ってきた。

「つーか、隼人君とハチだけレベル違うわー。なんつーか、次元が違うみたいなの？」

「それ、同じ意味だぞ？それよりも、ほらよ。」

相変わらず要領の得ない戸部の言葉を適当にあしらひ、テニスボールを投げ渡す。

「おお、サンキュー。それじゃ、行くべー！」

パコーン、と小気味良い音で戸部の打った球が飛んでいく。それを葉山がきつちり構えて打ち返す。

そのようにして、ボールが山形の軌道を描きながらコートを行き交う。

俺は元来テニスが嫌いではない。

一人でコートに立って、一人でプレーする。人に頼ることも頼られることもないあの

感覚は中々あじわえないものだ。

けれど、体育の授業でのテニスはなんてつまらないのだろう。

テニスが友達（笑）と仲良くぼんぼんとボールを飛ばすだけの競技に成り果てる。思いつきりでできないのも難点だ。

「次、サーブいくぞー。」

しかし、そんなことを考えている俺を他所に葉山が心底楽しそうにラケットを振る。

もちろん、俺も考えを表に出すこともなく、面白いもの見ているような表情でそれを眺める。

「すげー！今の球曲がったくね？魔球じゃん。まじばないわ。」

あー、うん。スライスかかったただだよね、すごいね。

「いや、打球が偶然スライスしたただだよ。悪い、ミスった。」

いや、今の明らかに狙って手首返してたよね？さらっと嘘つくよな、こいつも。

そんな馬鹿馬鹿しくも微笑ましい光景を見ると、突然隣から声をかけられる。

「ねえ、比企谷君。」

声をかけてきたのは戸塚彩加。女子の間では王子様なんて呼ばれている中性的な顔立ちをした男子だ。

彼と話したことはあんまりなかったはずだが。

「どうした、戸塚。何か用か？」

「えっと、今暇かなって。」

「ああ、暇だ。じゃあ俺と打つか？」

俺は戸塚の表情を見て、用件を察する。

ローテーションしているが、少しくらい抜けても大丈夫だろう。元々四人でびったりだしな。

「いいの？」

「ああ、構わないぞ。おい、ちよつと俺抜けるわ！」

コートにいる四人に聞こえるように大きな声で呼びかける。

「オツケー。」

「りょーかい！」

首尾の良い返事が返ってきたところで、俺は戸塚の方に向き直る。

「それじゃ、やるか。」

「うん！」

そして、俺たちは別のコートで打ち始める。

ふむ。確か戸塚はテニス部だったな。

初心者よりかは上手いと思うが、いささか体力面に問題があると言わざるをえない

な。

五分ほど打ち合ってそんなに息を上げているようであれば、一セットマッチするだけの体力としては心もとない。

「戸塚！そろそろ休憩しようぜ。」

そんな考察をしながら戸塚に声をかける。あまり無理させてもいけないし、俺を誘った理由も聞かなくてはいけない。

「ごめんね。僕体力ないんだ。」

戸塚がこちらのコートに歩いてきて、申し訳なさそうな表情をする。

そんな戸塚に、俺は爽やかな笑顔を浮かべて言った。

「気にすんなよ。とりあえず座るか。」

「ありがとう、比企谷君。」

俺がベンチに座ると、戸塚が隣に座ってくる。

「比企谷君凄いな。全然息上がってないや。」

「いや、戸塚が俺の打ちやすいところに打ってくれたしな。あまり動かなくてすんだからだよ。」

「そう……かな。お世辞でも嬉しいや。それにしても、比企谷君はテニス上手いな。」

なんていうか、僕がどんな球を打っても帰って来る球は全部一緒なんだよ。速さも回

転もすつごく安定してる。」

戸塚がキラキラした目で俺を見つめる。

あー、これはいつものパターンだな。

「それで、相談なんだけど。テニス部に入ってくれないかな？うちのテニス部員が少なくて、比企谷君が入ってくれるならみんなの刺激にもなるだろうし……。」

入部のお誘いに俺は考えることもなくいつもの返答をする。

「誘ってくれるのは凄く嬉しいんだけど、部活には入らないことにしてるんだ。」

俺が部活に誘われるのは珍しいことじゃない。

葉山たちからサッカー部に誘われるように、他の部活からも誘われることもざらだ。

だが、一度として部活に入ろうと自ら思ったことはない。

どこかの部活に肩入れして、今の環境を壊してしまう可能性もあるし、何より面倒くさい。

まあ、平塚先生のせいで奉仕部なんてものに入れられたのだが。

「……そっか。忙しいもんね。」

俺の答えを聞いて、戸塚は悲しそうな表情を浮かべる。

「ごめんな。でも、俺に手伝えることがあるならなんでも言ってくれ。できる限りのことはする。」

俺がそう言うのと戸塚は少し嬉しそうな表情になる。

「うん、ありがとう。比企谷君は優しいね。じゃあもう一回打つてくれないかな？」

「オーケー、お安い御用だ。」

俺はラケットを握りなおして立ち上がった。

「ー」ということがあったんだ。」

まだ由比ヶ浜が来ていない部室で雪ノ下に今日の体育の話をする。

「それで、私にその話をしてどうするつもりかしら？心変わりしてテニス部に入るとでも？」

「いや、テニス部に入るつもりはねえよ。ただ、強くなりたいてって言う戸塚の願いに対してお前はどうするのかと聞きたいだけだ。」

俺と正反対のこいつなら一体どのような解を出すのか興味がある。予想は大体ついてるけどな。

ちなみに俺の場合だと良いコーチを呼ぶか、部活を辞めて外のクラブに入るかだ。他人がやる気を出すことに期待などしない。

そして、俺の問いに雪ノ下は少し考えた後答える。

「全員死ぬまで走らせてから死ぬまで素振り、死ぬまで練習、かしら。」

やっぱり答えが予想通り過ぎた。こいつ絶対に友情・努力・勝利とか好きそうだな。

あ、友情は違うか。友達いないみたいだし。

「お得意の努力ってやつか？」

「そうね、努力すれば上手くなる。間違っではないと思うけれど。」

「ああ、間違っつてねえよ。正論だ。まあ俺は努力なんてしたくないけどな。」

「あら、あなたなら才能がないからーなどと言うと思つたわ。」

「才能がなくても練習すれば一定の結果は出せるんだよ。世界チャンピオンを目指すとかなら話は別だけどな。」

エジソンも言つてただろ、99%の努力と1%のひらめきだつて。」

「あれは1%のひらめきがなければ努力は無駄っていう意味よ?」

「知ってる。でも、天才になれなくても99%の努力さえすれば秀才くらいにはなれるだろ。」

「また屁理屈ね。あなたはそんなに駄々をこねるのが好きなの?」

「どうだかな。さて、そろそろ由比ヶ浜が来るはずだが。」

雪ノ下の言葉をあしらひ、ちらりと時計を見て彼女の到着を予想する。

ちなみに由比ヶ浜の入部は許可された。平塚先生も部員が増えることを望んでいたようだ。

それと、由比ヶ浜がいる場所では嘘をついても良いという許可ももらった。なんで一々許可を取らなくてはならないのだろうか。

そんなことを考えていると部室のドアが開いた。

「やつはろー！遅れてごめん。ってヒツキー、どうして先に行くし?!」
相変わらず元気だな、こいつは。

さて、俺もいつもの比企谷八幡に戻さないとな。

「いや、お前三浦達に入部したこと言ってる？そこで俺と一緒に行くのも変だと思ってるな。」

それで、あいつらにちゃんと話したのか?」

俺の問いかけに由比ヶ浜ががっくりと肩を落とす。

「ううー、まだ話してない。話しづらんだよー。」

「はあ。仕方ねえ、今度一緒に話してやるよ。」

すると先ほどの表情から一変、俺の顔を見て嬉しそうな表情になる。

本当にこいつは喜怒哀楽が激しい奴だ。だから見ていて楽しいのだが。

「マジで!?!ありがと、ヒツキー!」

「気にすんな。それで、由比ヶ浜。後ろにいるのは誰だ?」

さつきからチラチラと由比ヶ浜の後ろに人が立っているのが見える。顔が見えない

ので誰かは判別できない。

「あ！そうそう。あたしも部員として依頼人を連れて来ました！」

由比ヶ浜がわきに退いて、依頼人とやらの顔が見える。

……ふむ、これは少しまずいかもな。

「えっと、由比ヶ浜さんに連れられてきました戸塚彩加って言います。」

「よう、戸塚。」

とりあえず俺はいつも通り戸塚に接することにする。

「あれ？比企谷君って奉仕部の部員なの？」

「ああ、色々あってな。」

すると戸塚は不思議そうな表情になる。

「でもお昼に部活には入らないことにしてるって言ってたよね？」

あー、覚えてたか。さて、どう取り繕うか。

「この部活は兼部ができないんだよ。そのことを伝えようと思っても奉仕部って知らないだろ？だからあんな言い方になったんだ、悪い。」

俺の言い訳だらけの言葉を聞いた雪ノ下から凍りつきのような視線を感じる。

しかし、戸塚はそれに気づかないようで胸の前で両手を振ってこう言った。

「ううん、気にしないで。そういう理由なら仕方ないよね。」

良かった、戸塚が疑うことを知らないくて。

「それで、今日はなんでここに？」

そう言いながらここまで沈黙を保っている雪ノ下に目を向ける。

彼女は黙って戸塚を見つめていた。依頼内容を言うまでは沈黙を続ける気なのだろうか。

「えっと、由比ヶ浜さんからここに来ればテニスを強くしてくれるって言われたんだけど……。」

あー、由比ヶ浜にそそのかされて来たんだな。その言い方なら雪ノ下は納得しないだろうに。

そして、雪ノ下が口を開く。

「由比ヶ浜さんがどう言ったかは知らないけれど、奉仕部は便利屋ではないわ。あなたの手伝いをして自立を促すだけ。強くなるもならないもあなた次第よ。」

「そう……なんだ。」

落胆したようにしょんぼりと肩を下げる戸塚。

そんな彼をよそに雪ノ下は由比ヶ浜をちろつと睨む。

「へ？何？」

「何、ではないわ。あなたの無責任な発言で一人の少年の淡い希望が打ち砕かれたの

よ。」

雪ノ下の冷たい視線を由比ヶ浜は平然と受け止める。

「でもゆきのんとヒツキーならなんとかなるでしょ?。」

こいつ、中々雪ノ下の扱い方を分かっているな。

そんな挑発したような言い方なら……。

「ふうん、あなたも言うようになったわね、由比ヶ浜さん。そこの男はともかく私を試すような発言をするなんて。」

雪ノ下がニヤリと笑う。……まあそうなるとは思ったよ。

売られたケンカは全部買い、全部叩き潰すみたいになやつだからな。こいつは。

そして俺は収集がつかないかなので話をまとめる。

「と、とりあえず奉仕部として戸塚の技術向上を手伝うってことで良いか?。」

「ええ、構わないわ。戸塚君、あなたの依頼を受けるわ。」

「はい、お願いします。きつと僕が上手くなればみんなも頑張ってくれると思うし。」

戸塚が自分に言い聞かせるようにその決意を口にする。

残念だがそれは幻想だ。集団の中で一人だけ傑出した者がいれば他の全員がそれを排斥する。

集団とはそういうものなのだ。だから、才能ある者はそれを隠し周囲に溶け込むこと

が必要となる。

それをせずに周りを叩き潰したのが雪ノ下なのだが。

もちろん俺は彼の決意を踏みにじるようなことは言わずに彼に声をかける。

「よし、なら頑張るか！戸塚！」

「うん！」

戸塚の依頼から数日後。

「1……………2……………3……………もうだめえ。」

由比ヶ浜が腕立て伏せの体制から地面に崩れ落ちる。

その隣では戸塚が同じように地面に寝そべっている。

現在、戸塚のテニス技術向上に向けて練習中だ。

雪ノ下が筋力をつけるために腕立て伏せを戸塚にやらせているのだ。やれば痩せる

という文句を聞いて、なぜか由比ヶ浜も参加しているが。

「十回くらいは頑張ろうぜ、二人とも。」

「というか、ヒツキー凄すぎ。片手で腕立て伏せとかフツーできないよ？」

「そうね、服の上からはそんなに筋肉があるようには思えなかったけれど。」

「まあ、普段から結構やってるからな。よし、2000つと。」

ちなみに普段は背中の上に小町を乗せてやっている。

だから何も乗せてないとむしろ違和感があるのだが、雪ノ下に乗ってくれとは口が裂けても言えない。

「さて、次は何だ？ 腹筋か？」

「い、いえ。次はボールを投げるから戸塚君に打ってもらおうわ。」

「了解。なら俺がボール投げるわ。戸塚、そっちのコートで構えといってくれ。」

「うん、分かった。」

戸塚がネットの向こうに小走りで向かう。その間に雪ノ下が声をかけてくる。

「比企谷君、どうしてあんなに運動したのに息が上がってないの？」

「言っただろ？ 普段からやってるって。」

「腕立て200で息が上がらなくなる普段を私は知りたいわ。」

それじゃあ、この男が左右にボールを投げるから打ち返しなさい。」

雪ノ下が呆れたように呟いたあと、戸塚に声をかける。

「じゃあ行くぞー！」

そう言っただけでもボールを投げ始める。

しかし、10球ほど投げたあたりで戸塚の動きが見るからに悪くなる。ステップはできているから、やはり基礎体力が問題のようだ。

そんなことを考えながらボールを投げていると雪ノ下から指令が下る。

「比企谷君、もつも厳しいところに。」

「はいよ。」

雪ノ下の鬼の命令に忠実に従い、よりコーナーに向かって投げる。

するとすぐに戸塚の足が回らなくなり、最後には足がもつれてこけてしまった。

やばい、やりすぎた。

「戸塚！大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。ごめんね、心配させちゃって。」

「怪我はしてないか？」

「ちよつと足を擦りむいちゃった。」

見ると戸塚の膝に血がにじんでいる。

「雪ノ下、どうする？」

雪ノ下にそう問いかけると、彼女は小さくため息をついて言った。

「まだやるつもりなの？」

「うん、みんな付き合ってくれるから、もう少し頑張りたい。」

「……………そ。じゃあ、比企谷君。後は頼むわね。」

そう言い残して雪ノ下はコートから出て行った。

「呆れられちゃったかな……。いつまでたつても上手くならないし、腕立て伏せ五回しかできないし。」

それを見送った戸塚ががくりと肩を落としてそう呟いた。

まあ、それはないだろう。あいつが努力してるやつを見捨てることはしないはずだ。「それはないと思うよ。ゆきのん、頼ってくる人を見捨てたりしないもん。」

由比ヶ浜が俺の気持ちを代弁する。

「そう……。かな。」

「うん！だから、ゆきのんが帰ってくるまでもうちよつと頑張ろう！」

「分かった！」

由比ヶ浜が何も言わずにボールのカゴの前に立ち俺と交代する。

じゃあ俺は見物させてもらうとするか。

しかし五分後。

「飽きたー。ヒツキー代わって！」

由比ヶ浜はすぐに球出しに飽きたようでボールを持った両手を広げて不満を表す。

全く戸塚は不平も何も言っていないというのに……。

「仕方ねえな。」

由比ヶ浜のボールを受け取ろうと近づくと、戸塚が突然小さく声を上げた。

「……あ。」

「どうした戸塚?」

戸塚の視線の先を見ると、そこには三浦や葉山たちがこちらへ向かってきていた。

「あ、テニスしてんじやん、テニス!」

隣にいた海老名がこちらの存在に気付いたようで。

「あ、比企谷君と結衣達だ。」

「ハチと結衣もいるじやん。あーしらもここで遊んでいい?」

面倒くせえ。

どう対処すべきか。邪険には扱えんし、かといって参加させるのも戸塚の練習の邪魔になる。

なんで三浦達が来るんだよ……。

「悪いな、三浦。俺たち遊んでるんじやなくて戸塚の練習に付き合ってるんだ。テニスはまたスポツチャとかでやろうぜ。」

「なになに、奉仕部の活動つてやつなの? あーしも手伝うよ? 結衣も手伝ってるんでしょ?」

「いや、えつもあたしは部……員で……。」

そうか、まだ三浦達には入部の旨を伝えてなかった。

ちくしよう、雪ノ下が戻つて来てくれればあいつに丸投げできるのに……。

「手伝つてくれるのはありがたいんだが、戸塚に聞いてみないと。」

これが秘技・他人に丸投げである。

突然話を振られた戸塚は動揺した様子で言う。

「え？えつと、僕は比企谷君達に手伝つてもらつてるんだけど……。」

「え？何？聞こえないんだけど。」

葉山も三浦の好きにさせてるみたいだし、三浦も引き退る気はないみたいだな。

なら譲歩案を出すか。三浦がテニスできて、かつ戸塚にデメリットが起こらない方法。

「じゃあこうしよう。男女混合ダブルスで俺たちと三浦達で試合する。女子のシングルスだとこちらが不利すぎるからな。それで、勝つた方が今後の戸塚の練習に付き合う。どうだ？」

三浦ではなく葉山の目を見ながらそう言う。

三浦も葉山が納得すれば了解するだろう。

「うん、それでいいよ。お互い楽しめるしね。」

こっちは全然楽しくないけどな。

心の中で葉山に悪態を吐く。こいつ俺のこと嫌いすぎるだろ。こっちが困つてるの

分かつて何も言わないじゃねえか。

「こっちは俺と優美子でいいとして、そっちは比企谷と……姫菜か？」

「オツケー。私はいいよ。」

海老名か、まあ問題ないだろう。

由比ヶ浜はあんまり運動得意じゃないしな。

けれど、俺の考えを裏切って由比ヶ浜が口を開く。

「あたしが出るよー！」

由比ヶ浜が高らかにそう宣言したが、俺は由比ヶ浜に耳打ちする。

「おい、下手に三浦に敵対するなよ。それにお前テニス得意じゃないだろ？」

三浦は俺たちのグループの女王様であり、由比ヶ浜や海老名がそれに逆らうことはほとんどない。

だから、今回は葉山が指名した海老名が出るのが一番手っ取り早いのだ。

しかし、由比ヶ浜の決意は固いようで、真剣な表情になる。

「大丈夫だよ、ヒツキー。あたしも奉仕部なんだから。」

そう言った後、彼女は向き直り三浦に呼びかける。

「ごめんね、優美子。今まで黙ってたけど、あたしも奉仕部に入ったんだ。だから、ヒツキーの味方をさせてもらおうね？」

これからもしかしたらこんなことがあって、優美子達と一緒にはいられない時があるかもだけど、それでも友達でいられるかな？」

彼女の切実な訴えに三浦も少し面食らったようで返事するまでに時間がかかる。

「……ふ、ふうん、奉仕部に入ったんだ。ま、いいんじゃない。……あ！ちよつとこつち来て。」

「う、うん。」

少し不満げに話していた三浦だが、突然思いついたような表情になり、由比ヶ浜を呼び寄せる。

そして、何か隠し話をした後に、由比ヶ浜の背中を強く押す。

「頑張りなよ、結衣！」

こちらに戻ってきた由比ヶ浜は心なしか顔が赤いように見える。

あー、なるほど。そういう話か。

もちろん何の話などと聞くような無粋な真似はしない。

「さて、初心者が多いみたいだし、ルールはあまり厳密じゃなくてもいいよな？」

さつさと始めようと思ひ葉山に確認を取る。

「ああ、それでいい。戸塚、悪いけど審判してもらってもいいかな？」

「う、うん。いいよ。」

戸塚が試合の準備をしている間に俺は由比ヶ浜に確認を取る。

「テニス、やったことあるか？」

「えへへ、実は全然なんだ。」

「……はあ。やっぱりか。ならお前は前に立ってる。後ろで俺が打つわ。」

「ヒツキーに任せつきりになっちゃうと思うけどいいの？」

「大丈夫だ。それに、今は戸塚の依頼を達成することが優先だからな。頑張るぞ！」

「う、うん！」

そして俺はくるりと由比ヶ浜に背を向けて、自分の配置に向かう。

まあ、これくらい言っておけばあいつも前に立ってることに異存はないだろう。

それよりも、この試合をどうするかだ。

ぶっちゃけると勝つことは容易だ。

クラスで人気者になるために、体育でやるスポーツは大抵修めている俺にとって、由比ヶ浜がペアでもあいつらを瞬殺することは簡単だ。

けれど、それをやってはいけない。そんなことをすれば他の奴らに悪印象を与えるのは自明の理だ。

傑出した者は排斥される。

俺は大は小を兼ねるといふ言葉を信じて、誰にも負けなように練習したが、それを

見せつけてしまつては練習した意味がない。

なぜなら、俺は周りに合わせるために上手くなつたのだから。

ならば、負けるわけでも勝つわけでもなく、だらだらと試合を引き延ばして、雪ノ下の到着を待つのが一番だろう。

所属するグループが相手なので俺や由比ヶ浜は強く出られないのに対し、雪ノ下なら気にせずにあいつらを排除できるだろう。

方針が決まつたのとほとんど同時に、戸塚が審判台に座つてコールする。

「ゲームスタート」

さあ、持久戦の始まりだ。

e p. 6 されど比企谷八幡は努力せず

いつの間にかテニスコートの周りには多くのギャラリーが集まっていた。学校でも一二を争う目立つグループ同士のテニスの試合だ。人目を惹くのは当然だろう。

そして、そのギャラリー達から単人コールと八幡コールが囃し立てるように起こっている。

葉山を見るとそれに対して困ったような笑顔を浮かべている。俺も適当に手を振ってあしらひ、ラケットを構える。

試合は5ゲームマッチ、つまり3ゲーム先取である。

なぜ1セットでしかないかと言えば、時間がかかり過ぎるからだ。

三浦がニヤリと獰猛な笑みを浮かべてこちらを見る。

そういうえば、あいつはテニス部だったな。つまり、手加減はしないぞということだろう。

大丈夫だ、俺は手加減してやる。

短い気合いと共に三浦が鋭いサーブを放つ。女子にしては速い方だ。

俺はその球を正確にラケットの中心に捉え、葉山と三浦の中間地点に打ち返す。

決して速い球ではないので、葉山が素早く反応し打ち返してくる。葉山も初心者にしては十分上手い。

俺は先ほどと同じように適当に打ち続けて危なげなくラリーを続ける。そのうちに三浦がボールをネットにかけた。

さて、俺の方はこんな感じでいいとして、問題は由比ヶ浜のレシーブだ。

「サーブ返せるか？」

「うーん、頑張ってみるね。ヒッキーも頑張ってくれてるし！」

「あんまり気負うなよ。リラックスしてな。」

「うん、ありがと！」

そうは言ったものの、由比ヶ浜は正直あのサーブを返すことはできないだろう。初心者のましてや女子が打ち返せる球ではない。

そして、三浦が先ほどと同じようなサーブを由比ヶ浜の足元に叩き込む。

当然、彼女は反応できずに球は後ろのフェンスに突き刺さりこちらへと転がってくる。

「あうう……。ごめん、ヒッキー。」

由比ヶ浜が申し訳なさそうに謝ってくるがこちらとしては想定内だ。

「気にすんなよ。次、頑張ろうぜ！」

「……うん。」

ここで一本俺がミスをして、由比ヶ浜が同じようなミスを2回すれば、競ったような形で1ゲーム目を終わらせることができる。

そう思つて、次のレシーブはわざとネットにかける。

これで15―30。

この後由比ヶ浜がミスして、俺が1ポイント目と同じように取り、もう一度由比ヶ浜がミスをした。

そうして作戦は見事に上手く行き、計画通り1ゲーム目は葉山・三浦ペアのものとなつた。

2ゲーム目。俺のサーブだ。

もちろん、全力サーブを叩き込むようなことはできないので、相手がギリギリ拾える位置にサーブを打つ。

三浦がかろうじてその球を拾うが、その球は俺の目の前に山なりの軌道を描いて落ちてくる。

それ逃さず俺はその球を頂点で捉え打ち返す。もちろん彼らはそれに反応できず俺たちのポイントとなつた。

「ヒツキーすごっ！ テニスもできるんだ。」

由比ヶ浜が嬉しそうにこちらに駆け寄ってくる。

「たまたまだつっの。次はどうなるかわからんからちゃんと構えろよ。」

「うん！分かった。」

さて、こんな感じでこのゲームは取って、グダグダラリーを続けていたら時間は稼げるだろう。

予定通り試合は進み、2ゲーム目を取り3ゲーム目となった。

このゲームは1ゲーム目と同じような展開にしようと思っていたのだが、15—40、つまり由比ヶ浜の2回目のレシーブの時、不測の事態は起きた。

「……いったあ。」

由比ヶ浜がかるうじて葉山のサーブを返したまでは良かったのだが、その後三浦が打った足元への球を無理に返そうとしてこけてしまったのだ。

「大丈夫か!？」

俺は由比ヶ浜に駆け寄り手を差し出す。彼女は俺の手を取りなんとか立ち上がる。

「えへへ、大丈夫。」

由比ヶ浜が一人で立とうとするが、足に力が入らないのか膝から崩れ落ちる。

「大丈夫じゃねえだろ。海老名！由比ヶ浜を保健室に連れて行ってやってくれ！」

「分かった!」

由比ヶ浜が続行不可能なのを理解し、すぐに保健室に向かわせる。

「結衣、大丈夫?」

三浦もネット越しにこちらを心配する。

「うん、大丈夫だけど……。試合どうしよう……。」

「もう今日はやめておこう。結衣も怪我したしさ。俺たちは手を引いて、戸塚の練習は比企谷たちに任せよう。」

葉山が願ってもいない提案をする。俺としてはそれが最善なのだが……。

「いや、続けよう。俺一人でする。」

由比ヶ浜がすぎるような目つきでこちらを見てくる。そんな目で見られて試合やめますなんて言えないだろうが。

「はあ?一人で?」

「ああ、やる。由比ヶ浜、心配せずにとっとと治療してこい。」

三浦がこいつアホだろみたいな目で見てくるが気にせずに由比ヶ浜に声をかける。

「うん、ありがと。ヒツキー。」

そうして由比ヶ浜は海老名につられてコートから出て行く。

さて、試合の続きだ。皮肉なことに由比ヶ浜が離脱したことで俺としてはやりやすく

なつてしまったのだが。

だが、今ので俺が勝たねばならないような雰囲気の流れてしまっている。本気、とまではないがこの試合は勝たなくてはならない。

そう意気込んでラケットを構える。

するとその瞬間、ギャラリーのどよめきが聞こえた。

その方向を見ると、そこには俺が待ちわびた雪ノ下がいた。

でも少し遅すぎるぞ、雪ノ下。

俺の恨みがましい目を華麗にかわして雪ノ下は平然な表情で言う。

「これは一体何の騒ぎかしら。それと比企谷君。相手はダブルスなのにあなたは一人なの？」

それとも組んでくれる人がいなかったのかしら？」

「さつき由比ヶ浜が怪我してな。変則ダブルスになったんだよ。だから雪ノ下、俺と組んでくれ。」

さつきまでは雪ノ下にあいつらを説き伏せてもらうつもりだったが、さきほどの安っぽいドラマのせいで勝たねばならなくなったので方針を変更する。

それに、雪ノ下はもとよりプレイするつもりだったのかラケットとテニスウェアを装着済みだ。

そして、俺の言葉を聞いた雪ノ下は三浦たちをちらつと見た後答える。

「そうね、私の部員たちがお世話になったみたいだし、相手してあげましょう。」

「ありがとう。」

雪ノ下の了承を得たところで、再び構え直す……が。

「そこを退きなさい。私が打つわ。」

「は？次は俺のレシーブだぞ？」

「もともと正規のルールではないのでしょう？なら先に私が打つまでよ。」

俺の返事も聞かずにさっさと雪ノ下は俺の立ち位置を奪う。まあ、どっちで打とうとも俺は問題ないけど……。

「雪ノ下さん、だっけ？悪いけどあーし手加減とかできないから。」

やっぱり三浦はご立腹のようだ。身内同士の試合の中に突然他人が入ってきた上とその傍若無人な振る舞いを見て頭にきたようだ。

けれど、雪ノ下は悪びれる様子もなく。

「あら、大丈夫よ。私は手加減してあげるから。」

「……っ！」

三浦が本格的に怒り始め、雪ノ下へ全力のサーブを叩き込む。しかし、雪ノ下はその球に臆することなく小さくテイクバックした後、居合切りのようにラケットを振り抜い

た。

そしてその球は直線を描き、二人の間に突き刺さった。

へえ、なかなか上手いじゃねえか。

「お前、テニスできたんだな。」

「少なくともあなたよりね。それよりもさっさと構えなさい。」

「はいよ。」

この調子なら俺が何もしなくても勝てそうだな。

その後、3ゲーム目を当然のように雪ノ下が取った後、4ゲーム目に彼女はジャンピングサーブを打ち、サービスエースを一気に2本とった。

「そのまま決めてくれよ、雪ノ下。」

後2ポイント。相手が彼女のサーブが取れるとは思わないので勝ったも当然だろう。

しかし、次の雪ノ下のサーブは先ほどの面影もなく、放物線を描いて相手のコートに落ちる。

「っあー！」

三浦の気合と共に鋭いレシーブが雪ノ下の方に返ってくるが、雪ノ下はラケットを支えにして立っているだけで球を返せない。

「……決められたらいいのだけれど、どうやら体力の限界のようね。」

雪ノ下は心底悔しそうな表情でそう言った。

こいつ体力なさすぎるだろ。まだゲームくらいしかやってないぞ。

「マジかよ。仕方ない、俺がサーブする。」

俺は雪ノ下からボールを奪い、サーブを打とうとするが雪ノ下に肩を掴まれる。

「待ちなさい。あなた分かってているの？私の代わりにサーブを打つのよ？」

それなのにそんなに手を抜いたプレイで私が納得するとも思っているのかしら。

そろそろ本気を出したらどう？」

「……バレてた？」

雪ノ下に見抜かれた俺は周りに聞こえないように雪ノ下にささやく。

「当然よ。あんな腑抜けたプレイ。見ていて腹が立ったわ。やるなら本気でやりなさい。」

「い。」

そう言い残して雪ノ下は三浦たちの方向を向く。

「今からこの男が試合を決めるから黙って見ていなさい。」

「はあ？」

「……。」

雪ノ下の言葉を聞いたギャラリーが喜び、八幡コールがコートに響き渡る。

そんなテンションの上になっている周りに対してコートの中の三人は冷めきっていた。

「何言つてんの？ハチが上手いのは確かだけど、あんた狙えばすぐ勝てるんだけど？」

三浦が不機嫌そうに雪ノ下に呼びかけるが、当の彼女は不敵な笑みを浮かべたまま挑発的に言う。

「いいから黙って見ていなさい。」

そして雪ノ下は俺に向かって小声で言う。

「ここまできたら引き下がれないでしょう？」

「はあ……わかったよ。」

俺はため息をついてそう言った。

「お前はなんで大会に出ないんだ？」

昔、そう問われたことがある。

「クラブで一番強いのはお前なのに、お前は他の奴らが負けるのを見て楽しんでるのか？」

そう言われたこともあつただろうか。

周りの連中から疎まれ、蔑まれ、嫌われても、俺の答えはいつも同じだった。

「俺は勝つために練習しているんじゃない。」

「じゃあなんのために？」

続けざまにそう聞かれても俺は同じ答えを返す。

“人に合わせるためだ。だから、大会に出て勝ったとしてもなんの得にもならない。
と。”

柄にもなく昔のことを思い出した。

俺がこうなると決意してから数年間は勉強、スポーツ、話術など人気者になるための技術を習得した。

あの頃は地獄のような日々だと思っていたが、今となつてはいい思い出だ。

だけど、あの頃の俺もこんな状況に陥るとは思わなかつただろう。

学校の素人相手に本気でプレイすることになるとは。

別に雪ノ下の煽りがあつたからではない。

怪我をしてまで頑張ってくれた由比ヶ浜やあんなに疲れるまで打ち続けた雪ノ下。

そんな彼女たちから託された球を持った俺が何も感じないほど人格が終わつていないというだけだ。

たった2ポイントだ。手を抜いていたのかと聞かれても適当にごまかせばなんとかなる。

俺はボールを数回地面につき、息を吐き出しサーブのフォームに入る。

いつの間にかギヤラリーたちは静まり返り俺の持っているボールに注目している。

俺はトスを高く上げた後、上半身を弓のように反らす。膝を限界まで縮め、トスが最高点に達した瞬間、縮めきった筋肉を一気に伸ばし、高くジャンプする。

腕を振り上げ、自分が到達できる最高点でボールを捉え、思いつき叩き落とす。

フラットサーブ。無回転のサーブで俺が打てる最も速いサーブでもある。

俺の打球は弾丸のように飛び、三浦のコートに突き刺さる。そこにはくつきりとボールの跡が残り、砂煙が上がる。ボールは三浦の後ろのフェンスに当たり、フェンスの網にめり込んだ。

もちろん三浦は一步も動けないままだった。

俺がふう、と息を吐き出した瞬間、ギヤラリーたちから大きな歓声が上がった。

「すげー、今のサーブ見えなかったぞ！」

「200キロくらい出てるんじゃないか?！」

口々にそんな声が聞こえてくる。

200キロも出てるわけねえだろ。現役の時でも180後半が限界だったわ。

そしてコートの中の雪ノ下と三浦は驚愕の目で俺を見る。

ただ葉山だけが冷めた目で俺を見ていた。

そんな彼らの反応をよそに俺は平然と雪ノ下に声をかける。

「お望み通りやったぞ。後1ポイントだ。さっさと決める。」

「え、ええ。」

そして俺は再びサーブの構えに入る。レシーブは葉山だ。

こいつにさっきのフラットサーブを見られたのはまずかつたな。初見ならいくらあいつでも反応できなかつたと思うが、2回目なら返してくるだろう。

あいつはそれができる人間だ。

俺の思った通り、葉山はベースラインより後ろに下がり、俺のサーブを待っている。

フラットサーブに対するその判断は正解だ。距離が長くなれば遅くなるのは自明の理なのだから。

けれど、俺に対するその判断は不正解だ。

俺はさっきと同じフォームでモーションに入る。

トスを上げて上半身を弓のように反らす。膝を限界まで縮める……が俺はトスが最高点に達するのを待つことなくラケットを振り下ろした。

クイックサーブ。トスが落ちてくるのを打つのではなく、上がっていくところを打ち、レシーバーのタイミングをずらすサーブだ。

もちろんフラットサーブとは比べ物にならないほど遅いが、さっきのそれを見た葉山

に対しては虚をつく一打である。

しかし、葉山は意表を突かれたにも関わらず、素早く反応して全力で前に走りなんとか球を返す。

反応速度速すぎだろ。二刀流使えるぞ、お前。

そんなことを考えながら俺はラケットを振りかぶる。ちらりと葉山を見ると、これまでに冷静を保っていた彼が、ついに驚きの表情で俺を見ていた。

それも当然だろう。あいつがなんとか返したレシーブの落下点に既に俺がいて、スマッシュの体勢に入っているのだから。

信じてたぞ、葉山。お前なら返せるってな。

葉山が俺のサーブを返すことを信じて、俺はサーブを打った瞬間に前に走り出していたのだ。

そして、俺は構えることもできない無防備な葉山に向かってスマッシュを放つ。

その球は葉山のすぐ横を通り、誰も取ることができないまま2回バウンドした。

「げ、ゲーム。比企谷・雪ノ下ペア！」

戸塚が試合終了のコールをした瞬間にギャラリイが大きな歓声を上げ、八幡コールが響き渡った。

俺が手を振って適当に反応していると、雪ノ下がこちらに歩いてくる。体力はだいぶ

回復したようだ。

「ずいぶん人気ね。」

「ははは、ありがとう。」

「……………」

雪ノ下は俺の態度が気に食わないのか、ちろつと睨んだ後、ネット方へ歩き出す。

俺も慌てて彼女について行く。

ネットの向こう側では葉山が俺を見て手を差し出していた。俺もそれに応じて握手する。

すると、葉山が小声で俺に言う。

「テニスできないっていうのも嘘だったとは思わなかったよ。」

「できないとは言っていないからな。」

「それもそうだね。まあいい試合ができて良かったよ。」

「そうだな。試合お疲れ様。」

俺が葉山と握手しながら会話していると葉山の隣から三浦が声をかけてくる。

「ハチ、次テニスするときは最初から手加減抜きだかね。」

「了解。」

意外と三浦は俺が手を抜いていたことを怒っていないようだ。いや、怒りの矛先が雪

ノ下に向いているからか。

「見ると、三浦は雪ノ下に遠慮することなく全力で睨みつけていた。雪ノ下はそんなことを意に介さずに無表情を保っている。」

それがさらに癪にさわるのか、三浦の怒りはますますヒートアップしていく。

そんな彼女たちの姿を見て、葉山と俺は苦笑いしかできなかった。

「うっす。」

その放課後、俺は数日ぶりに部室に赴いた。数日ぶり、と言うのはずっと戸塚の練習に付きっ切りでここに来ることがなかったからだ。今日は昼休み大変だったから戸塚が練習をなしにしたのだ。

それにしても、たいした期間でもないのにどこか久しく感じるのはなぜだろうか。

「こんにちは。」

この雪ノ下のそっけない返事も懐かしく感じてしまう時がいつか来てしまうのだろうか。いや、来ないと信じたいものだ。

俺は定位置の椅子に向かいながら彼女に話しかける。

「由比ヶ浜は病院に行った。重症ってほどでもないけど念のためだそうだ。」

「そう。」

俺の報告にも雪ノ下は冷たい態度を取り続ける。

あー、これは機嫌が悪いやつだな。こいつと会ってからまだ二週間程度だがそれくらいは分かるようになった。

触らぬ神に祟りなし。俺は黙って文庫本を広げた。

……が、1ページも読まない内に雪ノ下が話しかけてくる。

「ねえ、比企谷君。」

「なんだよ。」

「あなた、初めてここに来た時に言っていたわね。素の時には嘘はつかないって。」

「少し違うぞ。正直に話すっただけだ。」

突然どうしたのだろうか。話の意図が全く見えない。

「どちらでもいいわ。けれど、進んで嘘はつかないと言うことでしょうか？」

「なら、どうしてこの前嘘をついたのかしら？」

「……嘘をついたつもりはないぞ。」

実際、俺には全く身に覚えがない。しかし雪ノ下は俺が戸惑っているのも気にせず

問い詰めてくる。

「とぼけるのはよしなさい。この前言ってたじゃない、努力はしないって。」

なら、どうしてテニスが私よりも上手いのかしら？努力せずにあのレベルだとも言

「いたいの?」

ああ、そのことか。

なら俺は嘘をついていない。実際、努力なぞしていないのだから。

きつと彼女は悔しかったのだろう。努力していないなんて言っている男に技術で負けたことが。

「嘘じゃねえ。努力なんてしてねえよ。」

「なら、どうして?」

彼女の続けざまの質問に俺は少し考えてから答える。

「そもそも努力するのは自らを高めるために行うものだ。お前だって周囲に屈しないために努力したんだろ?」

「そうよ。」

何を今更、といった表情で彼女が返事をする。

「俺がやったのはな、周囲に合わせるためだ。人気者になるために、周囲から好かれるために、自分の居心地の良いところを作るためにやったんだ。」

そんなのは努力とは呼ばない。ただの――」

そうだ。努力なんて高尚なものじゃない。

試合に勝つためでも、強くなるためでもなく、周囲に合わせるために行うもの、それ

はー。

「保身だ。」

俺の言葉を聞いて雪ノ下は俺を心底気に入らないのか、侮蔑の視線を送ってくる。

「……あなたとはとことん相容れないわね。どうしても努力とは呼ばないつもり？」

彼女の質問に俺は間髪入れずに返答する。

「実際そうだからな。」

「……そう。」

その日、彼女と俺が会話することはもうなかった。

e.p. 7 どうしても比企谷小町はお兄ちゃんと同じ学 校に通いたい

似ていた。その在り方が。

似ていた。そうなりたいと願ったあの人に。

だから、妬ましかった。

だから、憧れた。自分がなれなかったものに限りなく近づいているから。

そして、その中にある人を見る。

相手に他者を投影するなどやってはならないことだと理解しているのに。

けれど、どうしても期待してしまう。

自分が分からなかった答えが分かるのではないかと。

「お兄ちゃん、これは？」

「()と()が錯角だろ？だからそれ使って方べきの定理だ。」

現在、俺は絶賛小町の勉強教え中である。

けれど、当の小町は数学に飽きたのか机にシャーペンを投げ出して、背もたれに体を預ける。

「図形分かんないよー。何か裏技みたいなのないの?」

「あるわけないだろ。大体、中学の幾何学なんてパターンが決まってるんだから覚えれば済む話だ。」

「それはお兄ちゃんだからできるんだよー。パターン覚えるとか小町には無理!」

そう言つて小町はむくれてしまう。

確かにこいつはあんまり暗記は得意じゃなかったな。

「コーヒー淹れるけど、飲むか?」

「……うん。」

一旦休憩を入れようと思い、キッチンに行き、お湯を沸かし始める。

すると、小町がキッチンの向かい側に立つて話しかけてくる。

「お兄ちゃんもそろそろ定期テストでしょ。余計なお世話かもしれないけど大丈夫なの?」

「多分大丈夫だ。それなりに勉強してるからな。」

俺の返答を聞いて小町は苦々しい表情を浮かべる。

「そんなこと言つて、お兄ちゃんはいっつも一位だもんねー。」

「普段からの積み重ねだ。お前も総武高校受けるんだったらもつと勉強しろよ。」

言ってしまうと、小町の成績で総武高校に行くのは中々至難の技だ。まあ、幸いにも受験までまだ半年以上あるので、詰め込めば合格できると思うが。

それでも小町は少し不安げな顔になる。

「小町、受かるかな？」

「それは今考えることじゃねえよ。それに、俺もできる限り教える。」

それにしてもどうしてそんなに総武に固執するんだ？」

小町は昔から決めたことは中々変えなかつたが、ここまで頑ななものも珍しい。

そして、小町は俺の質問に即答する。

「お兄ちゃんと同じ高校に通いたいから！」

おお、いつの間に俺の妹はこんなにもブラコンになっていたんだ。いや、俺としては嬉しいんだけど。

「……そりゃあ、俺も……」そ・れ・と、お兄ちゃんの妹だつて分かればみんな優しくしてくれるから！」

……前言撤回、なんだこの妹は。

俺の感動を返せ。

「そうかそうか、なら頑張れよ。ほれ。」

「ありがとー。」

少しむっつとしてぶつきらぼうにコーヒーを手渡すが、小町はそんなこと気にせず受け取る。

そして、俺が再びテーブルに座るとまた話し始める。完全におしゃべりモードに入ってしまったようだ。

「そういえばね、学校の友達はね、お姉さんは不良化したんだって。夜とか全然帰ってこないらしいよ。」

でも、お姉さんは総武高校通ってて超真面目さんだったらしいよ。何があつたんだろ
うね。」

「さあな。家庭の事情もあるだろ。」

「最近仲良くなつて相談されたの。川崎大志君っていうんだけど。」

小町の口から男の名前が出たので不安だが、気にせずに俺は言う。

「そうか。何かあれば俺に言ってくれ。前言っただろ？奉仕部っていう謎の部活に入れさせられたからな。できる限りのことはする。」

「うん、ありがと！いつか奉仕部のことももつと詳しく教えてね。」

「まあ、機会があればな。それじゃ、勉強始めるぞ。」

「はーい。」

そうして比企谷家の夜は更けていった。

次の日、俺は制服姿のままぶらぶらと街を歩いていた。

さて、どうするか。

テスト前だから遊びに行くわけにもいかないし、部活もない。かと言って、家に帰っても誰もいない。

なら、どこかで勉強するか。

そう決めて、辺りを見渡すと近くにサイゼ〇ヤがあったのでそこに入る。

店内に入っても店員が中々来ない。仕方なく俺は空いている席を探す。

空いていたのは店の一番奥のテーブル席だった。

そこでしばらく勉強しようと思いを進めるが、不意に後ろから声をかけられた。

「比企谷くん！」

戸塚の嬉々とした声を背中で受けて、俺は深く後悔する。

あー、先に店に知り合いがないかどうかを確かめておくんだった……。

けれど、見つかってしまった後ではどうしようもないので、俺は気を抜いて外れかかっていた仮面を被りなおして振り返る。

「戸塚か？お、雪ノ下に由比ヶ浜もいるのか。」

振り返った先のテーブル席には戸塚と雪ノ下、由比ヶ浜が座っていた。

勉強会でも開いていたのか、テーブルには勉強道具が散乱していた。

「比企谷くんも勉強会に誘われてたんだね！」

戸塚が満面の笑みで俺を見る。

戸塚はテニスの試合の一件から俺に懐くようになった。

いくら誘われてもテニス部に入る気はないが。

「いや、たまたまここに来ただけだ。」

そうだな……、俺も一緒にいいか？」

ここで立ち去るのも不審なので、せつかくならその勉強会とやらに参加しようと雪ノ

下を見て言う。

「私は構わないけれど……。」

「あたしもいいよ！と言うか、勉強教えて欲しいな。」

「僕も比企谷くんが参加してくれるなら嬉しいよ。」

ふむ、由比ヶ浜、戸塚の反応は予想通りだが、雪ノ下が嫌味ひとつ言わずに許可する

とは……。なんか怖いな。

「それじゃ、よろしく。」

俺が座ろうとすると、由比ヶ浜が場所を空けるが、俺は戸塚の隣に座る。

そんな残念そうな顔をするな。そっちはもう二人座ってるじゃねえか。

「比企谷くんは勉強できるの?」

俺が座ると、隣の戸塚が声をかけてくる。

「まあ、それなりー」 「ヒツキーはいつも学年一位なんだよ!」

俺の返答を遮って、由比ヶ浜が説明する。

「なんでお前が得意げなんだよ……。」

「えへへ、つい……。」

「比企谷くんってそんなに賢いんだ。じゃあ僕も教えてもらおうかな……。」

「ああ、構わないぞ。」

俺たちがそんなやり取りをしていると、雪ノ下が冷めた目で俺を見る。

「そんなに余裕をかましていいのかしら? 今回のテストであなたは次席になるかも

しれないわよ?」

そういうえばこいつは成績のことで俺を敵視してたんだったな。

「二位でも二位でも最下位でもかまわねえよ。順位にこだわる気はない。」

それよりも、雪ノ下は由比ヶ浜に教えてたんだろ? いつもは俺が教えてるんだが、あ

りがとうな。」

「え、ええ……。」

「どうでもいいという発言からの素直な感謝に雪ノ下は戸惑っているようだ。」

「そうだよ、ヒツキー。ゆきのん教えるのすっごく上手いの！」

由比ヶ浜が嬉しそうに話すが、それを無視して俺は雪ノ下に続けて言う。

「大変だろ。アホの子に勉強教えるの。」

俺が真面目な顔でそう言うと、由比ヶ浜は必死で抗議してくる。

「アホって言うなし！」

その必死さに助長されたのか、雪ノ下も含みのある笑顔を浮かべて言う。

「まったくその通りね。」

「ゆきのんまで。」

雪ノ下にまで肯定された由比ヶ浜はがっくり肩を落とす。

俺はさすがにかわいそうだと思っただけでフォローを入れる。

「冗談だ、由比ヶ浜。」

雪ノ下も俺に準じて穏やかな笑みで言う。

「冗談よ、由比ヶ浜さん。」

そんなやり取りをしていると、入り口の方からまた俺を呼ぶ声があった。

「あ！お兄ちゃん！」

見るとそこには小町と知らない男が一緒に店に入ってきたところだった。

そして、小町は俺を見るやいなやこちらに駆け寄ってきた。

e p. 8 由比ヶ浜結衣は騙され続けて

体育会系の好少年。

それが俺の受けた小町の隣の男の評価だった。

俺が彼をじっと見つめていると、小町が思い出したように彼を紹介する。

「こっちは同じクラスの小崎大志君。昨日話したでしょ？相談受けてるって。」

ほう。お姉さんが不良化して困っているというやつがこいつか。

俺は川崎大志の目を見て、柔和な笑顔を浮かべて挨拶する。

「こんにちは、川崎君。俺は小町の兄の八幡だ。妹と混ざるから、八幡って呼んでくれ。

いつも小町がお世話になってるみたいだな。できればこれからも仲よくしてやって

くれ。」

「い、いえ、お世話になってるのは俺の方です。今日も相談に乗ってもらって。」

「ああ、事情は小町から聞いている。お姉さんがちよつと大変なんだってな。」

もしよければ、俺も相談に乗るぞ？」

「え？いいんですか？勉強してるところじゃ……。」

「気にしなくていい。俺たちは奉仕部って言ってな、人の悩み事を解決する、みたいな部

活なんだ。」

俺がここまで言ったところで、沈黙を保っていた雪ノ下が口を開く。

「比企谷君。奉仕部が承るのはあくまで総武高校の生徒の依頼であって、他の学校、ましてや中学生の依頼は範疇外なのだけけれど。」

「それはそうなんだが、彼の依頼っていうのは彼の姉についてなんだ。そして、彼女は総武高校の生徒。」

「だったら俺たち奉仕部が動く理由になると思わないか？」

俺の言い分に雪ノ下は納得できないようだが、筋は通っていると判断したのか、しぶしぶ了承する。

「それでも、内容を聞いてからよ。受けるかどうかはそれから判断するわ。」

「由比ヶ浜さんと戸塚君もいいかしら？」

「雪ノ下が由比ヶ浜と戸塚に確認をとると、二人はにつこり笑って答える。」

「全然いいよ。あたしも奉仕部の一員だしね！」

「僕も助けてもらったし、手伝えることがあれば手伝いたいな。」

俺は二人の反応を見てから、再び川崎に話しかける。

「だそうだ。とりあえずこっち座れ。」

「あ、ありがとうございます。」

戸塚に雪ノ下達の方のソファに座ってもらい、小町が俺の隣に座り、その隣に川崎が座った。

そして、小町以外知人がいない川崎は少し緊張気味な声で話し始める。

「えっと、とりあえず自己紹介——」その前に質問がある。」

しかし、俺の言葉がそれを遮った。

先に聞いておかなくてはならないことがあるのだ。

「なんつすか？」

「川崎君は小町の友達、でいいんだよな？」

俺の質問に川崎が答えようとするが先に小町が答える。

「そうだよ。川崎君は小町の友達——それ以上でもそれ以下でもないよ。」

明るい表情でそう言った小町とは対照的に川崎は暗い表情で続ける。

「……そうつす。友達です。」

ほう。川崎にとつては友達では不満だが、小町にその気は全くないようだな。

俺が考えを巡らせていると川崎が不思議そうに尋ねてくる。

「えっと、八幡さん？今の質問に何の意味が？」

「ん？ああ、もしも川崎君が小町の彼氏ならおめでたいことだと思つてな。」

まあ、実際そういう関係だったら、俺の使える駒を全て使用して社会的に抹殺するつ

もりだったんだけどね。

小町は絶対に嫁にやらん。

俺の心中を知らない川崎は少し嬉しそうな笑顔になる。

まあ、意中の相手の実兄に認められたのだから当然といえば当然だ。

「そろそろ本題に入っつていいかしら。雪ノ下雪乃よ、初めまして川崎大志君、小町さん。比企谷君とは……知り合い？かしら。」

すると、俺たちのやり取りに飽きたのか、雪ノ下が話を進めようとする。

というか、どうして「？」つけちゃったんだよ。確かにお前は友達ではないけど。

俺がちろつと雪ノ下を横目で見ると、それに気づいた彼女は得意げな表情を浮かべる。

やってやった、とでも思っているのだろうか。

俺と雪ノ下と言葉のない冷戦をよそに、由比ヶ浜と戸塚が口を開く。

「由比ヶ浜結衣だよ。初めまして、大志君、小町ちゃん。あたしにできることがあつたらなんでも言っつてね。」

「初めまして、戸塚彩加です。よろしくね。」

順番で言えば次は小町なのだが……、妙だな。

いつもなら食い気味に喋るようなやつなのに、少し間がある。

それに、さっきの由比ヶ浜が話したときに一瞬眉をひそめていた。

もしかして、由比ヶ浜と面識があるのだろうか。

けれど、俺が不審に思ったのもつかの間のことで、すぐに小町はいつもの調子で話し始めた。

「妹の小町です！」

奉仕部のことはいつも兄から聞いてますよ。

これからも兄をよろしくお願いしますね。

それにしても、聞いた話だと兄を入れて三人の部活だったはずですけど、こんなに可愛い女の人が三人も。

お兄ちゃん、嘘ついてたの？」

小町がジトツとした目で俺を睨みつけるが、傍では由比ヶ浜達が苦笑を浮かべている。

まあ、戸塚は初見なら間違えてもおかしくなくらい女の子みたいだから仕方ないのだが。

「戸塚は奉仕部じゃないんだよ。手伝ってくれるだけだ。それに、戸塚は男だ。」

「またまたー。恥ずかしいからって嘘つかないでよお兄ちゃん。こんな可愛い人が男の人なわけないじゃん。」

小町に嘘はつかないんじゃないの？」

俺が言っても全く取り合ってくれないので、戸塚に目配せをする。すると、戸塚は少し困った顔で説明する。

「えっと、僕、男……です。」

「えーつと……、本当？」

小町は本人から説明されても信じきれないのか、再び俺に確認をとる。

「本当だって言ってるだろ。」

「あ、あははー。これは失礼しました、戸塚さん。」

「ううん、慣れてるから大丈夫だよ。」

こんな取り留めのない会話をひいたら埒があかないので、俺はさっさと話を進めるために川崎に話しかけることにする。

というか、雪ノ下の冷たい視線が痛い。

「それで、川崎君。相談事ってのをそろそろ聞かせてもらえるか？」

「あ、はいっ。相談っていうのは、最近うちの姉ちゃんがー」

川崎の相談をかいつまんで説明すると、彼の姉が最近帰るのが遅い、ということだった。

おそらくどこかでバイトをしているのか、朝の五時頃に帰ってくるのもざらだという話だ。

さて、ここまで聞いたところで雪ノ下に判断を仰がなくてはならない。

あくまでも話を聞いただけであって、それを奉仕部として受諾するかどうかは部長である彼女が決めることだ。

「雪ノ下、どうする?」

雪ノ下は少し考えるそぶりを見せてから答える。

「そうね、その話が本当なら由々しき事態ね。我が校の生徒がそんな時間まで帰宅しないというのは明らかかな問題よ。」

それに、彼も真剣に悩んでいるようだし、依頼として受け取るのもやぶさかではないわ。」

「そうか、なら決定だな。」

俺は雪ノ下の首尾のいい返事を聞いたところで周りを見ながらそう言った。

こいつ、なんだかんだで困ってる人を見過ごせないタイプなんだよな。

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

決を聞いた川崎は喜びの表情で礼を言う。

そんな顔されてもこの時点で打てる手は限られているが。

そして、俺は真剣な表情を作って川崎に言う。

「ああ、協力はする。でもな、手がかりがない状況だから、俺たちも動きようがない。とりあえず、今日はこのまま解散して、俺たちは学校側からあいつにアプローチをかけてみる。」

川崎君には何か姉に関して有用そうな情報を探してもらおう。

それでいいか？」

「は、はい。いいんすけど……、八幡さんって姉ちゃん知ってるんですか？」

「川崎沙希だろ？同じクラスだ。」

「そうなんですか！よく分かりましたね、川崎なんていっぱいいるのに。」

「その髪の色と目元がそっくりだ。それに総武高校に川崎ってやつは一人しかいないからな。」

俺がそう言うと、小町を除いた四人が驚愕の目で俺を見る。小町は一人、微妙な表情を浮かべている。

えつと、俺、何かおかしなこと言ったか？

すると、由比ヶ浜が恐る恐る俺に質問を投げかけてくる。

「もしかして、ヒッキーって全校生徒全員覚えてるの？」

あ、そうか。覚えてないのが普通か。

まあ持論だが、人気者になろうとするならそれくらいして、当たり前前なだけだな。

「ぎっくりりだけど覚えてるぞ。由比ヶ浜もクラスメイトの川崎さんくらい知ってるだろ？」

「う、うん。さすがに知ってるけどさ。……ヒッキーやけにやる気だね。」

由比ヶ浜が俺の態度に不審に思ったのか、少しためらってから聞いてくる。

なんで不審に思ったのかはだいたい想像がつくが。

俺にやる気がある理由？

そんなもん決まってるんだろ。小町にまとりつく毒虫を排除するためだ。この件が解決してもまだ小町に関わるようなら対策を考えないとな。

もちろん、そんなことを考えているという素振りを微塵も見せずに、俺はニコツと笑って答える。

「困ってる人がいるんだ。助けるのが当然だろ？」

「そっか、そうだよね、さすがヒッキー！」

俺の嘘に由比ヶ浜はもちろん騙される。一年の時から何も変わらせずに。

ただ、その隣に座る雪ノ下だけが痛ましいものを見る目で由比ヶ浜を見つめていた。

「雪乃さんだけが知ってて、戸塚さんと結衣さんは知らないって感じかな。」

作戦会議を終わったのは夕方、家路に着いた時、隣を歩いていた小町が独り言のようにつぶやいた。

「……よく分かったな、雪ノ下が知ってること。」

「見てれば分かるよ、そんなこと。」

でもさ、やっぱり小町はいつものお兄ちゃんが好きだな。

小町に嘘をつかないお兄ちゃんが。

嘘ついてるお兄ちゃんは、傷つけることをしても気づかれないから、嘘をつくことを正当化しちやっつてるように見えるの。」

「……………」

分かってる、そんなことは。こうして生きると決めた時から。

そして、確かに自分が嘘を正当化して逃げ続けていることも分かってる。

こんな生き方が間違っていないはずがないってことも。

だけど、今更この在り方変えることはできない。

俺の決断を、過去の俺の決断を否定することは、過去の俺を否定することになる。

なにより、あいつのことも否定することになる。

いや、今の俺がとっくに昔の俺もあいつも否定することになってるのかもしれない

が。

「……お前がそう思うんだったらそうかもな。」

頭の中で多くの思考が飛び交って、俺が言葉にできたのはこれだけだった。

そして、小町も俺の心中を分かっているのか、短くこう言った。

「……そっか。」

そりきり俺たちの間で会話はなくなり、夕焼けが染め上げた道を黙々と歩く。ふと振り返った時に見えた自分の影だけがやけに長く見えた。

e p. 9 ようやく彼は彼女との始まりを知る

場所は再びサイゼリヤ。

メンバーは俺たち奉仕部三人と小町、川崎の五人だ。

戸塚は用事があつて来れないらしい。

今日は川崎が有用な手がかりを得たという情報を聞き、集まった次第だ。

ちなみに、俺が言った学校で行う川崎へのアプローチの結果は惨敗だった。

奉仕部の三人で話し合い、三つの方法が提案された。

それは、平塚先生にどうかしてもらう、葉山ハニートラップ、アニマルセラピー、である。

しかし、結局どれもうまくいかなかった。

というか、葉山ハニートラップってなんだよ。

つまり、奉仕部だけではもうこれ以上打つ手がなくなつたところだったのだ。

「早速だけど、川崎君。あなたがつかんだ情報を聞かせてもらえませんか。」

席に着くと早々、雪ノ下が話を切り出す。

依頼が膠着状態に陥つてることが気にくわないのだろうか。

「えっと、思い出したんですけど、以前、姉ちゃんのバイト先から電話があったことがあるんすよ。」

「確か名前は……エンジェルなんかだったはずっす。」

それを聞くと同時に俺は深くため息をつく。

「はあ、なんでそんな大切なこと思い出さなかったんだよ。」

千葉市内でエンジェルから始まる店なんて限られているじゃねえか。

「確かに名前にエンジェルがつくんだよな？川崎君。」

「はい、それは間違いないっす。絶対やばい店っすよ。」

川崎はエンジェルという名から危ない店を想像しているようだ。健全な男子中学生

だなあ。

「だが小町はやらん。」

「残念だが、その予想は外れだな。」

「えっ？なんで分かるんすか？」

「たぶん、『エンジェルラダー』だろ。その店。」

休日どこへ遊びに行ったとしても、食事処に困らないように千葉のお店をほとんど網羅している俺の中で、エンジェルがつく店はそこしか知らない。

確か、ドレスコードとかもある高級な店だったはずだが。

「比企谷君、どうしてそこだと思いか理由を教えてくださいませんか。」

雪ノ下が納得できずに聞いてくるが、もちろん根拠なく言っただけではない。

「まず最初に、高校生が働いても確実に知り合いや教師にバレないような店だつてこと。あの店は高校生が入るようなところじゃないからな。」

二つ目に、川崎沙希の服からアルコールの匂いがしたこと。

理由としてはこんなところだ。」

俺が言い終わると、なぜか女性陣が全員ジトツとした目で俺を見つめる。

「お兄ちゃん、女の人の匂いなんて嗅いでるの?」

「ヒツキー、それはちよつと……。」

……壮絶な勘違いである。

「ちよつ、ちよつと待て。別に嗅いだわけじゃないぞ。」

たまたまあいつが近くを通つた時に、親父がたまたま飲んでる高級な酒と同じ匂いがしたからだけだつて。」

俺は必死で弁明するが、雪ノ下が汚物を見るような目で俺を睨んで携帯を取り出す。

「言い訳はもういいわ。さっさと通報しましょう。」

「ちよつ、待てつ。やめろ、通報だけはシヤレにならん!」

店内に俺の悲痛な声が響き渡つた。

「ねえ、今暇なら私たちとどっか遊びに行かない？」

突然、見知らぬ女性二人組が声をかけてくる。

何度繰り返し返したかもわからないやり取りだ。

「いえ、待ち合わせしているんで。」

「いいじゃん、遊ぼうよー。」

「断れない約束なんで、すいません。」

俺に取りつく島がないことがわかると、彼女たちはどこかへ去って行く。

はあ……、まじめんどくせえ。

俺は『エンジェルラダー』がある建物の前で雪ノ下と由比ヶ浜を待っている。

作戦会議の結果、とりあえず行ってみようということになり、午後九時にここに集合になった。

しかし、一度、三人とも集まったのだが、由比ヶ浜がこの店のドレスコードに引かかる服装で来てしまったので、雪ノ下の家で着替えることになったのだ。

当然、俺は待ちぼうけである。

腕時計を見ると十時少し前。時計の針を見て、思わずため息が漏れる。

待つだけなら構わない。だが、俺はさつきみたいな輩にやけに声をかけられるのだ。

きちんとしたスーツに、オールバックにした髪、おまけに伊達メガネという普段は絶対にしらないような服装をした俺は、大人びて見えているのだろうか。

目の前の道路を通る車の流れをぼーっと眺めていると、背後から声がかかる。

「随分人気ね、比企谷君。」

「お待たせ！ヒッキー。」

振り返ると、雪ノ下と由比ヶ浜が立っている。

とうとうか、さっきの見てたんですね雪ノ下さん。

「おう、来たか。雪ノ下も由比ヶ浜も似合ってるぞ。」

俺がそう言うと、由比ヶ浜は少し顔を赤らめる。

「う、うん。ありがと。」

雪ノ下は何も言わずに哀れんだ目で由比ヶ浜を見る。

さすがに雪ノ下も気づいてるよな。とうとうか、由比ヶ浜の好意がわかりやす過ぎる。

「それじゃあ、行こうか。」

それぞれ対照的な二人の反応には何も言わずに、俺はさっさと建物の中に歩みを進めた。

……とうとうか、早く帰って寝たい。

雪ノ下と由比ヶ浜をエスコートして、店内に入り、店員に誘導されたカウンターに座る。

そして、知ってか知らずか、そのカウンターに立っているのは俺たちが会いに来た川崎沙希本人だった。

彼女は、最初こちらに気づかなかったようで、黙って俺たちの前にコースターを並べる。

「お勤めご苦労様、川崎さん。」

とりあえず、俺はいつも学校にいるときと変わらぬ態度で彼女に話しかける。

「は？えつと……、比企谷？それと、由比ヶ浜に、雪ノ下、だっけ？」

俺が声をかけるとさすがに気づいたようで、俺たちの顔をじっくり見る。

そして、諦めたような表情を浮かべてこう言った。

「あーあ、見つかったか。ここ、結構気に入ってたんだけどね。」

未成年であることを偽ってここで働いているであろう川崎は、まるでここを辞めることになったとしても、バイトは続けると言わんばかりの口調で続ける。

「それで、あんたたちはどうしてこんなところに？まさか、デートつてわけじゃないんでしょ？」

「冗談でもやめてちょうだい、寒気がするわ。私たちはあなたの弟の川崎大志君から依

頼を受けてここに来たのよ。」

「大志が……？ああ、なるほど。だから最近周りが騒がしかったんだね。」

大志にはあたしから言っておくよ。だから、もうあたしに関わらないで。」

「そうはいかないわ。私が受けた依頼は、あなたが更生して、真面目な学生に戻すことよ。」

「それが迷惑って言ってるの。こっちの事情も知らずに踏み込んで来ないで。」

雪ノ下と川崎はお互い一步も譲らない。

しかし、川崎の表情はどこか見覚えがあった。

一人で全部抱え込んで、周りには気丈なふりをする。

他人には頼らない、他人には期待しない。

そんな固い決意がこもった表情だった。

でも、そのままでは潰れてしまう。

一人のままでは潰れて、壊れてしまう。

あいつがそうだったように。

俺の思考の半分を占めていた眠気が一気に吹き飛び、知らぬ間に自嘲的な笑みを浮かべてしまう。

全く、俺はいつまで過去に囚われているんだろうな。

「雪ノ下、由比ヶ浜、帰るぞ。」

俺の突然の言葉に、雪ノ下が俺を睨みつける。

「何を言ってるの？ 一体何のためにここに来たと思ってるのかしら。」

「お前じゃ無理だ。川崎は変えられない。」

俺は雪ノ下にはつきりと真実を伝える。

雪ノ下がいくら正論で論破しようとしても、彼女は変えられない。

俺の経験則だ。

「なら、あなたならどうにかできるとでも？」

雪ノ下が詰問してくるが、それを無視して俺は立ち上がる。

「由比ヶ浜、帰るぞ。」

「へ？ う、うん……。」

俺がもう一度呼びかけると、由比ヶ浜はおずおずと立ち上がって俺についてくる。

雪ノ下は最後まで納得できなかつたようだが、渋々と俺についてくる。

「川崎さん、明日ちゃんと学校来てくれよな。」

俺はそう言い残して、店から立ち去った。

次の日の昼休み、俺は職員室に寄つた後、二枚の紙を持って屋上への扉を開いた。

そして、屋上をぐるりと見回すと、目的の人物がそこで昼食をとっていた。「お、いたいた。川崎さん！」

俺が声をかけると、彼女は不機嫌そうな表情でこちらを向く。

「何の用？もう関わらないでつて言ったよね。」

川崎は俺を睨みつけてくるが、俺はそんなこと気にせず彼女の隣に座る。

「昨日あの後大変だったんだぞ。雪ノ下はめちやくちや怒るし……。」

本当、大変だった。

雪ノ下を宥めるのにどれだけ大変だったか……。

「それはご愁傷様。それで、本当に何の用？」

川崎が再び俺に目的を尋ねる。

俺は彼女を見ずに、弁当を開きながら話し始めた。

「他人に期待しない。他人には頼らない。」

信じられるのは自分だけ。だから全部一人で抱え込む。

それがお前の考え方だろ？」

俺の突然の問いかけに、川崎は少し考えた後答える。

いや、少し間があったのは俺の雰囲気が変わったからなのかもしれない。

「……そうだよ。なんか文句ある？」

まさか友情は大切だ、何てこと説教しに来たわけじゃないよね？」

「いや、文句なんかあるはずない。俺も同じ考えだ。」

他人に期待して良いことなんてあるわけないからな。」

ここで俺は一旦言葉を切る。

そうだ。いつ裏切るかわからないような他人に対して、期待を抱いたり、頼ったりするなんて馬鹿げている。

だからと言って利用しないのも馬鹿げているが。

でも、なによりも――

「でもな、川崎大志は違うぞ。あいつはお前の家族だ。」

そして、本気で悩んだ。お前が全然家に帰ってこなくなつて本気で心配していた。

そんなやつに何も言わないのか？家族が大切じゃないのか？」

血の繋がった他人。一番近い他人。

いろんな解釈の仕方はあるが、家族だけは信じていいはずだ。頼っていいはずだ。

俺の突然の熱弁に川崎はあつげにとられた表情になる。

そして、かすかに微笑んでこう言った。

「そっか……そうだよね。」

大志にはあたしからちゃんと事情を話すよ。

でもね、バイトは辞めない。あたしにはお金が必要だから。」
まあ、そりやそうなるよな。

俺が何を言っても結局、彼女の金銭的な問題は解決しない。
俺にできることと言えば、解決方法を提示するくらいだ。

「そこでだ。お前が予備校に通う方法を教えてやろう。」

お前、予備校とか塾に通うためにバイトしてたんだろ？

弟が塾に行き始めて、金銭的に余裕がなくなつたとかで。」

「え？何でそれ知ってんの？」

俺の推理があつていたようで、理由を言い当てられた川崎は驚きの表情を浮かべる。

「ただの予想だよ。弟が姉ちゃんは今昔、真面目だつて言つてたからな。」

そんなやつがここまでして金を稼ぐ理由なんて他に思いつかないんだよ。

それで、お前はそのことを教師に相談したのか？」

「いや、してない……けど。」

これも予想通り。

俺はさつき、平塚先生からもらつたプリントを彼女に手渡す。

「予備校とかにはスカラシップっていうものがあるんだつてよ。成績優秀者は学費免除

らしい。」

お前なら大丈夫だろ。

それは、さつき平塚先生からもらってきた。

別に、教師に頼れと言うわけじゃないが、自分で何とかしようとする前に相談だけでもするべきだったな。」

俺が説明するのを聞きながら川崎は手渡されたプリントをじっくり読む。

そして、読み終えた彼女は小さくため息をついて空を見上げる。

「あーあ、こんなのあったんだ。知らなかったな。」

「これからどうするかはお前次第だ。」

解決方法は提示した。頑張れよ。」

きつとこれで彼女も更生できるだろう。

もう俺が出来ることは何も無いと思い、立ち上がって出口へ向かう。

そして、完全に、とはいかないが俺の本性を見せた彼女には一応釘を刺しておくために、背中越しに話しかける。

「わかってると思うがこのことは内密にな。」

「うん。別に話す相手もないしね。」

それに、あたしはいつものあんたより今の方が良いと思うよ。」

「ありがとよ。じゃあな。」

本当に屋上から立ち去ろうとドアに手をかけたその時、再び彼女が話しかけてくる。
「あ、あんたは予備校とか、通わなくていいの？」

川崎の遠慮がちな声を聞いて、俺は振り返って持っていたもう一枚のプリントを彼女に手渡す。

「この前の全国模試の結果だ。先生から先にもらった。

確か、全国順位は——「三位!？」

川崎が驚愕の叫びをあげ、俺の言葉を遮る。

「まあ、そういうことだ。予備校とかは別に必要ない。」

川崎の手から模試の結果を奪って、歩き出すが、またまた彼女に声をかけられる。

俺はいつになったら屋上から出られるんだ、と思いながら振り返ると、川崎が立ち上がって俺に頭を下げている。

「お願い！勉強教えてください！」

「……はい？」

「いただきます。」

川崎の一件が解決したその日、俺は小町といつも通り夕食を囲んでいた。

「お兄ちゃん、大志くんのお姉ちゃんの問題は何とかなったの？」

小町が不意に質問を投げかけてくる。

「ああ、なんとかなかった。もう大丈夫だろう。」

なんとかなかったが、まだ終わったわけじゃない。

川崎の頼みは放課後、奉仕部で話し合われ、予備校でスカラシップをとれるまでは俺と雪ノ下が部室で彼女の勉強を見るということで決定した。

これから、まためんどくさいことになる……。

「ありがとね！お兄ちゃん、大好きだよ！」

俺の心情を知ってか知らずか、小町はとびきりの笑顔でそう言った。

ああ、この笑顔が見られるなら安いものだ。

しみじみとそう思っていると、小町が思い出したように口を開く。

「あー！そう言えばね、思い出したよ！お菓子の人。」

「お菓子の人？犬の飼い主か？」

「そうそう、よかったねお兄ちゃん。事故にあつたおかげであんな可愛い人と知り合えるなんて。」

「は？」

「だーかーらー、お菓子の人って結衣さんなの！」

お菓子の人が、由比ヶ浜。つまり、あのバカ犬の飼い主があいつつてことか。

由比ヶ浜がこれまでやけに俺に気を遣ってた理由がこれか。

……あいつは知ってたんだな。

「……そうか。」

「あれ？意外と驚かないんだ。」

小町は怪訝な表情で俺を見る。

「いや、内心結構びっくりしてるぞ。」

それを聞いて最初に、どう利用しようかと考えた自分自身にな。

e p. 10 ついに由比ヶ浜結衣は

定期テストが終わり、川崎の一件も終わったと言ってもいいだろう。

後、一学期に残っている行事は明日の職業体験くらいだ。

ちなみに俺はIT系の企業に行くことになっている。

このメンバーを決める際に、戸部・大岡・大和の三人の間に不穏な空気を感じたので、みんな一緒のところに行けばメンバーとか関係ないよな、と言ったところ、葉山が提案したこの企業に行くことになったのだ。

まあ、将来の夢とか特に決まっていなから、どこでもいいのだが。

もちろん、クラスの人気者二人が行くところに他のクラスメイトが殺到するのは当然で、俺たちの職業体験はプチ社会科見学と化している。

さて、そんなことよりも、問題は由比ヶ浜だ。

あいつがお菓子の人、つまり犬の飼い主だとすれば少々厄介なことになる。

もしも、雪ノ下家の車が由比ヶ浜の犬を轢きそうになって、俺がそれを助けようとして飛び込んだ、なんて事実が露見した場合、どうして知っていたのに言わなかったのかと問い詰められるかもしれない。

しらばつくればどうとでもなる話だが、雪ノ下に嘘はつきたくない。ならば、由比ヶ浜に事情を話すことが最良の策だろう。

そもそも、雪ノ下が車に乗っていたかどうかも怪しいのだ。

雪ノ下に話さなかった理由はこれで大丈夫だ。

けれど、由比ヶ浜に言い訳は効かない。

それに、なによりも良い機会だ。

俺の地位をさらに確立するための。

そして、次の日、職業体験はつつがなく進み、あつという間に解散の時間となった。

クラスメイトが次々と建物から出ていく中、俺は一人その場にたたずむ。

すると、由比ヶ浜が一人でこちらに駆け寄ってくる。

「ヒッキー何してんの？優美子達待つてるよ、早く行こつ。」

由比ヶ浜は笑顔で俺の手を引っ張る。

予定通りだな、上手く二人きりになれた。

俺は心の中でほくそ笑みながら、表面上は真剣な表情で彼女に言う。

「なあ、由比ヶ浜。」

「どうしたの？ヒッキー。」

俺の真剣な表情を見て、彼女の声は少し震えている。

だが、そんなことはお構いなしに俺は続ける。

「入学式の日のことって覚えてるか？」

俺がそう言った瞬間、彼女の表情がこわばる。

きつと、彼女にとってはひた隠しにしてきたことなのだろう。

「ヒ、ヒツキーは入学式の日に事故にあってるんだっけ？」

「ああ、轢かれそうになった犬を助けてな。」

俺が話の核心に近づくにつれて、由比ヶ浜はますます挙動不審になる。

「犬の飼い主、お前だったんだな。」

そして、俺は由比ヶ浜が隠し続けた真実を口にする。

すると、彼女は力なくあはは、と笑った。

その表情からは怯えが見て取れる。

「あはは、ヒツキー覚えてたんだ……。」

「いや、小町が教えてくれたんだ。」

「そっか……、小町ちゃんが。」

由比ヶ浜は小さくそう呟くと、今にも消え入りそうな声で続ける。

「……ごめん、ずっと黙ってて。怒ってるよね？」

きっと彼女が真実を俺に言えなかった理由はこれなのだろう。

彼女からしてみれば、俺はペットを助けてくれた恩人だ。

その人に対して礼も言わずに、ずっと一緒に過ごしてきたのだ。いつでも真実を伝えられたのに、言わなかった。

それが彼女にとつては裏切りにも等しい行為なのだろう。

けれど、俺にとつてはそんなもの大したことじゃない。

むしろ俺が今からやることの方がよっぽど外道だ。

彼女の恋情を利用して、自分の身を守ろうとするのだから。

俺は、由比ヶ浜の心情を全て理解した上で、嘘をつく。

「どうして怒らなきゃならないんだよ。」

「だ、だって、あたし、ずっとヒツキーを騙して……。」

自分自身を糾弾している由比ヶ浜に俺は優しく笑いかける。

「何言ってるんだよ。どんな奴にも秘密の一つや二つあるもんだ。」

それに、あのことがあったからずっと俺と仲良くしてくれてたわけじゃないんだろ

？」

俺の言葉に彼女は戸惑いながらも答える。

「それは……そうだけだ。」

「なら、十分すぎるほどに礼はもらった。

由比ヶ浜みたいな良いやつと高校生活を送れるんだからな。

それに、俺の思い違いじゃなかったら、あのクッキーもお礼のつもりだったんだろ？」

「……うん。本当に怒ってないの？」

由比ヶ浜は不安げに揺れる瞳で俺を見つめる。

そんな彼女に、俺は彼女にとって最高の、それでいて最低な言葉を言い放った。

「もちろんだ。」

だから、俺たちはこれからもっと仲良くなれるよな？

事故のことなんかで引け目を感じることもなくなしで。」

俺の嘘を鵜呑みにした由比ヶ浜は先程までとは打って変わって笑顔になる。

「う、うん！これからもよろしくね、ヒッキー！」

俺はいつもの笑顔を浮かべて言う。

『由比ヶ浜結衣にとつての比企谷八幡』の笑顔で。

「ああ、よろしくな。」

やばっ、思ったよりも補習が長引いちやった。

ヒツキーとゆきのんはもう部室にいるよね。
急がなくちや。

あたしは小走りで部室に向かうけど、意識は腕の中にあるクツキーの入った袋に向いている。

昨日、お礼はいらない、何て言われたけど、ちゃんと一回だけでも言葉にして言わなきゃね。

そしたら、もつと仲良くなれるのかな……。

今よりももつと仲良くなれるってことは、もしかしたら、あたしがヒツキーのかの……じよになれるってこと……？

そんなことを想像しただけで、自分の頬が熱くなるのを感じる。

あー、ダメダメ。こんなこと考えちゃったらヒツキーの顔まともに見れなくなっちゃうじゃん。

今日こそちゃんと渡すって決めたんだから。

あたしは気づくと部室に着いていた。

そして、袋を胸に抱きながら深呼吸をし、気合を入れてドアに手をかけた瞬間、中からヒツキーとゆきのんの話し声が聞こえてくる。

「ねえ……ん。昨……ヶ浜さ……しらう？」

ゆきのんの声みただけど、上手く聞き取れないや。

ちよつと失礼だけど、聞いてみよっかな。

あたしのいない時にあの二人が何話してるのか気になるし。

あたしは扉を開けずに、ドアに近づいて耳を澄ませると、再び中から声が聞こえる。

「昨日？ああ、由比ヶ浜とちよつとな。」

あ！あたしの話だ。

「またお得意の嘘で彼女を言いくるめたの？」

え？嘘？

何言ってるの、ゆきのん。

「あいつとの昔のいざこざが発覚してな。」

少し利用させてもらった。」

利用？あたしを？

中から聞こえてくる信じられない話を聞いて、あたしの体は小刻みに震え始めた。

それでも、二人の会話を聞かずにはいられない。

「あなたならわかっているんでしょ？彼女があなたをどう思ってるかくらい。」

その上で利用だなんて、最低ね。」

「俺が最低だなんて今に始まったことじゃないだろう。」

それに、俺が言ったのは、もっと仲良くなれるよなつてことだけだ。」
そうだよ。ヒツキーは嘘なんてついてない。

ゆきのんが間違っているんだ。

あたしは自分の中で自分自身を納得させようとするが、その努力は虚しく、次の二人の言葉であたしの思いは全部撃ち砕かれる。

「けれど、それも嘘なんでしょう?」

「……まあな。」

「……っ!」

嘘……?昨日のヒツキーの言葉が全部嘘?

嘘だよ。それが嘘に決まってるもん。

事実を受け止められないあたしは二人を問いただそうと立ち上がる。

しかし、その際に抱えていたクツキーの袋が廊下に落ちて、カサリ、という音があった。

「由比ヶ浜?」

そのヒツキーの声が聞こえた瞬間、あたしは耐えられなくなつてその場から逃げ出した。

e p. 11 雪ノ下雪乃は感謝している

「ねえ、結衣。最近元気なくない？何かあった？」

「え？あ、うん。なんでもない、大丈夫だよ。」

俺をチラチラ見ていた由比ヶ浜は、突然三浦に話しかけられて、驚きながらも答える。そして、その歯切れの悪い返事をした後、また神妙な表情を浮かべたと思ったら、また俺を横目で見る。

現在、俺たちのグループは絶賛決裂中である。

正確には、俺と由比ヶ浜の間に微妙な空気が流れているため、それをなんとなく察した周りが、男女で分かれている状況だ。

俺と由比ヶ浜の間に何かがあつたのだろう。

曖昧な言い方をするのは、俺には理由がわからないからだ。

彼女の態度がおかしくなったのは、職業体験の翌々日。

前の日に、部活に顔を見せないと思ったら、次の日からはこの態度だ。

ちなみに、部活にも一切来なくなった。

と言つても、俺に全く心当たりがないわけではない。

彼女の態度が一変した前の日、部室の前に落ちていた歪な形のクッキーが入った袋。おそらく、由比ヶ浜が作ったものだろう。

つまり、あの日彼女は部室の前までは来ていたということの意味する。

そして、それを見つけた直前に話していた内容は……。

……考えたくはないが、俺の嘘がばれた、というのが妥当な線だ。

しかし、グループの男女が決裂してからもう一週間が経とうとしている。

この違和感が自然消滅してくれることを祈ったが、そろそろなんとかしなくては今後に響くことになる。

由比ヶ浜がおかしくなった理由がなんであれ、渦中の人物であると思われる俺が解決しなくてはならない。

「ハチ？ 難しい顔して何考えてるべ？」

戸部が思考の海に沈んでいた俺の顔を心配そうに覗き込む。

「ん？ ああ、悪い。ちよつと考え事をしてな。」

考えてることを一切表に出さないように、俺は表情を作って答える。

「比企谷はお前と違って難しいこと考えてるんだよ。」

「それな。」

「ほんとそれ。」

「そりゃないべー、隼人く〜ん。」

葉山が茶々を入れて、周囲を笑わせる。

当然、俺もそれに同乗して笑っているふりをした。

ちらつと葉山を見ると、彼と目が合う。

すると、彼は少し困ったような表情を見せた。

今のところはなんとかなっているが、これがこのまま続いて、グループ全体が決裂、なんてことにはなりたくない。

俺と理由は違うが、葉山も同じことを思っているようだ。

さて、どうしたものか。

その日の放課後、俺は一人、部室のドアを開ける。

部室の中にはいつも俺より先にいる雪ノ下と、平塚先生がいた。

「来たか、比企谷。とりあえず座りたまえ。」

俺を見た平塚先生は待つてましたと言わんばかりに、椅子を差し出す。

「どうしたんですか、突然。」

俺は質問しながら椅子に座るが、平塚先生は華麗に俺の言葉をかわして、聞いてくる。

「今日も由比ヶ浜は来ないのか？」

「そうですね。三浦たちと遊びに行くって言ってましたし。」

突然由比ヶ浜の話題を振られて、少し面食らったが俺は平静を装って答える。

しかし、俺の返事を聞いた平塚先生は微妙な表情を浮かべる。

そして、独り言のように一言小さく呟く。

「ふむ……。由比ヶ浜は突然いなくなるようなやつだとは思っていなかったが。」

その言葉を聞いた雪ノ下は、先生を睨みつけて反論する。

「待ってください。由比ヶ浜さんは別にやめたわけでは……。」

「来ないのなら同じだよ。幽霊部員など私は必要としていない。」

しかし、雪ノ下の反論はあっさり和平塚先生に論破されてしまう。

「で、由比ヶ浜が来ないから俺たちにどうしろと?」

このままでは埒があかないので、さっさと先生から本題を聞き出すことにする。

「部員の補充だ。」

由比ヶ浜のおかげで、部員が増えると活動が活発化することはわかった。もう一人いた方がバランス的に良いということなのだろうな。

だから、君たちは月曜日までもう一人、やる気と意志を持ったものを確保したまえ。

比企谷の人脈を使うのもよし、はたまた別の方法を使ってもよし。方法は君たちに任

せる。」

それだけ言うと、平塚先生は颯爽と部室から去ろうとするが、その背中に雪ノ下が言葉を投げかける。

「平塚先生。一つ確認しますが『人員補充』をすればいいんですよね？」

平塚先生はその言葉を聞くと、振り返って少し微笑んで答える。

「ああ、その通りだ。頑張りたまえ。」

そして、今度こそ平塚先生は部室から出て行った。

残された俺たちだが、間をおかずに俺は雪ノ下に話しかける。

「由比ヶ浜を部活動に復帰させるつもりか？」

先ほどの雪ノ下の発言から察するに、由比ヶ浜を復帰させることで部員の補充を行ううとしているのだろう。

案の定、雪ノ下は肯定する。

「ええ、そうよ。」

「なんか当てでもあるのか？」

俺がそう問うと、彼女は少し目を細めて俺をちろつと睨んだ。

「当てがあるのはあなたではないかしら、比企谷君。」

あなたなら由比ヶ浜さんが部活に来なくなった理由を知っているんでしょう？」

「……どうだろうな。」

雪ノ下の問いに俺は曖昧な返事をする。

確証のないことを口にしたくないというのもあるが、もしも俺の嘘がばれたというのが事実なら、それは俺と由比ヶ浜の問題であり、雪ノ下を下手に巻き込みたくないからだ。

すると、俺の心中を知ってか知らずか、雪ノ下は珍しくあつさり引き下がった。

「……………そう。あなたがそう言うならこれ以上は聞かないわ。

私は私ができることをやるだけよ。」

「できること?」

俺がその言葉の意味を聞き返すと、雪ノ下はこう言った。

「6月18日。何の日だか分かるかしら?」

6月18日は祝日でも休日でもないただの平日だ。

けれど、その日は——

「由比ヶ浜の誕生日、か。」

「そうよ。だから、誕生日のお祝いをしてあげたいの。」

雪ノ下はそつと目を伏せて恥ずかしそうにそう言った。

その時、俺は少し彼女の言葉を意外だ、と思ってしまうた。

来るものは拒み、去る者は追わない。

そんな性格だと思っていた雪ノ下が由比ヶ浜にそこまでしてやるといふことに。

「意外だな。お前がそんなに律儀なやつだとは思わなかった。」

俺は思っていたことを素直に言葉にする。

すると、彼女は俺の発言に気分を害することもなく、むしろ少し微笑んだ。

「そうね、私もそう思っていたわ。」

でも、由比ヶ浜さんにはきちんと感謝の気持ちは伝えたいの。

彼女が部活に来るか来ないかは別として。」

雪ノ下は雪ノ下なりに由比ヶ浜のことを思っていたのだろう。

きつと由比ヶ浜は雪ノ下にとつての初めての友達だったはずだ。

彼女もその友情を失いたくないのだろう。

雪ノ下と由比ヶ浜の関係に嘘は介在していないのだから。

「そうか。ならいいものを選んでやれよ。」

もう俺が言うことは何も無いと思い、部室を出ようとするが、雪ノ下が後ろから俺の服の裾をつかんでくる。

俺が振り向くと雪ノ下は若干頬を赤らめながら咳払いをして、小さな声で呟いた。

「ねえ、比企谷くん。そ、その……っ、付き合ってくれないかしら？」

「はあ。」

由比ヶ浜の誕生日を次週に控えた日曜日、俺はこの日、雪ノ下と出かけることになっている。

待ち合わせ時刻の少し前にららぽーとに到着した俺が何をすることもなく、ただ人の流れを眺めていると、その人の波をかき分けて、俺の待ち人が小走りでこちらに駆け寄ってきた。

「ごめんなさい、待たせたかしら。」

駅からここまで大した距離がないというのに肩で息をしている雪ノ下はさすがの体力と言ったところか。

「俺も今来たところだ。それじゃ、行くぞ。」

俺がぶつきらぼうにそう答えて歩き出そうとすると、雪ノ下はきよとした表情で俺を見ている。

「どうした？」

「い、いえ、少し意外だったの。」

あなたなら周りの目があるから、などと言って、あの気持ちの悪い表情を作っているんだろうと思っていたわ。」

指摘されて初めて気づいた。

知らないうちに俺は雪ノ下の前では自然と仮面が外れるということ。

「……お前の前じゃできる限り嘘はつかないって約束したからな。」

あ、でも、知り合いを見つけたらすぐに切り替えるからな。」

苦し紛れの言い訳を言うと、雪ノ下はそれを信じてくれたようで、小さくため息をついて言った。

「はあ、少しは進歩したと思ったのだけれど、根本は何も変わってないのね。」

「悪かったな。それじゃ、さっさと行くぞ。」

これ以上答えづらい会話になる前に俺は会話を切り上げ、歩き出した。

雪ノ下は何も言わずに俺の後を一步半ほど離れて付いてきた。

そして、歩き始めてから少し経った頃、雪ノ下が俺との距離を詰め、並んで歩きながら聞いてくる。

「ねえ、どこに向かっているの？」

まさか、あてもなく歩いているとは言わないでしょうね。」

「そんなわけないだろ。」

ここは広いから一日で全部回るのは不可能だ。

だから、由比ヶ浜の好みの店があるところに向かっているんだよ。」

俺が答えると、雪ノ下はジトツとした視線で俺を睨む。

「どうしてあなたが彼女の好みを知っているの？」

通報するわよ。」

「そんなことで一々国家権力を行使するな。」

あいつとは葉山とか三浦とかと一緒に結構色んなところ行ったから、趣味は大体わかるんだよ。

ほら、着いたぞ。」

そんなことを言っている内に俺たちは中高生の女性向けの店が立ち並ぶエリアにたどり着いた。

「俺は後ろから付いて行くから適当に見て回るか。」

そう言っただけ俺は一步下がるが、雪ノ下は何も言わず一向に歩き出そうとしない。

「どうかしたか？」

声をかけると雪ノ下は振り返って少し困った表情を浮かべる。

「私、友達にプレゼントを渡したことなんてないの。」

それに、私の感性は今の女子高生とはかけ離れているだろうし……。」

なるほど、何を渡せば喜んでくれるから分からないってことか。

ただ、これに関しては俺は彼女の力になることはあまりできない。

由比ヶ浜の好みを教えることはできても、最終的に選ぶのは雪ノ下でなければそれは

彼女のプレゼントではなくなくなってしまふ。

だから、小さなことでも俺にできることといえば……。

「プレゼントを渡した時にお前が由比ヶ浜の喜ぶ顔を想像できればそれでいいんだよ。

大切なのは物じゃなくて気持ちだ。」

柄にもない言葉をアドバイスとして雪ノ下に告げる。

すると、彼女は少し微笑んで答えた。

「あなたにそんなことを言われるなんてね。

でも、ありがとう。頑張ってみるわ。」

そして、雪ノ下は一番近くにあった店へと入っていく。

俺はその後を三步ほど離れて付いて行った。

結局、雪ノ下を選んだのは装飾の少ないピンクのエプロンだった。

俺から見てもなかなかいいプレゼントだと思う。

まあ、由比ヶ浜のことだから雪ノ下のプレゼントならなんでも喜ぶと思うが……。

そして、プレゼント選びが終わった今、俺たちに目的はもうないので、来た道を引き

返して帰ろうとしているところだ。

「あ。」

突然、少し後ろを歩いてきた雪ノ下がそう言っただけで立ち止まった。

「何かあったか？」

言いながら振り返ると、そこにはゲームセンター。

そして、雪ノ下の目線の先にはUFOキャッチャーがあった。

俺の問いかけに答えもせずにもそのUFOキャッチャーを見に行つた雪ノ下に俺はやれやれと思いつつ近づくと、

その中身を熱心に覗く雪ノ下の視線はディスプレイニールランドのキャラクター、パンダのパンさんのぬいぐるみがあった。

「好きなのか、パンさん。」

「……ええ。昔、もらったことがあるの。」

雪ノ下は俺の問いに少し躊躇してから答える。

だが、彼女はウインドウ越しのパンさんから目を離そうとしない。

俺は小さくため息をついて、雪ノ下を押しつけた。

「はあ……。そこだけ、とってやるよ。」

「取つてもらわなくても結構よ。」

あなたから施しなんて受けたくないわ。」

他人にとつてもらおう、というのが彼女のプライドを傷つけるのか、雪ノ下はそう言っ

た。

まあ、パンさんを凝視しながらそんなこと言われても説得力は全然ないのだが。「分かった分かった。なら俺が勝手に取る。」

言いながらUFOキャッチャーに百円玉を入れる。

最初は足のあたりを掴む。

当然、握力のないクレーンでは持ち上げることなんて不可能だ。

だが、計画通りパンさんのぬいぐるみはその場でひっくり返る。

「だから、別に取らなくても……。」

今ので無理だと思ったのか、雪ノ下は俺を止めるが、それを無視して再び百円玉を投入。

ひっくり返ったことで露わになった商品タグを狙ってスイッチを操作する。

その作戦は上手くいき、二回目にしてぬいぐるみを取ることに成功した。

ちなみにこれは、高校生はゲーセンに行くことが多いので自然に身についたスキルである。

そして、取り出し口からぬいぐるみを取り出し、雪ノ下に渡す。

「おは。」

しかし、渡したパンさんを雪ノ下は押し返してくる。

「これを手に入れたのはあなたでしょう。」

これはあなたのものよ。」

「別に俺が欲しくてとったわけじゃない。」

それに、人の好意は受け取っておくのが礼儀だぞ。」

頑固な雪ノ下に再びぬいぐるみを押し付ける。

すると、次は押し返さずに受け取る。

「その……ありが、とう。」

雪ノ下の感謝の言葉に気恥ずかしさを覚えた俺は、そっぽを向いて答える。

「……どういたしまして。それじゃ、帰るぞ。」

俺はくるりと後ろを向いて歩こうとする……が。

「あれー？雪乃ちゃん？」

あ、やっぱり雪乃ちゃんだ！」

背後から響いた無遠慮な声に俺の足は再び止まった。

e p. 12 雪ノ下陽乃は不敵に笑う

振り返ると、雪ノ下に近づくと女性が一人。

先ほどの雪ノ下の呼び名から察するにおそらく親しい知り合いなのだろう。

由比ヶ浜以外にそんな相手がいたとは意外だ、と思つたが、俺の予想は雪ノ下の言葉によつて否定される。

「……姉さん。」

彼女は険しい顔つきでそう呟いた。

「……姉さん？」

俺は外した視線を再びその女性に向けた。

柔和な笑顔を浮かべて近づいてくる彼女は確かに雪ノ下の面影がある。

その艶やかな黒髪や、きめ細かく透き通る白い肌、そしてその端正な顔立ち。

雪ノ下とは方向性が違うが、彼女もとんでもない美人だった。

しかし、妹とは決定的に違うところがある。

それは、彼女の背後に見える一緒に来たと思われる大学生のグループと、雪ノ下が絶対にしなないであろうその人懐っこい笑顔だった。

根拠はないが、俺は直感的にこう感じた。

きつと彼女は周りから好かれ、もてはやされる人間なのだろう、と。

けれど、そんな彼女に俺は言いようのない嫌悪感を感じた。

よく分からないけど気持ち悪い、初対面の相手にそんな風を感じたのは初めてだった。

さて、当の彼女はというと、雪ノ下に会えたのが嬉しかったのか、楽しそうに雪ノ下に話しかけている。

一方で雪ノ下本人はそれがうつとおしいと言わんばかりに絡んでくる姉を邪険に扱っていた。

そして、俺の視線に気づいたのか雪ノ下の姉が初めて俺の方を見る。

一瞬不思議そうに首を傾げたが、すぐに表情を変え、とびきりの笑顔で雪ノ下に詰め寄った。

「ねえねえ雪乃ちゃん！あの子誰？もしかして雪乃ちゃんの彼氏!？」

デートの途中だったのかな？

だとしたら、お姉ちゃん邪魔しちゃったかな……。」

当然、雪ノ下はその勘違いを訂正しようとするが、興奮している姉を前にして少したじろいでいるようだ。

仕方ない、助け舟を出すか。

勘違いされるのも困るしな。

「妹さんとお付き合いはしていませんよ。

今日は共通の友人の誕生日プレゼントを探しに來ただけです。」

彼女への嫌悪感を拭えぬまま、俺は表情を作つてそう言った。

「えー、なんかつまんないよー。」

俺の返答が気に食わなかつたのか、彼女は可愛らしく少し頬を膨らましてそう言った。

「そう言われましても……。」

それと、俺は比企谷八幡です。雪乃さんとは同級生で同じ部活に所属しています。」

少し困つた表情を見せてから、俺は自己紹介をする。

すると、ずっと一歩近づいてから彼女も俺に続く。

「私は雪乃ちゃんの姉、陽乃です。」

雪乃ちゃんと仲良くしてあげてね。」

並大抵の男子高校生なら見ただけで恋に落ちそうな笑顔で彼女は、雪ノ下陽乃はそう

言った。

それにしても、と彼女はさらに続ける。

「君が比企谷君か……。」

そう呟いた時の彼女の表情は先程までのそれとは別物だった。

目を細め、冷たい視線で俺を眺める。

それはまるで、俺という人間の価値を測るかのようだった。

そして、俺は彼女の呟きを聞いた瞬間、いや、彼女の表情の移り変わりを見た瞬間に強烈な既視感に襲われた。

しかし、戸惑う俺を他所に雪ノ下さんは嬉しそうに俺に話しかけてくる。

「ねえねえ比企谷君。君が雪乃ちゃんのお父さんじゃないにしても、一緒に遊びに行くくらい仲いいんですよ？」

なら、お姉ちゃんも比企谷君のこと知りたいな。

雪乃ちゃんが友達と一緒に遊んでるなんて初めてなんだもん。」

言つて彼女はさらに俺に近づいてくる。

近い、と言うよりかはほとんどくっついていてと言つてもおかしくない距離だ。
「え、ええ。構いませんよ。」

どこか店でも入りますか？」

一方俺はと言うと、さっきの謎の既視感と突然の誘いに柄にもなく焦つてしまい、条件反射で了承してしまう。

けれど、俺の頭の中で危険信号がうるさいほど騒ぎ立てている。

この人に関わってはいけない、と。

けれど、言ってしまった手前、今更引き下がることもできないので俺は表情を作り彼女に笑いかける。

「うーん、わざわざそこまでしてもらわなくてもいいよ。

二人の邪魔はしたくないし。

そのベンチに座ろうよ。」

雪ノ下さんは近くにあったベンチを指差し、俺と同様に笑顔を浮かべる。

そして、さっさとそちらの方向へ行ってしまう。

俺もそれに続こうとするが――

「比企谷君……。」

背後から聞こえる氷よりも冷たい声に足が止まる。

やっべ、こいつのこと忘れてた。

「すまん、成り行きでな……。」

そんなに嫌ならお前からあのの人に言ってくれ。

今更俺は断りづらいんだよ。」

そう言うのと、雪ノ下はこめかみに手を当てて小さくため息をつく。

「別に構わないわ。

それに、ああなつてしまった姉さんを止めるなんて私にはできないの。」

その口ぶりからするにきつと雪ノ下は姉のことを苦手に思っているのだろう。

確かに俺も驚くほどの正反対の性格だ。

相容れない方が当然だ。

「お前も大変なんだな。

俺と言いあの人と言い。」

「全くその通りね。」

そう言ううと雪ノ下は姉の座るベンチに向かつてさつさと歩き出してしまった。

「比企谷君はいつ雪乃ちゃんと会ったの？」

雪ノ下さんは上目遣いで俺を見ながら聞いてくる。

「名前だけなら随分前から知っていました、実際に会って話したのは二年生の一学期になつてからです。」

「じゃあどうして突然会うようになったの？」

「ある先生が俺を部活に誘つてくれました、その部活の部長が彼女だったんですよ。」

質問攻め。

雪ノ下さんは俺と会話をすると言うよりかは、雪ノ下と俺の関係を根掘り葉掘りと聞いてくる。

当然、雪ノ下はそんなことを聞かれるのを嫌がったが、さっきの言葉通り姉を止めることはできなかつたようで、観念したように俺の隣に座っている。

俺はというと、矢継ぎ早に繰り出される質問に多少誇張を入れながら笑顔を崩さないように答えている。

そして、一つ分かったことがあった。

彼女と、雪ノ下陽乃と会った瞬間に直感的に感じた彼女の完全性は紛れもなく本物だということだ。

コミュ力はもちろんのこと、表情のレパトリ、質問攻めにされても不快に感じない巧みな話術。

どれか一つを取っても何一つ欠けることのない完璧な人間だった。

完全に完璧で隙のない、完成された人間。

ふと、そんな評価が脳裏によぎった瞬間、俺は彼女と会った時に感じた言いようのない嫌悪感と強い既視感を理由を悟った。

雪ノ下陽乃は比企谷八幡と「同類」だということ。

それを理解した瞬間、俺は今すぐここから走って逃げたいと思ってしまうた。

俺と「同類」。

つまり、仮面を被って決して他人にその素顔を見せない、嘘で塗り固められた人間。それをまざまざと自分の眼の前で見せつけられるのだ。

そんなのは、まるで……。

見ると、雪ノ下陽乃はニヤリと先程までとは別人のように唇の端を歪めている。

やっと気づいたのか、と言わんばかりに。

「ここから逃げ出したい、という衝動を押さえながら俺はそういえば、と話しかける。彼らは大丈夫なんですか？」

「あそこですつとあなたを待っているようですが。」

指をさすのは雪ノ下さんと一緒に遊びに来ていた大学生のグループだ。

彼女が雪ノ下と俺と会ってからずつとあそこで女王の帰りを待ってる。

もちろん、そんなことを雪ノ下さんが気づいていないわけもなく。

「大丈夫だよ。」

あの子達は私が待つてつて言ったらいつまでも待つてるんだから。」

彼女は家来は王に仕えるのは当然だ、と言わんばかりにそう告げる。

「圧政は民衆の反乱を招きますよ？」

俺の言葉か、それとも俺の気持ちの悪い笑みに対してなのかは分からないが、雪ノ下

さんは驚いたように一瞬目を見開く。

しかし、彼女はすぐに持ち直して挑発的に笑う。

「それも問題ないよ。」

あの子達の頭の中に反乱なんて言葉はないからね。」

「徹底した管理を敷いているようで安心しましたよ。」

けれど、どんな王であろうとあまりにも彼らを弾圧するようなら、最後は——」

「——腹心による暗殺、かな？」

俺の言葉を察して、彼女はそう言った。

そして、不敵な笑顔を浮かべながら立ち上がり、俺にこう言った。

「君の諫言、心に留めておくよ。」

私はまた君とお話しがしたいな。今度はゆっくりと。」

「……機会があれば。」

俺がお断りの常套文句を口にする、それすら気に入ったのか雪ノ下さんはもう一度小さく笑うと、俺たちの前から去っていった。

残された雪ノ下と俺。

先に口を開いたのは雪ノ下だった。

「あなたなら気づくとは思ったけれど、そこまで辛辣になるとは思わなかったわ。」

「悪かったな。」

別にお前の姉を貶したかったってわけじゃないんだ。」

俺が謝ると、雪ノ下はいいえ、と言って続ける。

「別に構わないわ。」

けれど、あなたもあんな風に感情に身を任せることがあるのね。」

「お前は俺をサイボーグかなんかだと勘違いしてないか？」

苦笑混じりにそう返すと彼女は小さく笑いながら立ち上がった。

「ふふ、ごめんなさい。」

さて、帰りましょうか。」

「了解。」

それに続いて俺も立ち上がり、歩き出した。

e p. 13 由比ヶ浜結衣は選ばない

『由比ヶ浜さんの誕生日、あなたが部室に彼女を連れてきてくれないかしら？』
雪ノ下陽乃との会偶の後の帰りの電車の中、雪ノ下は唐突にそう言った。

『なんだよ急に。別に構わないが……。』

そう、別に俺が連れてくることに異存はない。

ただ、連れてこれるかどうかが問題なだけだ。

そんな俺の心中を悟ったかのように、雪ノ下は続けた。

『連れてこれなかったらそれでも構わないわ。』

それに、由比ヶ浜さん自身が来たくないと言うなら無理強いはしなくていいの。

ただ、あなたが彼女を連れてこようとしなさい。』

きつと、雪ノ下も由比ヶ浜が来なくなったら理由に察しがついているのだろう。

それはこの買い物に行く前、部室での言動からも読み取れる。

『……了解。善処する。』

言うのと、雪ノ下は何も答えずにそつと目を閉じた。

そんな会話をしたのがこの前の休日。

そして、今日は由比ヶ浜の誕生日だ。

当然、俺たちのグループでも彼女を祝おうと計画は建てているのだが、当の本人があまり乗り気ではないようで、どこかに食へに行く、程度のことしか決まっていな。

「由比ヶ浜、ちよつといいか。」

放課後、俺は由比ヶ浜に声をかける。

「え、ヒツキー？」

う、うん……いいけど。」

俺は彼女が俺をあからさまに避けるようになってからできる限り彼女に接触しようとしていなかった。

だから、突然俺が話しかけたことで、由比ヶ浜は驚いた表情を見せる。

けれど、彼女はすぐにその表情をとり繕って無理に貼り付けたような笑顔を浮かべて了承した。

「今日は部活に来てくれないか？」

雪ノ下も俺も用があるんだが……。」

「……分かった。」

暗く沈んだ顔で彼女は答える。

すると、不意に背後から声をかけられる。

「ハチ、今日はあーしらと夜食べに行くこと分かってるよね？」
話しかけてきたのは三浦だ。

まあ、元々そういう予定だったのだ。そう言われることは大体予想できていた。
「悪い、三浦。ちよつと部活に用事があるんだよ。」

後から俺たちで合流するからさ、適当に連絡くれないか？」

「うーん、まあいいけど。」

あんまり遅れないですよ？結衣がいなくちゃ始まらないから。」

しぶしぶだが許可する三浦。

俺は正直、意外だと思った。もっと食い下がってくるものだと思っていたのだが、彼女も彼女なりに由比ヶ浜の変化を感じ取ってる、ということなんだろう。

「了解。」

じゃあ、さっさと行くか、由比ヶ浜。」

俺はそう言つてさっさと歩き出す。

「……うん。」

そして、俺の後を由比ヶ浜は重い足取りでついてきた。

無言。

当然と言えば当然なのだが、奉仕部へ向かう最中、由比ヶ浜は俺から少し距離をとって無言でついてくる。

はあ……、どうしたものか。

雪ノ下の口ぶりから察するに、部室に着くまでにケリをつけろってことなんだろうが……。

頭の中で思案を巡らせながら歩いていると、人気のない階段の踊り場に差し掛かった時、由比ヶ浜から俺に話しかけてきた。

「ね、ねえ、ヒツキー。」

小さく、か細い声だったが俺の耳に確かに届き、俺は次の階段の一段目に足をかけた状態で止まる。

そして、そのまま振り返らずに答える。

「なんだ？」

「あ、あのさ。この前、部室の前でヒツキーとゆきのんの話、き、聞いちゃってさ……。」「おどおどと言葉を詰まらせながら由比ヶ浜はそう言った。

予想通りつてところか。

最も予想できた理由で最悪の理由だ。

「……それで？」

俺は振り返って由比ヶ浜の顔を見ながら彼女の話を促す。

「そ、それでね、ゆきのんがさ、ヒツキーがあたしを……騙してるって聞こえたの。」

う、嘘だよな？ゆきのんが冗談言ってるだけだよな!?!」

ずっと心に押しとどめていたものを吐き出せたからなのか、由比ヶ浜がさつきまでとは打って変わって大きな声で俺にまくしたてる。

……きつとここで『そうだ』と言えば由比ヶ浜は信じるだろう。

何しろ俺はあいつの片想いの相手だ。

盗み聞きした程度で俺を疑うようになったのも、話の相手があつた雪ノ下だった、というのも一枚噛んでいいるはずだ。

それでも半信半疑だった由比ヶ浜は俺から離れるでもなく近づくでもない微妙な立場をずっと保っていたのだろう。

だから、ここで雪ノ下の言葉を俺がはつきりと否定してやれば彼女は間違いなく俺を信じる。

そして、俺もこんな軋轢がなかったかのように、これからもいつも通りの生活を送れるように立ち回り、嘘をつける自信がある。

ただー。

「……嘘じゃない、事実だ。」

「……………っ！」

由比ヶ浜と決着をつけてから部室に來い、という雪ノ下の言葉にしなかつた命令を破るのに抵抗を覚えた。

そして何よりも、俺の嘘が雪ノ下の言葉を嘘にすることが耐えられなかつた。

「職業体験で言つたあの言葉も全て本心じゃない。

口から出まかせだ。

あんなこと言つたのは俺自身の立場を守るためだ。

今までも同じ理由だった。」

俺の答えを聞いた由比ヶ浜は呆然と信じられないという表情を浮かべる。

「そう……………なんだ。」

あるいは、独り言だったのかもしれない。

言葉にすることで自分自身を納得させようとしたのかもしれない。

それくらいに、彼女の口からこぼれた言葉に力はなかつた。

「……………ゆきのんもあたしを騙してたの？」

絞り出すような声で由比ヶ浜が問いかけてくる。

「違う。」

あいつは俺がお前に嘘をついてることにずっと抵抗を覚えていた。

お前が盗み聞きした話もそうだっただろう？」

そうだ、雪ノ下雪乃は嘘を許さない。

俺のことを認めない。

彼女自身も決して嘘をつかない。

それが雪ノ下の在り方なのだから。

「……そっか。」

由比ヶ浜は力なく呟く。

それきり、自分からは口を開こうとしなかった。

俺はこうなった時に相手にすると決めていた質問を口にする。

「さて、これからお前は どうする？」

こんなことなかったかのようにしていつも通り生活するか、もう一緒にはいられないと思うなら、お前のそばから離れる。

由比ヶ浜、お前が選べ。」

少し間が空いてから由比ヶ浜はか細い声でこう言った。

「ヒツキーが……、ヒツキーだけがあたしを……騙して利用、してたん、だよな？」

「ああ、そういうことだ。」

最後の確認、と言わんばかりの質問に俺は即答する。

由比ヶ浜は絶望したように目を見開き、そしてだんだんと彼女の目に涙が溜まっていた。
く。

「……………ごめん。」

最後には涙を流しながら、由比ヶ浜はそう言つて振り返つた。

そしてそのまま、階段の方向へ向かう。

……はあ。

俺は小さくため息をつく。

俺は——。

「きゃっ—！」

俺の思考はその叫び声で遮られ、咄嗟に由比ヶ浜を見る。

すると、彼女は急いでいたからなのか、まさに階段から落ちようとしてる瞬間だった。

「由比ヶ浜っ—！」

足が勝手に走り出した。

「見たところちよつと打ち身になってるくらいで大丈夫だと思うよ。」

保健の先生がこちらを向いて微笑みながら言う。

「はい……、ありがとうございます。」

「いやー、それにしてもかつこいいね、比企谷君。」

今時、こんなことしてくれる男の子なんて滅多にいないよ？

びつくりしたもの。気絶してるあなたを背負って彼が来るんだから。

しかも『こいつが階段から落ちました。診てやってください。』って。

明らかに本人の方が重症なのにね。」

「そう……ですか。」

「あんまり自分を責めちゃだめだよ？その代わり、彼が起きたらちちゃんとお礼を言うこと。」

「私はちょっと職員室に用事があるから出て行くけど、彼が起きたら一応呼びに来てね。」

「……分かりました。」

そして、先生は部屋から出て行った。

……あたしは、バカだ。

ヒツキーがああ話を認めて、訳わかんなくなつて、その場から逃げ出そうとした。

どうしてヒツキーがこんな事してまであたし達と一緒にいたのか、その理由も聞こう

としないで。

挙げ句の果てにまた助けてもらった。

……でも、これで分かったことがある。

あたしの中のヒツキー、入学式の日に危険を顧みずにサブレを助けてくれたあたしの大好きなヒツキーは偽物じゃなかったってことが。

だから、謝らなきや。

逃げ出そうとしてごめんって。

ありがとうって言わなくちや。

あたしを二回も助けてくれたんだから。

それからー。

それから、あたしはどうしたらいいんだろう。

『由比ヶ浜、お前が選べ。』

彼の言葉が頭の中で再生される。

「どうしたら……いいのかな。」

目の前で寝ている彼の頬に貼られた大きなガーゼにあたしはそつと触れる。

今、目の前にいるヒツキーは何でもできて頼りになるヒツキーじゃないのに。

あたしが選ばなきやいけないのに。

無意識にそんな眩きが漏れていた。

「……………うん。」

すると、あたしの言葉に反応したのか、彼がゆっくりと目を開いた。

あたしは慌ててその頬から手を引つ込める。

「わわっ！ヒッキー!?!起きたの?」

彼は状況を飲みこめていないのか、おぼろげな目であたしを見る。

「由比……………ヶ浜?」

そう言った瞬間、何があつたのか思い出したらしく、彼は一気にベッドから跳ね起きた。

「由比ヶ浜!?!大丈夫なのか!?!」

「う、うん……………あたしは大丈夫だよ。」

ヒッキーが、助けてくれたから……………」

彼はそれを聞いて安心したのか、ふうっと小さくため息をつく。

「そうか……………なら良かった。」

そして、あたしから遠ざかるかのように再びあたしに背を向ける格好で横たわり、言う。

「付いていてくれてありがとな。」

もう俺は大丈夫だ。お前は三浦のところに行け。

俺が行かなかつた事に関しては自分で何とかする。

だから、これつきりだ。由比ヶ浜。」

彼は淡々と別れの言葉を告げる。

でも、このままじゃダメなんだ。

あたしはまだヒツキーに何も言つてない。

「あ、あのさ、ヒツキー。」

……ごめんね、また助けられちゃつて。」

あたしの言葉に彼は少し間を空けてからそのままの体勢で答える。

「もしも、助けられたから俺に恩義を感じてるなら、それは勘違いだ。

俺はずつとお前を騙し続けてきた。今さら善行の一つでどうにかなるものじゃない。

それに……もしかするとその行動すら演技かもしれないんだからな。」

彼は自嘲的な口調で言う。

でも、それは……。」

「嘘。」

その嘘はあたしでも分かるよ、ヒツキー。

ヒツキーはあたしを本当に助けようとしてくれたもん。」

「……………」

彼は何も言わない。

「だからさ、ありがとう。ヒツキー。

あたしを助けてくれて。」

なんでだよ、そう小さく呟きながら彼はベッドに腰掛け、あたしの目を見て言う。

「…………俺に謝るな。感謝するな。」

俺はそんなものを受け取る権利、持っていない。

お前にとっての『比企谷八幡』は偽物だ。

その『比企谷八幡』は俺じゃない。」

ゆつくりと、けれど力のこもった声で彼は言い切る。

あたしは、そんなヒツキーの言葉の中に怒りを感じた。

お前は俺を見ていない、と。

誰も俺自身を見ていない、と。

誰も自分を見てくれない、期待された自分を演じ続ける。

きつとそれは辛いことなんだろう。

そう思った瞬間、あたしの中に一つ疑問がわいた。

きつとこれが分かれば、あたしは選べるんだと思う。

自分の中で定まった疑問ははつきりと言葉になってあたしの口から出て行く。

「どうしっか？」

どうしてそんなに辛いのにそんな生き方をしてるの？

あたしは、それが知りたい。

それを知ったら、これからあたしがどうしていいのか分かんと思う。」

しつかりと彼を見据えてそう言った。

すると、彼は自虐的な笑みを浮かべる。

「辛い……か。」

でもな、もしも俺がここでその質問に答えたとしてだ、お前はそれを信じられるのか？

嘘ばかりついて生きてきた俺の言葉を。」

「信じるよ。」

あたしはヒツキーの言葉を信じられるよ。」

即答する。

信じられるに決まってる。

だってー。

「ヒツキーは二回もあたしを助けくれたもん。」

信じられないわけじゃないじゃん。」

そう言い切ったあたしに対して、彼は強く拳を握りながら絞り出すような声で言う。「分から……ない。どうして信じられる。」

疑えよ、信じるなよ。

今までずっと騙し続けてきた俺を恨めよ。

暴言ならいくらでも聞いてやる。

だから……。」

確かにあたしは騙されていたんだろう。

普段のヒツキーはあたしに嘘をついていて、素顔なんて全然見せなかったんだと思う。

でも、普段あたしが見ていたヒツキーは偽物だったとしても、あたしが信じていたヒツキーは本物だった。

それで信じる理由には十分だ。

「あたしは信じる。」

あたしの中のヒツキーは嘘じゃなかったから。

だから、教えてくれないかな？」

もう一度彼に問いかける。

すると、彼は少し困惑したような表情を浮かべた後、先ほどよりもずっと弱々しい声で呟く。

「それでも、教えられない。

その理由つてやつを話すべきなんだつてのは分かつてる。

でも、話せない。

だから、もう……。」

自分と一緒にいるな、と言いたいんだらうか。

でも、まだあたしは選べてないから。

その答えを知るまであたしは選べないから。

だから——。

「分かった。

ならあたしは待つよ。

ヒッキーが話してくれるまで待つ。」

あたしの言葉にヒッキーは本当に驚いたようで、すつとんきような声を上げる。

「はあ？」

待つつてお前。それまでどうするつもりなんだよ?。」

あたしは少し考えてから答える。

「うーん、今まで通りでいいよ。

でも、あたしの前じゃ嘘はつかないでね。

隼人君たちと一緒にいるときは仕方ないけど。」

「お前は……それでいいのか？」

おそるおそると言わんばかりに彼が尋ねてくる。

「もちろん、嘘はついてほしくないよ？」

でも、ヒッキーがそうする理由が分かるまでは我慢する。

だから、いつか絶対教えてよね。」

それを聞いた瞬間、彼はふつと息を吐き出し、破顔する。

「由比ヶ浜はやっぱりバカだな……。。」

「えへへ、そうかもしない。」

あたしも同じような笑いながらそう言った。

見ると、壁時計は既に頂点を過ぎ、家の中からも外からも音は聞こえなくなっていた。目を閉じると由比ヶ浜の泣き顔が脳裏によぎる。

……眠れるわけがない。

『最終的に丸く収まったから良い、なんて思ってるのか?』

過去の自分が、心の奥底に閉じ込めたはずの自分が俺自身に問いかけてくる。思ってるわけないだろう。

結果がどうであれ、俺が彼女を傷つけたの紛れもない事実だ。

俺のせいで彼女は涙を流した。

言い逃れも何もできない。

『なら、お前はこれからどうするんだ?』

これからどうするか。

何も変わらない。

いつも通り学校へ行き、いつも通りの生活を送る。

ただ、俺の秘密を知るやつが一人増えただけだ。

『彼女はお前のその在り方を容認したが、お前はそれでいいと思ってるのか?』
思っていない。

こんな間違っている。

『だったら、どうしてその生き方を選んだんだ?』

俺のせいで誰かが傷つくのを見たくなかったから。

俺が弱いことで、他人を傷つけないから。
『じゃあ分かってるんだろ？』

今回の出来事は本末転倒だつてことくらい。
分かってる。

分かっていた。

それを理解した上で俺は変わらない。

俺はあいつらみたいに強くなれないから。

e p. 14 こうして彼らの居場所は形作られる

「弁明があるなら一応聞いてあげるわ。」

高圧的な口調で雪ノ下が俺を見下ろしながら言う。

「……何もございせん。」

雪ノ下の目の前で床に正座させられている俺はうなだれながら眩き、裁判長の判決を待つ。

「そう、なら良くて死刑、悪くて……。」

そこで言葉を切らないでもらえます？怖いんですけど。

というか、良くて死刑って、それより悪いのがあるのかよ。

見上げると、雪ノ下は天使のような満面の笑みを浮かべていた。

そして、立ち上がって、喜びが隠しきれない声でとんでもないことを口走る。

「一生私の奴隷ね。」

訂正。

こいつは悪魔だ。

さて、どうしてこんなことになってるかというと言うと、単純明快、俺が雪ノ下との約束を破ったからだ。

あの後、つまり保健室で由比ヶ浜と話した後、彼女が先生を呼び、俺の怪我の具合を診てもらった。

当然、それが終わる頃には最終下校時間とはとくに過ぎ、由比ヶ浜と俺が急いで部室に向かつてもとつくにもぬけの殻だった。

雪ノ下に連絡をしようと思っても俺は彼女の連絡先を知らず、結局今日部室に来てから話すことにしたのだが、案の定、部室のドアを開けると案の定雪ノ下が怒りに満ちた表情で座っていたのだった。

まあ、俺に非があるので文句を言わず罰は受けるつもりだが。

俺の人生をかけて償えと……。

「まあ冗談はこの辺にしておきましょう。」

雪ノ下がさらりとそう言って、再び彼女の定位置の椅子に腰をかける。

嘘つけ。割と本気で怒ってただろ、お前。

「それで？結局由比ヶ浜さんとは和解できたのでしょうか？」

突然雪ノ下が昨日のことを問うてくる。

そりゃ気になるのも当然なのだが。

……和解、か。

「正確に言うなら保留、だ。」

許容や肯定でも、拒絶や否定でもない。由比ヶ浜はその二者択一を行わなかった。彼女にとっては判断材料が少なすぎたのだろう。

ただ、それを提供しなかったのは俺であり、俺が由比ヶ浜に選ばせなかった、と言った方がいいのかもしれない。

「保留、ね。」

けれど、彼女は部活に来るのでしよう？」

俺の言葉を小さく呟いた後、雪ノ下が再確認とばかりに問いかけてくる。

「多分な。」

少なくとも俺には行く気に見えた。」

「あなたたち同じクラスなのに、どうして一緒に来ないの？」

彼女の当然の疑問に俺は即答する。

「下手に二人きりで行動して周りに勘違いされたらどうするんだよ。」

俺の答えを聞いた雪ノ下が小さく笑って言う。

「そうね、失礼な質問だったわ。由比ヶ浜さんに。」

その言葉が失礼だ。主に俺に。

そんなどうでもいい会話をしていると、部室のドアがゆっくりと開いた。

「や、やつはろー。」

遠慮がちな声が部室に響く。

見ると、ドアの隙間からチラリと由比ヶ浜が顔を覗かせていた。

無断で部活を休み続けていたのだ。律儀な彼女なら責任を感じるのは当然のことだろう。

と、不意に俺と視線が合う。

すると、それまでの控えめな態度はどこかに消え去り、ガラツと一気にドアを開けて俺に詰め寄ってくる。

「ヒッキー！どうして先に行くし!？」

「いや、下手にふたー」というか、なんで正座してんの?」

俺の話を聞く気はないんですね、分かります。

「昨日の件について、比企谷君に説教してたのよ。」

いつもと変わらぬ冷静な声で雪ノ下が淡々と状況を告げる。

「ゆきのん……。」

由比ヶ浜が雪ノ下の顔を見て小さく呟く。

俺のことを知った今、彼女は雪ノ下に対する態度をどうしていいのかわからないのだ

ろう。

それに、部活の欠席についての負い目もあるはずだ。

けれど、雪ノ下はニコリと微笑んで以前と変わらない調子で言葉をかける。

「こんにちは、由比ヶ浜さん。」

また会えて嬉しいわ。」

由比ヶ浜はと言うと、一瞬考える素振りを見せたかと思うと、突然俺の隣に正座した。

「……えーつと、由比ヶ浜さん？何をしているの？」

さすがに雪ノ下も驚いたようで目を見開きながら正座している彼女に話しかける。

「昨日のことならあたしにも責任があるもん。」

だったら、あたしもヒツキーと一緒に謝らなきゃいけないでしょ？」

由比ヶ浜は雪ノ下の目を見てはつきりと宣言する。

「い、いえ、由比ヶ浜さんはいいのよ。」

この男が問題だから……。」

その言い回しだと俺の存在が問題みたいな言い方じゃねえか。

まあ、あながち間違っていないんだが。

そして、由比ヶ浜は慌てる雪ノ下に対して真面目な声色で告げる。

「ううん、あたしにも責任はあるよ。」

それにね、ずっと黙って部活休んでたんだからちゃんゆきのんに謝らなきゃいけないもん。

だから、ごめんね。ゆきのん。」

「……ええ、分かったわ。」

だから由比ヶ浜さん、立ってちようだい。」

雪ノ下は少し考えた後、由比ヶ浜の謝罪が妥当だと判断したらしく、素直にそれを受け取った。

ちなみに俺は非難がましい目を作って雪ノ下を見ている。

彼女が俺の視線に気づくとすぐに意図を読みとったようで、小さくため息をつく。

「はあ、あなたも立っていいわよ。」

「ん、分かった。」

遠慮なく立ち上がり、俺は自分の定位置に座る。

「あ、あたしもここに座るね。」

由比ヶ浜がしばらく使われていなかった雪ノ下と俺の間にある椅子に座る。

これで元どおり、ということなんだろう。

変わったのは由比ヶ浜と俺の関係だけだ。

雪ノ下が静かに本を開く。俺も鞆から文庫本を取り出し読み始めた。

「……………あのー、由比ヶ浜？」

視界の端でチヨロチヨロ動くのやめてくれませんか？

久しぶりの部活の雰囲気慣れないのか、それとも今の俺には慣れていないからなのかは分からないが、由比ヶ浜はそわそわとして落ち着かない様子だ。

「へ、この感じ久しぶりだね。」

躊躇しながらも由比ヶ浜が話題を振る。

「そうね。」

最近はずっとこの男と二人だったから気が滅入りそうだったわ。」

「そ、そうなんだ……………」

どうして会話に参加してない俺を貶すんだよ……………」

後、どうして由比ヶ浜は否定してくれないんだよ。」

「……………」

「……………」

「……………」

そして、それ以上会話は続かず、本のページをめくる音だけが部室に響き、由比ヶ浜はいつまで経っても居心地が悪そうだ。

……………普段演じている自分自身の影響かもしれないが、どうしてもこの空気の重い沈黙

はムズムズしてしまふ。

こんな空気になるのは大抵グループの関係性が悪化したときだからな……。

今回は例外、関係性の変化というのが正しいが。

「……気持ち悪いか？」

そんなこと考えても、口から出る言葉はそれだった。

自分で意識しない内に、由比ヶ浜に演技をしないことを気にかけているのかもしれない。

こんな対象が誰か不明瞭な質問したら、すぐに雪ノ下が嫌味を言ってくるものだが、今回ばかりは瞑目して黙ったままだ。

対して由比ヶ浜は少し間を置いてから答える。

「そうじゃないんだけど……」。

まだちょっと慣れないかな。さつき教室にいた時はいつものヒツキーだったから。」

普段の比企谷八幡が偽物で、異質な比企谷八幡が偽物ではない、という変化は彼女にとつて受け入れがたいものなのだろう。

「無理だったら、受け入れられなかったらいつでも俺に言え。」

言い方が悪いが、いつでも俺はお前のそばを離れられる。」

「ううん！だから、そうじゃなくて……」。

慣れてない、だけだから。」

彼女は両手をブンブンと振って必死に否定する。

なんだ、意外と元氣そうじゃねえか。

すると、ここまで沈黙を保っていた雪ノ下が口を開いた。

「比企谷君、由比ヶ浜さんが決めたのだからとやかく言うのは失礼よ。

元より、由比ヶ浜さん自身が選んだのでしよう？」

「まあ、そうなんだが……。」

そう言われれば何も言い返せない。

気にしすぎ、なんだろうか。

「そうだよ！」

それにあたしはみんなが知らないヒツキーを知れてちよつと嬉しいんだよ？」

由比ヶ浜が付け加える。

俺は観念して小さくため息をついた。

「はあ、なら俺はもう何も言わない。」

「うん、それが一番だよ。」

まあ、一番気にしていた由比ヶ浜がこう言ってるんだからこれ以上突っ込むのも野

暮つてものか。

「それで、話変わるんだがこの前結構いい店を見つけたんだよ。

よかつたら今度葉山達も誘って行ってみないか？」

少し強引な話題転換をする。

これ以上さっきの話をしても得られるものはないからな。

そして、由比ヶ浜も俺の意図を知ってか知らずかその話題に乗って来る。

「マジで!?!行こ行こ!」

「なら次の休日にもみんな誘うか。」

すると、由比ヶ浜は少し考えてから胸の前で手を合わせて笑顔で言う。

「そうだ!」

今度あたし達でそこに行こうよ!」

「遠慮させてもらうわ。」

「右に同じく。」

「即答で却下された!?!」

由比ヶ浜は彼女らしく表情をコロコロと変える。

「どうして休みの日にお前らのポイントを稼がなきゃいけないんだよ。」

つい、いつも雪ノ下に話すときののような感覚で言葉が出てしまう。

その言葉を聞いた由比ヶ浜は力なく笑う。

「あはは、そつか……。そう、だよね。」

そんな顔されたら罪悪感が湧くじゃねえか……。

こういうのを素でできるから由比ヶ浜は怖い。

「……まあ、なんだ、雪ノ下が行くって言うなら俺も吝かじゃないが。」

しかし、結局することは秘技・雪ノ下に丸投げである。

ちなみに使用は二回目。

そして雪ノ下を見ると答えなければかりか、なぜか少し笑っている。

「ふふふ、何も変わっていないじゃない、あなたたち。」

「それは……。」

そう言われて俺は口ごもる。由比ヶ浜は何も言わない。

ただ、雪ノ下は返事を求めているのかそのまま続ける。

けれどその声は普段の凜としたそれではなく、どこか憂いを帯びた声色だった。

「そもそもあなたたちが出会った原因から考えたら、二人とも等しく被害者だわ。」

全ての原因は加害者に集められるべきよ。

多少曲がりくねった道だったかもしれないけど、始まりが同じならあなたたちはこれからもやっていけるわ。」

その時の雪ノ下の表情は夕焼けの影となり、よく見えなかった。

かろうじて微笑んでいるのが分かるくらいだ。

けれど、なぜか俺の頭の中にその表情が克明に思い描けた。

記憶の中のあいつの表情と重なった、穏やかで寂しげな微笑を。

「ゆきのん……。」

由比ヶ浜が小さく呟く。俺は黙ったままだ。

「さて、そろそろ時間ね。」

私は平塚先生に部員補充完了の旨を伝えてくるわ。

鍵をかけるから部屋から出てちょうだい。」

雪ノ下が突然立ち上がってそう言った。

「あ、うん。」

「了解。」

由比ヶ浜と俺はその指示に従い、先に部室を出る。

腕時計を見ると普段部活が終わる時間よりもずっと早い。

「由比ヶ浜。」

「どうしたの？」

「先、帰つといてくれ。」

「ちよつと用事ができた。」

「オツケー、分かった。」

ならまた明日、ヒツキー。」

明らかに不審な理由だが、由比ヶ浜も何か感じるところがあつたのか素直に聞き入れ、胸の前で小さく手を振る。

「おう、またな。」

そして俺は彼女とは逆の方向に歩き出す。

あ、こつちからだと職員室には遠回りになるな……。

「失礼しました。」

雪ノ下の声が廊下に響く。

俺はドアの横の柱にもたれていたの、ちょうど出てきた彼女とすれ違う形になる。

「比企谷君……。」

さすがに彼女も俺に気づき、少し驚いた表情で俺を見る。

けれど、そんなことは御構い無しに俺は話し始める。

「由比ヶ浜と俺の問題の責任は全部俺にある。」

「……っ！」

「何が始まりが一緒だ。関係ねえよそんなもん。」

多少曲がりくねった道？多少なりどころか180度反転した道だったわ。

お前があの車に乗ってたかどうかなんて知らない。

でもな雪ノ下、お前に一切の責任はない。そんなことで俺や由比ヶ浜に気を使うな。」

言いたいことを一気に口にする。

最後に『以上！』とでも付け加えたいくらいだ。

そんなどうでもいいことを考えている俺とは対照的に、雪ノ下は強張った表情のままだ。

「あなた、知っていたの？」

「雪ノ下の家の車に轆かれたことは知っていた。

いや、思い出したと言ったほうがいいな。

お前が乗ってるかどうかは当然だが知らなかった。」

けどな、一呼吸置いてから続ける。

「震えた声、妙に区切りのつけた話し方。

気づかないと思ったか？」

場数が違う。といえれば聞こえはいいが、実際雪ノ下と俺では隠し事の個数も、嘘をついた回数も比べ物にならないだろう。

そんな雪ノ下が俺に隠し事、いや言葉の裏を読み取らせないことなんてできるわけが

ない。

「なら……せめて謝らせてくれないかしら。」

「却下だ。」

即答する。

「お前は何もしてない。俺に罪の意識を感じる理由さえない。

そもそも、あんな事故があろうとなかろうと、俺はきつと由比ヶ浜に目をつけて絡みに行つたに違いない。

まあ、ここまで言つてもお前のことだから聞かないんだろうな。」

雪ノ下はしっかりと俺の目を見据えて答える。

「ええ。いくら屁理屈をごねたとしても、私があこの車に乗っていた事実は変わらないわ。」

頑なな彼女の物言いにおもわず少し笑いが漏れてしまう。

「何かおかしかったかしら？」

それが気に入らなかつたようで、雪ノ下が問い詰めてくる。

「悪い。お互い頑固だな、と思つてな。

さて、どうしてもお前が譲らないんだつたら一つだけしてほしいことがある。

それでチャラだ。」

「……分かったわ。私にできることなら何でも。」

数瞬考えた後、雪ノ下は了承する。

本当に負けず嫌いな性格だ。

俺はニヤリと口の端を歪める。

「なら、由比ヶ浜にこのことを話せ。

それだけだ。」

次は雪ノ下が笑う番だった。

苦笑とも何とも取れない笑いをした後、彼女は言う。

「ふふ、あなたも大概ね、比企谷君。

分かったわ。明日きちんと彼女にも話すわ。」

「それならいい。

じゃあな。」

別にこれ以上話すことはない。

愛する小町が待っている家に帰るだけ——のはずなんだが、雪ノ下に背を向けて歩き出そうとするとすぐに制服の裾を掴まれる。

「……なんだ？」

振り向くと雪ノ下は自分の胸元をきゅつと握っていた。

そして、少し赤らめた頬を隠すように、潤んだ瞳で上目遣いに俺を見た。そして、絞り出すように彼女は途切れ途切れの言葉を紡ぐ。

「その、……メール、アドレス、交換しましょう。」

また、昨日みたいなことが、あつたときに……困るでしょう?」

何だ、そんなことか。

俺は制服のポケットから携帯を取り出すと雪ノ下に向かって手を伸ばす。

「携帯貸せ。打ってやるよ。」

e p. 15 やっぱり比企谷八幡に夏休みはない

「小町ー、粉塵頼む。」

間延びした声で小町が答える。

「りよーかい。麻痺まだなのー?」

「もうちょい待ってくれ。」

起爆は俺がするからな。」

夏休み。

言い方を換えれば、自宅で妹と戯れる最高のイベントである。

もちろん、今も小町を膝枕しながら絶賛ゲーム中である。

大丈夫。千葉の兄妹ならよくあることだ。

それにしても、と突然小町が話し始める。

「お兄ちゃん、こんなこととしていいの?」

「確かに今年受験の妹とダラダラとゲームするのはまずいか……。」

ここは兄らしく勉強させるべきなのだろうか。

俺が真剣に悩んでいるのに対し、小町はさつきと変わらない間延びした声で言う。

「そうじゃなくてー、いやそうなんだけどさ。」

いつもお兄ちゃんが言ってる、ポイント稼ぎーってのはいいのかなって。」

ああ、なるほどな。

い。今でこそ幸せな夏休みだが、お盆が終わってからはあいつらと遊ばなくてはならぬ。

それにあの暑苦しくて対して美味くもない食い物を出す屋台が並ぶ夏祭りがある。

「あー、大丈夫だ。」

ここから数日は忙しくて携帯触れないって前に言ってるからな。

それに俺はちゃんとポイント稼ぎしてるじゃねえか。」

言ってる、俺は小町の頭を撫でる。

メールは読んで無視、LINEは未読無視、電話は小町以外非通知も含めて全て着信拒否、さらに家から出なければ完璧だ。

い。後から適当にど田舎の祖父母の実家に帰っていた、とでも言っておけば何の問題もない。

「確かに一緒にいてくれるのは小町的にポイント高いけどさー。」

さつきからずつとお兄ちゃんの携帯鳴ってるよ?。」

小町は気持ちよさそうにむふーっと息を吐いた後、テーブルの上の俺の携帯を指差

す。

見ると確かに携帯が光っている。

「つたく、何なんだよ。」

手に持ったゲーム機を置いてソファから立ち上がる。

携帯の画面を見ると知らない人物からのメールだった。

とりあえず俺は確認のために受信ボックスを開く。

差出人は相手のメールアドレスで……。

件名：平塚静です。メールを確認したら連絡ください。

本文：平塚静です。君には先生と言った方が分かりやすいかもしれませんね（笑）

比企谷君はこの夏休みを……

長い長い。

本文のテキスト量が普通のメールの比じゃない。

というか、何で俺のメアド知ってるんだよ。

めんどくさいので最後まで読まずに携帯を閉じる。

あの人、メールじゃ人格変わりすぎだろ。いや、俺が言えたことじゃないことなんだ

が。

手に持った携帯をもう一度テーブルに置く。

「小町ー、ゲームの続きやるぞ……ってあれ？」

振り向くとソファーに座ってるはずの小町がいない、

いつのまに移動したんだよ。気配遮断のスキルでも持ってたのか。

「ちよつとー、小町ちゃん？」

大方自分の部屋にでも戻ったのだろう、そう思つて小町の部屋に向かつて声をかける。

「あ、お兄ちゃんー。ちよつと待つてー！」

待つ？ 一体何を待たばいいんだろうか。

とりあえずやることもないので、ソファーに座つてポーツとする。

夏の朝、涼しい部屋の中でゆっくりしているのだ。眠たくなるのは必然だろう。

気づけば俺の瞼は重くなり、夢の世界に落ちていった。

「ほらー！お兄ちゃん、起きるー！」

目の前で小町の声がする。

ゆつくりと目を開けると、突然膝の上に大きな荷物が置かれた。

「えーつと小町ちゃん？これは何？」

ちらりと時計を見ると寝てからまだ三十分程度しか経っていない。

「遊びに行くよー！」

小町は俺の前で仁王立ちして堂々と宣言する。

「遊びに行く？どこに？」

知り合いに出くわす可能性があるから俺はできれば家にいたいんだが。というかまだ寝たい。」

言うのと、小町は顔を近づけて問うてくる。

「お兄ちゃんは知り合いと睡眠と小町どれが大切なの!？」

「ばっか、小町に決まってるんだろ。」

即答。

むしろ小町より大切なものはないまである。

「だったら行こうよー！」

「はあ……仕方ねえな。」

着替えてくるからちよつと待ってる。」

しぶしぶ了承して立ち上がる。

ここまで小町がしつこく言ってくるのだ、何かしら譲れないものがあるのだろう。

「はい、これ着てね。」

自室に戻ろうとすると、小町から着替えを渡される。

渡されたのは伸縮性の高いズボンとTシャツ。

「……出かけるんだろ？」

「こんな適当な服装でいいのか？」

嘘とは言えども俺は割と今風の高校生をしている。

そりゃあいつらと遊ぶ時のために流行りの服ぐらい持っている。

小町がそれを知らないはずはないのだが……。

「ううん、これでいいの。」

動きやすい服装じゃないとね。」

けれど、小町は笑顔を浮かべてそう言った。

「まあお前がいいって言うなら構わないが。」

言いながら服を受け取りその場で着替える。

Tシャツから顔を出すと同時に小町から大きな荷物を手渡された。

「よし！それじゃ行こっか！」

「へいへい。」

やけに重たいその荷物を持って玄関に向かう。

なんだこの荷物。その辺に遊びに行くつてわけでもなさそうだが。

疑問に思っていると小町が玄関のドアに手をかけた状態で振り返りウィンクしてく

る。

「ーと言つても、目的地はすぐそこなんだけどね！」

そのままガチャリとドアを開ける。

ドアの先にはいつも通り家の前の道路とお向かいさんのお家ーではなく謎のワ
ンボックスカーが一台。

え、何、俺誘拐されちゃうの？

妹に誘拐されるとか斬新すぎるだろ。小説が一本書けそうだ。

「えーつと、何これ？」

そろそろ分らないことだらけで頭がパンクしそうになってきたんだが。

俺がその場で立ち尽くしていると家の前に停まっている車から一人の女性が降りて
きた。

黒いTシャツにデニムのホットパンツ、足元には登山靴みたいなスニーカー。

長い黒髪はポニーテールに纏められ、カーキ色のキャップを被っている。

サングラスのせいで表情は窺い知れない。

その女性は俺の前に立つとサングラスをクイッと額の上になぞらす。

……まあ、言うまでもなく平塚先生なのだが。

「さて、メールに返信がなかったのと、電話が繋がらなかったことの説明をしてもらおう

か、比企谷八幡。」

わあ、とつても怒っていらつしやる、この人。

「連絡先知らない人からの電話は着信拒否。メールは……寝てたんで気づきませんでした。」

真実と、否定しがたい嘘。

寝てたのは事実だよ、うん。

「お兄ちゃん、先生からのメール見てから寝てましたよ。」

まあ小町ちゃん。お兄ちゃんは簡単に告げ口する子に育てた覚えはありませんよ。

小町の言葉を聞いた平塚先生はやれやれと言わんばかりに頭に手をやる。

「だろうな。」

まあ別にいいだろう。無事なら結構、以前のこともあるから少し心配だったのだよ。」

その心配はありがたいのだが……。

「余計なお世話ですよ。」

あんな無茶する気は毛頭ありません。」

言う小平塚先生の目がスツと細くなる。

「というか、妹まで使つて俺に連絡とらないでもらえませんか？」

すると、さっきの意味深な表情は消え去り、先生は豪快に笑いだす。

「ははは、すまない。」

ただ、重要な連絡だったのでな。

どうせ君は合宿があるということも知らないのだろうか？」

「合宿？」

初耳だ。

多分メールに書いてあったのだろうが、めんどくさくて全部読まなかったからなあ。

「それって小町もですか？」

言つて小町を指差す。

ちようど彼女は車の後ろのドアから中へ入るところで、やつはろー、とか言っている。

「ああ、彼女も参加したいと言つたのでな。」

何、監督する子供が少し増えようが問題ない。

さあ、君も乗りたまえ。」

小町が行くと言うなら俺もついていかないわけには行かない。

そもそも小町を懐柔された時点でチエックメイトだったのだ。

「ちなみに、どこに行くんですか？」

一応だが聞いてみる。

すると平塚先生はいたずらっぽく笑う。

「秘密、だ。」

「君はこっちだ。話し相手になりたまえ。」

「実は補助席に乗ったら死ぬ病に……。」

「いいから乗れ。」

行き先の知らない車は俺の不安とは裏腹にどんどんと進んで行く。

昼下がりにじゃないけどドナドナでも歌おうかな……。

行き先不明、とは言ったが車は高速道路に乗り、だんだんと山のある方へ向かっている。

……この道筋は覚えてないこともない。

「……千葉村ですか?」

助手席に乗り、後ろの雪ノ下と由比ヶ浜二人に挨拶した後ずっと黙っていたが、なんとなく行き先に予想が立ったので先生に声をかけてみる。

ちなみに、小町と雪ノ下、由比ヶ浜は三人でずっと騒いでいる。

いや、うるさいのは小町と由比ヶ浜だが。

「正解だ。」

よく分かったな、君も林間学校で行ったんだらう?

記憶力がいい。道筋まで覚えているとは。」

感心したような声色で平塚先生が答えた。

「……たまたまですよ。」

嘘だ。

忘れていない、忘れられるはずがない、あの場所を。

すると、先生が少し間を置いた後、真面目な声で話し出す。

「……君の過去に何があったなど尋ねる気はない。」

おっと、もちろん君が話すなら私はいつでも聞かせてもらおうよ。

ただ、君はいつまでも過去の出来事に囚われるべきではない。」

「別に昔のことなんて気にしてませんよ。」

過去は過去、今は今。ちゃんと割り切って生きてますから。」
嘘。

真つ赤な嘘だ。

平塚先生は小さくため息をつく。

「そうか……、それならいいのだが。」

俺はその独り言のような言葉に返答はせず、逃げ出すように窓の外の景色を眺める。
後十分と経たずに千葉村に着くだろう。

先ほどまで燦々と輝いていた太陽はいつの間にか流れてきた雲で遮られていた。

「……そういえば。」

突然、平塚先生が話し出す。

「さっき言ったな、『あんな無駄は二度とする気はない』と。」

「それがどうかしましたか。」

本心ですよ。偽る必要ありませんし。」

事実だ。

多数のデメリットを含んでいる割にメリットが一切ない。

つまり、するだけ無駄な行為ということだ。

「本当にそう思っているんだろうな、君は。」

でもそれは嘘だ。同じ状況に陥れば君は必ず同じ行動をとる。」

けれど先生はきっぱりと断言する。

そんな訳がないだろう。

デメリットしかないどころか、下手すりや学校に戻ったとき居場所がなくなってる、なんてのもありうる。

「何を根拠にそんな突拍子もないことを。」

ジトツと睨みながら俺は彼女に問いかける。

「根拠はあるさ。君はそういう人間だからな。」

けれど、平塚先生は根拠どころか意味の分からない言葉を口にする。

「そんなの理由になってないですよ。」

言つて再び窓の外に目をやる。

ああ、もうすぐ到着だな。

「だから君はそのままではダメなんだよ。」

早くそれを理解するべきだ。」

そして、先生がポツリと漏らしたその一言を俺は聞かないふりをした。

「あ、ハチと結衣じゃん。」

「はろはろ。」

「こんなところで会うなんて奇遇だべ。」

ハチたちもキャンプなん？」

「そうか、先生の言っていたもう一つのグループというのは奉仕部のことだったんだな。」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

俺は平塚先生の車から降りたと思ったら、突然隣に停まった見知らぬ車から葉山たちが降りてきた！

な、何を言ってるのか分からねーと（ry

「え、えーつとどうしてお前らがここに来てんの？」

慌てて『比企谷八幡』を演じ、葉山に問いかける。

しかし、俺の問いに答えのは彼ではなく後ろからスツと現れた平塚先生だった。人手が足らなさそうだったから学校の掲示板で募集をかけたのだよ。

まさか彼らが応募してくるとは思わなかったが……。」

「人手？俺まだ何するか聞いてないんすけど。」

「ああ、そういえばそうだったな。雪ノ下たちには既に説明しているんだがな。」

君たちには小学生の林間学校サポートスタッフとして働いてもらう。

簡単に言うとか雑用だな。もっと端的に言うなら奴隷だ。」

最後の一言は必要なかっただろ。

平塚先生の言葉を聞きつつ俺は葉山に近寄り話しかける。

「どうしてこんな活動に参加したんだ？」

すると葉山は苦笑交じりの笑顔で答える。

「奉仕活動で内申加点してもらってるって俺は聞いてたからな……。」

もちろん結衣と比企谷も誘おうと思っただが、結衣は用事があるって断られてお前は連絡がつかなかったんだ。

比企谷は忙しいって聞いていたが、なるほど、奉仕部の合宿だったんだな。」

納得した、という風に葉山は頷く。

納得してくれたのは嬉しいんだが俺もそれを聞いたのは初めてなんだよ……。」

もちろん着信拒否にしてたなんてことは口にしない。

葉山と俺が話していると他の三人も会話に参加してくる。

「あーしはなんかただでキャンプできるっつーから来たんですけど？」

「だべ？ いやーただとかやばいっしょー。」

まあお前ならそんな考えで来たんだろうな……。」

「わたしは葉山君と戸部君がキャンブすると聞いてhshs。」

ま、まあ海老名ならず、そんな理由で来たんだらうな……。

俺が苦笑いしていると彼女がずいっと目の前ににじり寄ってくる。

「で、でも！もちろん比企谷君もいるなら三人で!!」

「え、いやーそういうのは……。」

どうどうと両手で彼女の興奮を抑え込もうとする。

当然、俺一人では彼女を宥めることなどできるわけもなく、隣から三浦が救いの手を差し伸べてくれる。

「はいはい、落ち着きなよ姫菜。」

三浦が海老名の両肩を抑えて彼女を落ち着かせる。

そんな二人を横目に見ながら葉山がパンつと手を叩いて注目を集める。

「それじゃ、そろそろ行こうか。」

平塚先生案内お願いしますね。」

「ああ、着いてきてくれ。」

平塚先生を先頭に俺たちは歩き始める。

「おお小町ちゃん久しぶり〜。」

「戸部さんもいたんですか。」

「いつも兄がお世話になってますー。」

戸部が小町に話しかけている。

「ははは、戸部。それ以上近づいたらお前でも許さんぞ？」

「小町さん、彼らと面識があるのね。」

「いつも間にか隣を歩いていて雪ノ下が尋ねてくる。」

「ああ、以前二、三回あいつらを家に呼んだことがあるからな。」

「あれは大惨事だった……。」

「そもそもプライベートな俺の自宅にアいつら呼んだのが間違いだつたんだ……。」

「あまり良い記憶ではないので思い出さないが。」

「というか、お前はアいつらが来ることを知ってたのか？」

「聞くと雪ノ下は頭でも痛いのかこめかみを押さえて答える。」

「他にも呼んであるとは聞いていたのだけれど、まさか葉山君だとはね……。」

「平塚先生、そういうことは話してくれないから。」

「まだマシなほうだよ、お前は。」

「俺なんか合宿のことすら今さっき聞いたところなんだから。」

「あら、それはあなたの責任でしよう？」

「そう言つて雪ノ下はちよこんと首を傾げる。」

「確かに、先生のメール最後まで読まなかったのは俺の責任だ。」

最後までちゃんと読んでればきつとあの長文のどこかに合宿のことが書かれていたのだろう。

そう思った発言だったのだが、雪ノ下は首を振っている。

「いえ、そうではなくて。」

一応連絡網という形で私が由比ヶ浜さんに、彼女があなたのところに連絡を回しているはずなのだけれど。」

連絡網なんてあったのか。

というか、俺が一番下なんだな。入部の順番からして由比ヶ浜と俺逆じゃねえか、普通。

別にいいんだけどさ。

「そんなのあったのか。」

ちよつと携帯見てみる。」

言つてポケットからスマホを取り出しメール受信ボックスを開く。

平塚静

平塚静

平塚静

平塚静

平塚静

平塚静

平塚静

平塚静

平塚静

由比ヶ浜結衣

葉山隼人

. . .

あつた。

まめにメールを見てたわけじゃないから気づかなかつた……。

というか、平塚先生メール送りすぎだろ。

後、葉山は忙しいって分かってて電話だけじゃなくメールまで送っててくれたんだな、律儀なやつだ。

「悪い、気づいてなかった。」

雪ノ下に画面を見せる。

すると彼女はふうとため息をつく。

「そんなことだろうと思っていたわ。」

まあ、結局あなたがこうしてここにいるから問題ないのだけれど。」

「悪かったな、わざわざ家まで来てもらって。」

「いいえ、あそこまで行くとは決めたのは平塚先生よ。」

ちなみに私は置いていこうと言ったわ。」

涼しげな顔で雪ノ下が言う。

悪かったな、着いてきてしまつて。

俺も家で夏休みを満喫する気満々だったんだよ。

「いら。そこ、いつまで喋つてるんだ。」

もう着いたぞ。」

先生に言われて改めて前を向くと広場に到着していた。

確か、この周辺に小学生が止まる建物があつたはずだ。

見るとその広場に林間学校に参加する小学生達が既に集まっていた。

その後、俺は入所式で高校生代表として小学生の前で挨拶する役を葉山から押し付け

られたりもしたが、滞りなく事は進み、林間学校最初の予定、オリエンテーションが始まった。

オリエンテーションと言つても、チェックポイントを周りゴール目指すだけの簡単なものだ。

そこでの俺たちの仕事は彼らより先に目標地点に到着し昼食の準備をすることなのだ、当然俺たち全員を乗せられる車などあるわけもなく、現在、その目標地点まで歩いている。

別に歩くことに異存はない、歩くことに関しては。

「お兄さんー！一緒に探そー！」

ただ、小学生達が纏わり付いてくるのだけはどうかならないだろうか。

もちろん俺たちの通る道は小学生も通るわけで、先ほど前で挨拶した俺やイケメンオーラを醸し出す葉山は彼らに大人気で男女問わず『優しい』お兄さん達に話しかけてくるのだ。

ちなみに由比ヶ浜や戸部達も小学生に積極的に話しかけたりしており、雪ノ下と小町だけが二人で後ろから付いてきている状況だ。

そして現在、女の子達だけで構成されたグループと鉢合わせしているのだが。

「よし、じゃあここだけ手伝うよ。」

ただし、他のみんなには秘密だぞ？」

膝を折り、彼女らと同じ目線になる。そして人差し指を口元に当てて笑いかける。

ああ、さつきから何回この動作してるんだろう……。

「あっちの方とかなりそうじゃないか？」

俺の言葉を聞いた葉山が適当な場所を指差して彼女達を先導する。

小学生達もほとんどだー、なんていいながらその方向へ向かっていく。

俺はその集団の少し後ろから追いかける……が、集団から離れたところに女の子が一人。

不意にその子が振り返り俺と目があう。

その目はなんとというかお世辞にも小学生らしい純真で綺麗な目とは言えず、端的に表現するなら――

『腐っていた』。

e p. 16 やはり雪ノ下雪乃はそう宣言する

「おつかれさん。

お前の体力じゃ結構きつかっただろ。」

言つて木陰で休んでいた雪ノ下にペットボトルの水を差し出す。

珍しく嫌味ひとつ言わずに受け取るところを見ると本当に疲れているのだろう。

かく言う自分も疲れていないわけではないので、そのまま木に寄りかかる。

「あなたは参加しなくていいの?」

ペットボトルの蓋を閉めながら雪ノ下が問うてくる。

「葉山に押し付けてきた。」

俺も小学生のハイテンションについていくのは疲れた。」

言いながら、少し先にある野外キッチンで騒いでいる小学生達を眺める。

「その点、あいつは本当に楽しんで接してるからな。」

葉山が小学生に向けている笑顔はどこかの誰かとは違い本心からの笑顔だ。

「そうね。」

返事を期待したわけでもないぼやきに近い俺の言葉に雪ノ下が短く答える。

「ずっと——戸塚の一件の時から気になっていたんだが、お前つて葉山と面識あるのか？」

葉山を見るときの雪ノ下の表情や仕草にずっと違和感を覚えていた俺はついそんな質問をしてしまう。

先ほどの俺のつぶやきに反応したということだけで答えは分かり切っていたのに。

「ええ、同じ学校だもの。」

簡素な答えではあったが、そこには強い拒絶の色があった。

これ以上は踏み込まないで欲しい、聞かないで欲しいという感情が。

「そうか、そりやそうだよな。」

彼女に合わせて俺もその話題を打ち切る。

「ねえ、私も一つ聞いてもいいかしら。」

不意に彼女が話しかけてくる。

「なんだ？」

「あなた、ここに来たことがあるの？」

オリエンテーションの時、随分淀みなく歩いてきたように思えたけれど。」

俺はその質問に声を詰まらせる。

普段ならはぐらかしていたであろう質問だが、先ほどの俺の不躰な問いで彼女の地雷を踏み抜いてしまった償いと思い、正直に答える。

「まあな。

もちろん小町も同じ学校だったからここに来たことあるぞ。」

俺の返答に彼女は小さく頷いただけで、それ以上会話は続かない。

そして、聞こえてくるのは遠くで子供達が騒いでいる音と時折木々の間を吹き抜ける風の音だけになった。

——もつと視線は低かった。

その分視界も狭くて何も見えていなかった。

目を閉じ、再び開くと視界は淡いセピア色に染まり、自分の視線が低くなっている。思い出すのは、世界の汚濁も理不尽も虚妄も知らなかった懐かしくも愚かしい日々。視界の中には一人の少女と一人の少年。

彼らの周りには誰もおらず、二人だけで楽しそうに笑いあっている。

まるで、二人だけで世界が完結しているかのように。

それが完成された世界かのように。

もつとも、そう思っていたのはあの少年だけだったのかもしれないが——。

「……ツキー？ヒツキー!？」

自分の名を呼ぶ声で我に帰る。

景色は鮮やかに彩られ、目の前にはさつきまでいなかった由比ヶ浜が立っている。

「大丈夫？ポーツとしてみたいだけど。」

「放っておきなさい、由比ヶ浜さん。」

彼は自分の人生の無意味さを嘆いていたのよ。」

由比ヶ浜の心配そうな質問になぜか雪ノ下が辛辣な言葉で返している。主に俺を罵倒するために。

「……なんでこの状況でそんな深刻なことを悩まなくちゃならねえんだよ。」

で、どした？」

ため息まじりに雪ノ下の暴言を流し、由比ヶ浜がわざわざこつちまで来た理由を尋ねる。

確か、さつきまでは小学生たちと一緒にカレー作ってたはずだが。

「ううん、ただちよつとヒツキーたちが見えたから来たの。」

なんの話してたの？」

「別になんでもねえよ。」

そもそも会話すら起こらなかったままである。」

「そうね。」

この男と会話するエネルギーが勿体無いわ。」

それは悪かったですね、雪ノ下さん。

非難がましい目を彼女に向ける。

もつとも、それに気づいた彼女は涼やかな顔で受け流すのだが。

「あはは、相変わらず仲良いね。二人とも。」

そんな俺たちを見て何を思ったか、由比ヶ浜が慈しむような笑みを浮かべて言う。

「ど」がだよ。」

「冗談でもやめてちょうだい、由比ヶ浜さん。」

もちろん、雪ノ下も俺もそれを真つ向から否定する。

ーなんかいつものパターンになつてる気がする……。

「で、そつちはどうだ？」

葉山に任せきりになつてるが、何か問題があれば行くぞ。」

こんなとりとめのない会話をしていても無意味だと思い、由比ヶ浜の背後の野外キツ

チンを眺めながら話題を変える。

「うーん、多分大丈夫だと思うよ。」

でも、あたしも一緒に作ろうとしたらなぜか止められちゃった。」
葉山ナイス！

由比ヶ浜に作らせたなら楽しい林間学校が地獄に変貌してしまう。

そう思ったのは俺だけではないようで、雪ノ下もどこかホツとしたような顔をしている。

「何で二人とも嬉しそうなのだ?」

そんな雰囲気を感じて察した由比ヶ浜が腕をブンブン振って非難する。

彼女のこう言ったところを見ると変化を感じざるを得ない。

以前のように周りに同調して自分の意見を言えないような消極的な彼女の態度は十分とは言えないものなりを潜めたと思う。

普段、三浦達と一緒にいる時もそれを感じるし、奉仕部の三人でいる時はもつと顕著に感じられる。

そういう意味では平塚先生が由比ヶ浜を奉仕部に来させたのは正しかったのかもしれない。

無論、俺はそのせいで退部の機を逃したのだが。

「でも、問題——じゃなくて心配なことはあるかも。」

突然、彼女の表情が陰る。

「なんだ？」

「あの子、ヒツキー達も気づいてたよね。」

由比ヶ浜の視線の先、そこには女子児童が一人立っている。

あの子は——

「オリエンテーションの最中、ずっと一人で集団の後を歩いていた子ね。」

俺の記憶を雪ノ下が代弁する。

「うん、あの時もそうだし、今もずっとそんな感じでさ。」

さつき隼人君が声かけたんだけどさらに悪化しちゃった感じで。」

あのバカ、何やってんだ。

ぼっちに声をかける時はあくまで秘密裏に、密やかにやるべきだ。

晒しものにならないように、最大限の配慮をする必要がある。

彼女が高校生、中でもかなり目立つ部類の葉山に話しかけられることで、より彼女が

ひとりぼっちという特性がさらに引き立ってしまう。

どうせあいつは善意で動いたつもりだろうが、悪手であることは明白だ。

「で、どうするんだ？部長さん。」

雪ノ下に問いかける。

「そうね、明らかに私たちの活動の範囲外なのだけれど……。」

当然だろう。

林間学校のサポート役に過ぎない俺たちが小学生のコミュニティに介入するのは確実に出過ぎた真似だ。

けれど、雪ノ下は語尾を濁してちらりと側に立つ由比ヶ浜を見る。

「なんとかしてあげようよ！」

あのままじゃあの子が可哀想だよ！」

「……とりあえず様子を見ましよう。」

むやみやたらに動くのは得策じゃないわ。」

由比ヶ浜の説得に折れたのか、彼女は少し考えてから判断下す。

それでいいのか……と思ったが、きつと雪ノ下も心のどこかで由比ヶ浜と同じ思いを抱いているのだろう。

「ん、了解。」

短く返事をして、俺は歩き出す。

「ヒッキーどこ行くの？」

「仕事だ、仕事。」

由比ヶ浜の問いかけに俺は振り返らずに適当に手を振って答える。

忙しい方が何も考えずに済むぶん楽かもしれない。

林間学校。

ひとりぼっちの少女。

思い出したくないことを思い出してしまふ。

子どもたちに目を向け、そして少女に焦点を合わせる。

——何も変わっていない。今も昔も。

多少の年月が流れたところで人の——人々の在り方は変わらない。

そんなことは分かりきっていたはずなのに。

ため息をつきながら俺は『比企谷八幡』を作った。

「少し気になることがあったんだ。皆、聞いてくれるか?」

小学生たちの調理が終わり、高校生も野外キッチンの側にあるテーブルで夕食、これまたカレーを食べている最中にそう切り出したは葉山だった。

食卓は比較的和やかな雰囲気だったため、真剣な表情をした彼に注目が集まる。

「ふむ。話してみたまえ。」

「はい。林間学校の活動の中で、孤立してる女の子がいたのは皆気づいているよな?」

俺の隣座る平塚先生に促されて葉山が話し出す。

「その子、鶴見留美ちゃんっていうんだけど、一度皆の輪の中に入れてあげただけど、どうも上手く馴染めないみたいなんだ。」

それは火に油を注いだの間違いじゃないのか？

「火に油を注ぐの言い間違いではないかしら？」

言っちゃうんだね、雪ノ下さん。

彼女の遠慮のない、というか葉山を責めるような言い方に三浦は露骨に機嫌を悪くし、本人は苦々しい笑顔を浮かべる。

「と、とにかく、あの子をどうにかしてあげたいんだ。」

協力してくれないか？」

熱弁する彼を三浦や戸部は尊敬の眼差しで、一方雪ノ下は冷ややかな目で見つめていく。

「ああ、その話は奉仕部の中でもあったんだ。なあ？由比ヶ浜。」

「ここで俺が口を挟む。」

このままでは雪ノ下が暴走して俺たちの集団自体が対立しかねない。

「その時はどういう結論に至ったんだ？」

そして、俺の言葉にうんうんと頷く由比ヶ浜を見た葉山が聞いてくる。

「現状では彼女の周りの環境も彼女自身の思いも不明よ。」

今は無理に動くべき時ではないわ。」

雪ノ下が木陰で話した時と同じ言葉を口にする。

「でもさー、待ってばっかりじゃ間に合わないんじゃないやね？」

俺ら明後日には帰るっしょ？」

珍しく戸部がまともなことを言う。

時間がないのは明白だ。まあ、そんな短い時間で何か行動を起こそうとするのも間違っているような気がしないでもないが。

「確かにー」「確かにそうね。」

一旦議論を落ち着かせようとした俺の言葉を雪ノ下が遮る。

「だから、私たちがから打って出るつもりよ。」

「それはこつちから留美ちゃんに接触する、ということかい？」

雪ノ下の意外な発言に葉山が思わず聞き返す。

その声にはどことなく抵抗感を感じさせる。あいつはあいつなりで一度失敗していることに責任感を感じているんだろう。

「ええ。けれど、大人数で向かうのはまずいわ。」

「だからー」

そう言つて雪ノ下が見る。

——嫌な予感がする。

「比企谷くんにその役目を任せるわ。」

だ、だよなあ……。

雪ノ下に話術を求めるのは間違っているし、由比ヶ浜にこの役は少し重いだろう。

小町はそもそも部外者でこの一件に関わらせるつもりはない。

葉山はすでに一度失敗しているし、三浦と戸部は論外だ。

海老名は頼めばやってくれるだろうが、小学生からの人気は俺の方が圧倒的に高い。

消去法で俺しかいない、か。

「いいんじゃない？ハチなら上手くやってくれるっしょ。」

三浦が同意して、

「すまない、比企谷。頼めるか？」

葉山が頭を下げる。

だったら、『比企谷八幡』の答えは決まっている。

「おう、任せてくれ！」

できる限りのことはやってみる。」

夕食兼会議が終わり、俺たちは食器を野外キッチンに運んでいる。

ちなみに俺は平塚先生のも待たされている。

先生は先ほどの話に関しては「好きにやってみたまえ」とだけ言つて、一人何処かに消えてしまった。

せめて片付けくらいはやってくれませんかね……。

歩きながら、まじでハチは頼りになるわー、とかいう雑音が聞こえたような気もするが、俺は一人歩くペースを落とし雪ノ下と二人になる。

「正直、意外だったぞ。」

彼女と目を合わせずに言う。

「何のこと？」

「お前が誰かに任せる、つて言つたことだ。」

率直な感想を彼女に伝える。

「この件に関してはあなたが適任だっただけよ。」

あなたは内面は問題しかないけれど、外面だけは優秀なもの。

けれど、無理にやらせるようになったことは謝るわ。」

いつも通りの彼女の言い回しになぜか安心感を覚える。

「だけ、は余計だ。」

まあ気にすんな。誰かがやるべきだったんだ。

それで、俺は鶴見留美の周辺を探ればいいのか？」

「それも大事だけれど一番聞いてきてほしいことは本人が救いを求める意思があるかどうかよ。」

救いを求める意思。

なるほど、雪ノ下はあくまでも奉仕部として依頼を受けるといふスタンスを崩す気はないようだ。

「救いを求める意思……ねえ。」

なあ、もしもあの子が助けてほしいって言ってきたらどうするつもりなんだ？」

ついそんな疑問が溢れる。

それはすぐに聞かない方がよかった質問だと気づく。

しまった、と後悔した頃にはもう遅く、彼女は凜とした声音で宣言する。

「彼女が助けを求めるなら、あらゆる手段を持って解決に努めるわ。」

やはり、それはまるで――。

「……そうか。」

素っ気なく答えると、ちょうどタイミング良く戸部が声をかけてくる。

そして俺はその場から逃げ去るように歩みを早めて『比企谷八幡』の仮面を被った。

e p. 17 彼と彼女らは夜空の下に語り合う

ふと彼の言葉を思い出す。

『正直、意外だったぞ。』

『お前が誰かに任せるって言ったことだ。』

確かにそう思うのも無理はないかもしれない。

きっと彼は誰よりも上手く鶴見留美と接触し、扱えるだろう。

彼の人の考えを、気持ちいを、嘘を捉える能力は間違いない私より上だ。

ともすれば、それは姉さんにすら並ぶかもしれない。

——けれど、私でもやろうと思えば可能だった。

彼に頼むまでもなく自分で動けば必要に足る情報は得られたはずだ。

それにより、どうして私は彼を——

「あーいたー！」

突然、背後から声がした。

この声は……

「小町さん？」

「はい。探しましたよー、雪乃さん。」

コテージに居づらいのは分かりますけど、こんな暗い中女の子一人だけで出歩くのは危ないですよ！」

周囲に明かりはなく、光源は淡い月の光だけだが、頬を膨らまして怒りを表現する小町さんの顔はよく見える。

あの兄とは違つて表情が豊かだ。

いや、私の知らないところでの彼はもつと笑つたり怒つたりしたふりをしているのかもしれないが。

「ごめんなさい。ところで、あつちはどうなっているの？」

「今、結衣さん達が慰めてますよ。」

まだもうちよつとかかりそうですけど。」

夕食の後、就寝用のコテージに戻ったところ、私の葉山くんへの発言が三浦さんには気に入らなかつたのか、堰を切つたように食つてかかつてきたのだ。

私はそれを全て正論で論破したのだが……

「少しやり過ぎてしまったかしら。」

その結果、彼女は泣き出してしまったのだ。

眩くように漏らした私の言葉に小町さんは困つたように笑う。

「あはは、ちょっとやり過ぎたかもですね。

……ねえ、雪乃さん。少しお話ししませんか？」

「ええ、もちろん構わないわ。」

断る理由はない。

小町さんは私の隣に立ち、おもむろに空を見上げた。

私もそれに呼応するように夜空に目を向ける。

そこには無数の星々が瞬いていた。

都会の人工灯によって塗りつぶされてしまうような淡い光を放つ星々もここでははつきりと見える。

そして、最後の仕上げを忘れたかのようにほんの一部分のみが欠けた月も、街中で見るより幾分か大きく感じる。

明日はきっと美しい満月が見られるだろう。

「正直、意外でした。」

突然のその言葉にはっと息を呑む。

その台詞は夕刻に比企谷くんが口にしたのと全く同じだ。

「その言葉、比企谷くんにも言われたわ。」

「あ、ホントですか？」

「ごめんなさい、少し気になったただけなんです。」
彼女は照れたように笑みを浮かべる。

「気になった、とは何のことかしら？」

比企谷くんと同じ言葉を使った彼女の考えを知りたいという好奇心が湧く。

「いやー、本当に些細なことなんですけど。」

小町の勝手なイメージで、雪乃さんなら一人で全部できるだろうし、やつちやうのか
なーって。

だから、お兄ちゃんに任せるって言った時びっくりしたんです。」

小町さんは私が彼女と会う前に考えていたことをズバズバと当てていく。

それを知ってか知らずか彼女は続けて言う。

「確かに兄が一番上手くやれそうですよ、ああいうのは。」

でも、なんていうのかなー」

そこで彼女は一旦言葉を区切る。

「雪乃さんは雪乃さんなんだなって安心、しました。」

そして、心底そう思っているような感情のこもった言葉を吐き出した。

話は筋立っておらず、その意味も分からない。

けれど、その時の小町さんはとても穏やかな表情で、私はその真意を問いただすこと

ができなかった。

——雪ノ下雪乃と比企谷小町が会おう少し前

修学旅行の夜かよ……、などと考えながら一番はしやぎ、一番早くに寝た戸部のいびきを聞く。

なんだよ、好きな人の話って。お前が海老名のこと好きなんてとつくの昔に分かつてたわ。

馬鹿馬鹿しい……。

だが、以前までの俺ならきつとこの手の話題をさも楽しんでいるかのように振る舞っただろう。

それを馬鹿らしく感じてしまうのは、きつと俺が奉仕部と、雪ノ下雪乃と出会ってしまっただからだ。

いつの間にか俺は仮面を被らなくていい空間に慣れてしまったようだ。

『彼女が助けを求めるなら、あらゆる手段を持って解決に努めるわ。』

だが——

「眠れないのか？」

唐突に葉山が話し出す。

「うっせ、戸部が起きたらどうすんだ。」

まあ、眠れないのは事実だが。」

ぶつきらばうに答えて、あいつから遠ざかるように寝返りをうつ。

「なら、夜風にでも当たってきたらどうだ？」

「お前も一緒に行くとか言い出しそうだから却下だ。」

こいつと二人きりとか想像しただけで虫唾が走る。

「そんなこと言うわけないだろ？」

二人きりが嫌なのはお互い様だ。」

葉山は俺の辛辣な返しにも慣れた様子で軽く受け流す。

……確かにここでじっとしているよりかは少し新鮮な空気でも吸ってきた方がいいか。

「行ってくる。」

言って、立ち上がって扉へ向かう。

「ああ、行つてらっしゃい。」

その言葉を背中受ながらコテージから出る。

夏とは言えど、都会と違って熱がこもりにくいこの辺りでは爽やかな風が吹き、中々に心地いい。

ふと、夜空を見上げると大きな美しい月が目に入る。

頭の中で暦を数え、明日が満月であることを思い出す。

「……全く、俺はいつまで昔のことを思い出せば気が済むんだ？」

「少し歩くか。」

そう呟き、歩みを進める。

道に沿って歩くとまずは右手に女子達の泊まるコテージが見え、その後、木々に囲まれた小道を抜けるとひらけた場所に出る。

そこには一つ大きな寄宿舎があり、あそこに小学生達が寝ているはずだ。

ふらりと視線を動かし、木々の間をざっと見渡す。

さすがに森の奥までは見通せないが、今いる広場は淡い月明かりで照らされている。

そして、そこにひっそりと紡がれた獣道を見つける。

「別に先生達に告げ口したりしないから出てこないか？」

そこで思考を停止させ、背後の寄宿舎の裏あたりからこちらに視線を向けていた何者かに声をかける。

まあ、大方夜更かしした小学生なんだろうが。

俺が視線の方向に身体を向けると、建物の角から一人の少女がこちらに歩いてきた。

「……ふむ、これは予想外だ。」

「こんばんわ。」

渦中の少女、鶴見留美は抑揚のない声でそう言った。

彼女はなぜ自分に気づいたのかと問いかけるように訝しげな表情を俺に向ける。

「別に後ろに目が付いているわけじゃないよ。たまたまだ。」

凶星だったように鶴見留美は目を見開く。

「君も眠れないみたいだね。」

ならせつかくだし、少し話さないか？」

言って、彼女に歩み寄る。

当然ながら周りに人はいない。

彼女の境遇を気にかけることなく話せる千載一遇の好機だ。

これを逃すわけにはいかない。

「あなたは……。」

「比企谷八幡だ。よろしくな、鶴見留美ちゃん。」

身をかがめて彼女と同じ目線になり、につこりと笑顔を作る。

「……それ、楽しい、ですか？」

しかし、数多の人々を騙し続けた俺の『笑顔』の裏を彼女は易々と看破した。

——まあ、想定内だが。

「やっぱりバレてたか。」

なら、むしろ都合がいい。腹を割って話せるな。」

これまで自力で俺の仮面に気づいた者は少ない。

今の学校では平塚先生に葉山、おそらく海老名くらいだろう。

そのことごとくが同じ反応を見せた。

驚くか憐れむかどちらか一方、もしくは両方。

まあ、中には見抜いた上で試してくるなんて奴もいたが。

その反応の中で、鶴見留美は前者だった。

たぶん彼女が違和感を感じたであろう瞬間はオリエンテーションだ。

そのままカレー作りの作業を通して確信したのだろう。

あの人は偽物だろう、と。

高校生の間で話題になっている少女のその感情の機微に気づかないほど俺は鈍感ではない。

「取り繕ったり、しないんですね。」

むしろたちが悪いと言わんばかりに彼女は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「舞台裏まで演技する必要はないだろう？」

そう言って笑う俺に彼女はため息をつく。

「はあ……。それで何の用ですか？」

「最初に言っただろ？」

眠れないもの同士、おしゃべりでもしないか、つて。」

これは割と本心に近い言葉だったのだが、鶴見は胡散臭そうな視線を俺にぶつける。「別に私は眠れないわけではないですよ。」

彼女はめんどくさそうにそう言うと、くるりと身を翻して建物に戻ろうとする。

眠れないわけではないが、教師に見つかる危険性もあるこんな時間に出歩いている。

そして、この建物の側から離れていなかったことを吟味すると――

「自分のベットが占領、あるいは荷物置き場にでもなってるのか？」

ぴたりと鶴見が足を止める。

「凶星みたいだな。」

だから他の奴らが確実に眠るまで待ってから部屋に戻って床につく、その間の時間つぶしをここでしてたってわけか。」

「参りました。」

そう言つて鶴見は両手をあげる。

そして、そのまま宿舍の前に設置してあるベンチへ向かい、そこにすくと座つた。

「別に戦つたつもりはないけどな。」

俺もそれに続いて彼女の隣に腰を下ろす。

「……何の用ですか？」

彼女が同じ質問を繰り返す。

そんなに俺って信用できないか……？

うん、できないな。

「そうだな……、例えばばー」

そこからはとりとめのない話をした。

冗談めいた話、くだらない話、どこか不思議な話。

なんてことはない、俺が普段仮面を被って人気者を演じている時に話しているような

ことだ。

『比企谷八幡』になるために随分と鍛えたトーク力は問題なく鶴見留美に響いた様子で、

最初は警戒心を剥き出しにしていた彼女も話が進むにつれて笑うようにすらなつた。

「そろそろ時間だな。」

腕時計を見ると、短い針はつぺんをとうの昔に過ぎている。

この時間なら鶴見と同じ部屋のクラスメイトも寝ていることだろう。

「う、うん。」

どこかぎこちない敬語を使わなくなつた彼女は名残惜しそうに返事をする。

「先生に見つからないようにしろよ？」

見つかったら俺まで怒られる。」

「大丈夫だよ。」

きつと先生達ももう寝てると思うし。」

俺の冗談に彼女は笑顔で答える。

それは年相応のあどけない笑顔だ。

俺に背を向けて宿舎に戻ろうとする彼女に声をかける。

「なあ、一人は楽しいか？」

数刻前と同じように鶴見はぴたりと足を止める。

「大勢でいるよりかはずつとマシ。」

声のトーンは下がり、語尾は震えている。

まるで自分の配役を思い出したかのような取り繕った台詞だ。

「そうか。」

俺は楽しくないぞ。」

「何の事？」

俺の唐突な発言に彼女が聞き返す。

「お前とここにであった時に最初に聞かれた事だ。」

簡潔に答える。

嘘をつき、愛想を振りまいて、好かれたくもないような人々に好かれる自分を演じる
ことが楽しい？

馬鹿言うな。それを楽しいと感じるような奴は狂人だ。

自分のことをまともだと思ったことはないが、狂った覚えもない。

「……なら、どうして？」

鶴見は震えた声で問うてくる。

こちらに振り向かないままなので、その表情は窺い知れない。

「さあな。」

「……………」

鶴見はそれ以上何も言わずに宿舎の中に入っていく。

俺はその背中が見えなくなるまでずっと立っていた。

「舞台裏まで演技する必要はない、か。」

少し前の自分の言葉を繰り返す。

俺が葉山達と一緒にいる時を俺にとつての舞台だとするなら、きつと一人でいる時が

鶴見にとつての舞台なのだろう。

さも自分が孤独を楽しんでいるかのように振る舞い、演じる。

それが彼女の役だ。

——では、なぜ。

なぜ彼女はそのキャラクターを演じるのか。

答えは簡単。楽だからだ。

自分が辛い環境、立場にいた時、あえて自分がその立ち位置に甘んじ、受け入れるふりをすれば精神的に楽になる。

自分の意思でこう在るのだ、と自分に暗示をかけるのだ。

と言っても、彼女のそれはまだ完成しきっていない。

その観察眼には目を見張るものがあるが、俺と少し会話しただけでも、舞台裏の素顔を見せた。

それは彼女が心のどこかで現状の打破を、救いを求めているからなのだろう。

しかし、だからと言って俺にできることはほとんどない。

自分の舞台をやりくりするだけで精一杯なのに、他人のものまで構ってられない。

そもそも、自分の舞台の幕のおろし方すら分からないのに鶴見を救う、と言うのもおかしい話だ。

——夜空を見上げ、あの夜を思い出す。

何度忘れたいと願ったか分からないあの時を。

追憶の彼方に封じ込めた彼女の背中を思い起こし、ひとりでに眩きが漏れる。

「……俺にできることなんて、その舞台裏にそっと忍び込む程度だ。」

確か明日の晩は肝試しが行われるはずだ。

e p. 18 どうしても比企谷八幡は

夜風が木々の間を吹き抜けた。

虫や鳥の鳴き声、何か木を踏むパキツという音……、森には様々なことがひしめき合っている。

その中の一つ、異質な音——いや、声が聞こえる。

年端のいかぬ少女達の話し声だ。

大丈夫、バレていない。

背にした樹木を確かめるように触れる。

その間にも声の主達は刻一刻とこちらに近づいてきている。

ギリギリまで我慢し、最高のタイミングで——、今だ！

強張った筋肉を動かし、木の陰から飛び出て、俺は小学生のグループの前に立ち塞がった。

「「「キヤアアア——!! ゾンビー!!」」」

けたたましい叫び声と共に、彼女らは一様に回れ右をして走り去った。

ただ、一人を除いて。

「何してるの?」

一人残った少女、鶴見留美は冷ややかな瞳を俺に向けながら言う。

「肝試しのお化け役。」

「……ゾンビ?」

「ノーメイクだ。」

——数時間前

「比企谷君、結果を報告してくれるかしら。」

雪ノ下が言う。

明確な目的語が欠けた文だが、それが鶴見留美と接触した結果であることは明白だ。

「ヒッキー今日ずっとあたし達と一緒にいたけど、大丈夫?」

おい、やめろ由比ヶ浜。その服装で前かがみになるな。

何故かは言わないが非常に心臓に悪い。

心配そうに声をかけてくる由比ヶ浜に声を出さずにつっこむ。

というのも、今はちようど林間学校の目玉でもある肝試しのお化け役を任された俺たちの衣装変え中なのだ。

由比ヶ浜は化け猫変装のつもりなのか、黒を基調とした猫耳付きの衣装だ。

それはいいんだが、妙に露出が多い気がするの俺の気のせいだろうか……。

加えて、そのせいで安っぽいコスプレにしか見えない。

一方雪ノ下は真っ白の着物を着ている。

白の布地に彼女の黒髪が映え、むしろそれがデフォルト衣装じゃないのか、とまで思わせる。

その立ち姿は雪女を彷彿とさせる。

……ちなみに性格も加味したりしている。

「ああ、あの子とは話した。」

余計な思考を打ち切り、雪ノ下に伝える。

「えっ？いつ？」

俺の言葉に由比ヶ浜が驚くのも無理はないだろう。

さつき彼女が言った通り、今日一日俺は鶴見に接触していない。

「まあちよつとな。」

ただ、昨夜のことを説明するのも億劫なので、適当にはぐらかす。

「そこで、一つ提案がある。」

提案、と言うよりは頼みに近い気もするが、あの会合から俺が考えていたことを口に

する。

「この件、俺一人に任せてくれないか？」

「え？」

「……………」

俺の発言に由比ヶ浜は間拔けな声をあげ、雪ノ下は無言でじつと俺を見る。

「なんで？皆んなで協力してやればいいじゃん！」

由比ヶ浜が反論する。

それは正論だ。

元々俺たちで対処しようと言い出したことを特定の一人に一任するのは間違っている。

「……………ああ、確かにそうなんだが。」

それは重々承知しているが、俺の提案を後押しする意見は見つからない。

だからこそ、提案ではなく頼みなのだ。

そして、俺の歯切れの悪い返事を最後に議論は膠着状態に陥った。

由比ヶ浜はいたたまれないようにしきりに雪ノ下と俺を交互に見る。

……………やっぱり、こんな突拍子もない発言じゃ無理か。

分かりきっていたことだが、これに納得してもらえないなら俺に打つ手はもうない。

昨夜のことを雪ノ下に事細かに話して任せるしかないだろう。

「比企谷君。私はまだあなたの報告を聞いてないわ。」

それとも、昨日頼んだ内容すら忘れてしまったのかしら？」

そう思った矢先、これまで一度も口を開かなかった雪ノ下が話し出す。

「は？」

思わず聞き返した俺に、彼女は呆れたと言わんばかりにため息をつく。

「はあ……、まさか本当に忘れているわけではないでしょう？」

昨日あなたに聞き出してくるように指示したことよ。」

そこまで言われてやっとなり理解する。

雪ノ下が先ほどまで頑なに口を開かなかったのは、注意深く由比ヶ浜と俺の会話に耳を傾けていたわけでも、はたまた上の空だったわけでもない。

ただ、待っていたのだ。

最初に言っていたじゃないか、結果を報告しろ、と。

なら、それは——

「彼女は、鶴見留美さんは救いを必要としているの？」

「ああ。」

その問いに俺は頷いた。

少なくとも昨晚の俺の質問に対する彼女の一人がいい、という返事は嘘だった。

なら、俺のすることがお節介でも、彼女が救いを望んでいなくても、その嘘をひっぺがす必要はある。

「……俺が言うのもなんだが、自分に嘘をつき続けるのは、ひどく寂しいことだから。……そう。ならあなたの言う通りにしましょう。」

すると、雪ノ下は俺の頼みに首を縦に振った。

「ちよつと、ゆきのん!？」

由比ヶ浜が抗議の声を上げる。

「確かに由比ヶ浜さんの言い分も正しいわ。

けれど、この中で唯一鶴見留美さんに直接対したのは彼だけよ。

その彼が一人で十分と言っているのだから、私たちはそれに従うべきではないかしら。」

穏やかな声色で雪ノ下が由比ヶ浜をなだめる。

「それに、一から百まであなた一人で片付けるわけではないでしょう?」

未だ不服そうな由比ヶ浜に優しく微笑むと、彼女は俺に向き直る。

「もちろん協力してほしいことはある。」

その問いに頷く。

「頼めるか？」

「ええ。」

「うん！」

雪ノ下はいつも通りの冷静な表情で、由比ヶ浜は頼りにされたのが嬉しかったのか、明るい声で答えた。

「どこに行くの？」

人が通るために舗装された道ではなく、獣たちが通るような道ならぬ道をかき分けながら進む俺に、鶴見留美が背後から不安そうな声を出す。

「見てわからないか？森の中だ。」

答えながら、目の前の邪魔な木の枝を奥へ押しやる。

「いや、そうじゃなくて……。」

「教師たちなら大丈夫だ。」

葉山たちがなんとかしてくれてる。」

「だ、だから……」「怖いのか？」

そう聞くと彼女は黙って俯いてしまう。

ま、無理もないか。

夜に灯りも持たずに知り合ったばかりの年上の男に目的地も伝えられず、森の奥に進んでいるのだから。

あれ？

これって改めて考えると完全にアウトな行為じゃね？

「あー、なんだ。別に危ないことをするわけじゃないから安心しろ。」

「……信じられると思ってるの？」

で、ですよね。

彼女はバカじゃないの、とでも言いたげな視線を俺にぶつける……が

「はあ、どうせ戻ってもすることなんてないし、ついていけばいいんですよ。」

諦めたようなため息をついて、渋々了承してくれる。

俺が鶴見を連れ出してから十分ほどが過ぎた。

他の小学生たちはキャンプファイアーを始めたところだろうか。

俺たちももう着いてもおかしくない頃合いなんだが……。

そう思っつて木の枝を払いのけると

「着いたぞ。」

何かを建てるつもりだったのか、真ん中に丸太が数本捨てられた広場に出た。

「いっは？」

「さあな。」

俺がお前と同じくらいの時に来たことある場所だ。」

彼女の質問に答えつつ、広場の中心にある丸太の状態を確かめる。

ほとんど腐り、苔むしている。

さすがにもう座れないか……。

「ここに連れて来て何するの？」

疑わしげにそう言う彼女にこれは黙って上を指差した。

「だから、何を——」

言葉は続かない。

彼女が息を呑む。

見上げればそこには星空。

昨晚、半端にかけていた月は美しい円を作り、その銀色の月光を惜しむことなく放っている。

周りの星々もそれに負けぬように自らの輝きを主張している。

そして、それが集まりまるで光の川のように闇色のキャンパスを彩っていた。

きつと、ここから見えるこの空は俺たちのコテージから見えるそれとさほど変わらな

いだろう。

「……だが、俺には全く違ったものに見える。

他のどこでもなく、この場所から見上げられる空の下なら、俺は嘘をつかずに、全てが真実とは言えないまでも、せめて『正直』に鶴見に接することができるはずだ。

それが、彼女をここまで連れて来た理由。

そんな自分勝手な考えと、自己満足の結論を以て俺は彼女に語る。

「……はな、二人の場所なんだ。」

「二人？」

星空に圧倒されていた彼女が我に帰る。

「ああ。さっき言っただろ。

俺もお前と同じくらいの時にここに来たって。

付け加えると、お前みたいに連れてこられたんだ。」

面白いものが見れるよ、と周りにバレないようにそつと二人で抜け出したあの夜を思い出す。

「……友達なの？」

「大切な友達だった。」

躊躇うようなその質問に即答する。

「だった？」

「今ではどうなのか分からない。」

確かめようと思っても会えるのはまだまだ先になりそうだからな。」

——それが俺の過去。ではここで、仮定の話をしよう。

「もしも、あいつと出会ってなかったら、俺もお前と同じになってたかもな。」

IFの世界。

もしもあの出会いがなければ、孤独を肯定し、受け入れ、友情を否定し、拒絶するよ
うな人間に俺はなっていたかもしれない。

「ただ、結局のところもしもの話だ。」

今の俺はここにいるし、その過去の自分を否定も後悔も反省もしている。」

不満はないけどな、と心の中で付け加える。

「ただ、鶴見。お前はまだ選べる。」

彼女の目を見つめる。

夜の闇のように黒い瞳が不安げに揺れていた。

「……何を……選ぶの？」

注意深く言葉を探すように彼女は問う。

「お前がこれからどうするか、だ。」

言つて、人差し指から薬指までの三本の指を立てる。

「ひとつは、今のまま一人を受け入れる。」

今の彼女が立っている道だ。

「ふたつ目は孤独を受け入れてなお自分を周囲が追いつかないほど高めて、一人で立ち続ける。」

二人の顔が眼に浮かぶ。

「そして最後は、孤立を排斥し、俺のように自分を偽ることだ。」

三つの選択肢。

逃げるか立ち向かうか飲み込まれるか。

それらが、彼女にはあつた。

「わた、私は……。」

鶴見が必死に言葉を紡ぐ。

だが――

「これが今までのお前な。」

しかし、残念なことにその三つの道にはもう進めない。」

「……はあ。」

突然、このシリアスな雰囲気をぶち壊す俺の陽気な口調に彼女は思わず声を上げる。

「さっきのは元々お前が一人だ、つてのが前提だろ？」

それに構わず俺は続ける。

「だが、この場所は俺が昔、友人と来たところだ。

なら、逆説的に考えて、今二人でここにいるお前は俺の友達つてわけだ。」

証明終了、と言わんばかりにドヤ顔をしている（であろう）俺を見て、彼女はポカんと口を開けて呆然としていたが、すぐにクスクスと笑いだす。

「ふふ、何それ。」

「つまりお前にはもう友達がいるから、さっきの選択はできないつてことだ。」

「そんな屁理屈を唱えるためにここまで連れて来たの？」

言葉の内容こそ刺々しいが、その口調は柔らかい。

「八幡が私の友達か……。こんな捻くれたことしかできない人だけど、それでも、そう言ってくれるのは嬉しいな。」

けどね、ダメなの、と彼女は続ける。

「これは私のしたことと報いだから。」

そして鶴見は語りだす。

昔は友達がいたこと。

その中で特定の誰かを意味もなく孤立させる遊びが流行りだし、自分もそれに関わっ

たこと。

……気づいたら、自分がその標的になっていたこと。

「おかしな話だよね。」

他人に孤立することを強いてきたのに、いざ自分がこうなると、辛くて怖くて寂しくて、結局こんな風になっちゃった。」

自嘲的に彼女は笑う。

彼女はずつと一人で負い目を感じていて、誰かに助けを求めるわけでもなく、一人で殻に閉じこもった。

全くもって、おかしな話などではない。

これはただの心優しい少女の物語だ。

確かに彼女のやったことは褒められたものではない。

その罪を償うべきなのかもしれない。

だとしても、彼女が救われてはならない理由にはならない。

俺に『救う』などと大それたことは言えない。

ただ、少女の立つ舞台にそつと忍び込む。

そしてもう一つ、その手を引いて舞台から降ろすくらいはできるだろう。

「なあ、お前が以前いじめた連中はみんながみんな、今でも不幸で、今でも一人で、今で

も苦しんでいるのか？」

「そんなことはない……と思う。」

苦しんでるかどうかは分からないけど。」

当然だろう。

むしろ俺のようなやつが手を差し伸べてくれる方が稀なケースだろう。

どこにだって他者を排斥する『みんな』がいるように、どこにだって他者に手を伸ばす『誰か』はいるのだ。

かつての俺がそうだったように。

「なら、次はお前の番じゃないか？」

鶴見留美はもう十分に苦しんだ、そうだろ。」

それでも、彼女は俯いたままだ。

「でも……。」

その姿にどことなく既視感を感じる。

もう一步が踏み出せなかった自分自身を。

そんな俺の手を引っ張ってくれたあいつの言葉を。

——自分が救われた言葉を思い出す。

「どんな人間であれ、幸せになる権利は等しくある。」

お前が苦しんでいるならそれを助ける人がいる。

今回はたまたま俺だったみたいだ。」

鶴見がはつと顔を上げる。

「受け売りの言葉だけだな。」

俺みたいなやつでも、相談には乗れるし、辛いことがあれば慰めることもできる。

俺と友達になって幸せになるかも、救われるかも保証はできない。

ただ、俺にできることならなんだってやる。」

冗談めかした、けれど本心の言葉を彼女に伝える。

「本当に……いいのかな？」

まだ迷いを見せる彼女の頭にぼん、と手を置く。

「それを決めるのは俺じゃない。」

そんな権利も資格も俺にはないからな。

持つてるのは鶴見、お前だ。」

許しを請う勇氣と、許される努力。

その両方を彼女は持ち合わせているはずだ。

「……ありがとう、八幡。」

そう小さく呟いて、鶴見はにっこりと笑った。

周囲の協力と借り物の場所、借り物の言葉を以てやっとできたことが、女の子一人と友達になることだけだった。

我ながら情けないと思うが、自らを棚上げにしたその言葉の中に、ようやく自分を見つけることができた。

だが――俺が俺を許せる日はいつまでも来ないだろう。

e p. 19 やっぱり比企谷八幡の目は死んでいる

楽しげな音楽が流れ、子ども達が赤々と燃える炎の周りではしゃいでいる。

しかし、広場の中心から外れたところに立つ俺たちに届くその光はゆらゆらとしてはつきりしない。

「それじゃあ、行ってくるね。」

あの秘密の場所から帰って来たばかりだというのに鶴見は時間が惜しい、と歩みを進める。

「もう行くのか？」

少し休んでも……。」

「私は大丈夫。」

善は急げって言うでしょ？」

「まあ、そうだな。」

一人で大丈夫か？なんなら俺も——「八幡がついて来ちゃ意味ないでしょ。ここで待ってて。」

心配が過ぎる俺の言葉を遮って彼女は笑う。

「なんか、お母さんみたいだよ?」

そして、今度こそ鶴見は人ごみの中に消えていった。

「せめてそこはお父さん、だろ。」

誰に届くはずもない眩きを漏らす。

もう見つけられるはずのない彼女を探すように子ども達の集団をぼんやりと眺める。

無邪気に笑い、戯れる彼らは本当に今を楽しんでいるのだろう。

結局、今回もあの中に俺が混じることにはなかつた。

やはり俺のような奴には離れた場所から全体を俯瞰するのが一番だということだ。

「ヒッキーおかえり!」

唐突に明るい声が響く。

無駄な思考を打ち切り、その声が出た方向に向くとこちらに近づく影が3つ。

由比ヶ浜と雪ノ下、それに小町だ。

彼女達に手を挙げて答える。

「悪かったな、遅くな……っ……て……。」

段々と声が小さくなってしまふ。

「……雪ノ下?」

由比ヶ浜と小町は俺と適度な距離を保って止まったのに対し、なぜか雪ノ下はそれに構わずズンズンと近づいてくる。

なにこれ、俺ビンタでもされちゃうの？

そんな不安が頭をよぎる俺をよそに彼女は無表情のまま目の前で立ち止まり、少し背伸びをする。

そのせいで身長差が埋まり、彼女の吐息がかかる程に顔が近づく。

近い近い近い！

状況を全く理解できない俺に雪ノ下はゆっくりと手を伸ばし——俺の頭にくっついていた葉っぱを取った。

「どこへ行っていたのかは知らないけれど、身だしなみくらいは整えなさい。」

言つて、雪ノ下が俺から離れた。

そのいつもの物言いに俺はどこかほっとする。

残り2人に目を向けると、由比ヶ浜は唾然として俺たちを凝視し、小町はニヤニヤと笑い、何か魂胆のありそうな表情をしている。

「わざわざお前が取る必要はなかっただろ。」

ため息をつきながら言う。

一瞬でも焦った俺が情けない。

「確かにそうね……。」

あまりにも見苦しかったからかしら？」

「いや、俺に聞くなよ。」

雪ノ下らしくない曖昧な発言のせいで、場に妙な空気が流れる。

「あー、その、なんだ。」

「そっちは大丈夫だったか？」

さすがにこの空気には耐えられないのでさっさと話題を切り替える。

そっち、と言うのは俺が彼女達に頼んでいたこと——鶴見と俺の二人が姿を消している間、小学校の教師達の目をごまかすという依頼だ。

戻ってきた今、教師陣が慌てている様子は見えなかったので大丈夫だと思うのだが……。

「うん！隼人君が動いてくれたし、そもそも先生達も……。」

由比ヶ浜は言いにくそうにポツリと呟く。

「あんまり、探す気もなかったのかな……。」

当然といえば当然だろう。

あの惨状を見て見ぬ振りをするような連中だ。

今更児童一人の姿が見えなかったところで、大慌てするはずもない。

「それで、本題はどうなったの？」

さつき、彼女は走ってどこかに行ったようだけれど。」

待ちきれないと言わんばかりに雪ノ下が話の中心に切り込む。

さて、どうしたものか。

結論から言うと、俺は現状の鶴見を取り囲む環境をどうにかしたわけではない。

あの子はこれからも厳しい状況に置かれるだろう。

それでも、きつと俺は彼女自身を変えることができたはずだ。

なら、俺の報告すべきことはこの事実しかないだろう。

これから増えるであろう鶴見にとっての——

「一人目になった。」

「一人目？」

由比ヶ浜が聞き返し、雪ノ下は怪訝な表情を浮かべる。

そんな二人に俺は満面の笑みを浮かべ、鶴見と二人で撮ったツーショットの写真を見

せつけながら——

「友達一人目だ。」

と、言い放った。

「ひどい目にあつた……。」
ため息をつく。

「さすがに小町もさっきのはどうかと思うよ?」

小町が苦笑いを浮かべて言う。

雪ノ下と由比ヶ浜はもういない。

というか、さっきの俺の発言のせいでもどこかに行つたのだが。

俺としては本気の言葉だったのだが、なぜはそれを聞いた由比ヶ浜はそつと俺から距離を取り、雪ノ下に至つては俺をロリコンと称し、汚物を見るような視線を俺に向けた。

「やっぱりあんなのじゃダメか。」

小町にさえダメと言われたのだ。

今回の依頼は俺の失敗ということになる。

そう思つて落ち込む俺に小町が呑気な声で言う。

「言い方の問題だと思うよ?」

お兄ちゃん、顔はかつこいいのに目が致命的に死んでるから、それであの笑顔と発言はね……。

結果については2人とも納得したんじゃないかな?」

言い方……?」

目の死んだ男子高校生が女子児童とのツーショット写真を満面の笑み（らしいもの）を浮かべて同級生の女子に見せつけただけだ。

……うん、グレーどころか完全に真っ黒だな。

「なるほど。」

でも、納得したかどうかは別問題だろ。」

「ううん、したよ。」

反論するも、小町は断言する。

「結衣さんはお兄ちゃんのこと信じてるからね。」

お兄ちゃんが大丈夫って顔してたからきつと結衣さんも大丈夫って思ったはずだよ。」

大丈夫な顔ってどんな顔だよ。

それに、全然理由になってない。

そんな考えが顔に出ていたのか、小町が念押ししてくる。

「とーにーかーく大丈夫なの！」

「へいへい。」

じゃあ雪ノ下はどうなんだ？」

続くもう一人について尋ねる。

「雪乃さんはー」

と小町は言葉を探すように宙を見つめると

「秘密！」

とびっきりの笑顔でそう言った。

e p. 20 とかく彼女の恋路はままならない

唐突だが、俺は人と会う時に約束の10分前に待ち合わせ場所に着くように心がけている。

なぜ10分前なのかを端的に言うなら、ちようどいいから、である。

例えば、約束の時刻ぴったりに着くようにしたとしよう。

その場合、自分が待たされる可能性は相手が遅刻魔でもない限りほぼないが、逆に待たせる可能性がある。

加えて、交通機関の不具合などの不測の事態に対応しきれない。

次に、30分前に着くようにしたとしよう。

相手が時間ぴつたりに来た場合は構わないかもしれないが、仮に相手が10分前に姿を現したとすると、

え、何こいつ、ずっと待ってたの？

楽しみにしすぎだろ、気持ち悪っ。

と思われれるかもしれない。

そんなこんなを加味した結果、10分前がベストだと俺は結論付けたのだ。長くなってしまったが、俺は今その理論に基づいて駅で人を待っている。

今夜は千葉市民花火大会だ。

こんなリア充イベントに俺が参加しないわけにもいかず、今年も去年と同じメンバー、葉山や由比ヶ浜、三浦達と行くことになっている。

ここに来るまでも、この駅にしても花火大会に行く人々に溢れかえっていて、人ごみに当てられた俺はすでにげんなりしている。

数人見知った顔が前を通り、気づかれなければ無視、気づかれれば笑顔を作って手を振りながら待っていると、待ち人がころころと下駄を鳴らしながら近づいて来るのが見えた。

「ヒッキーー！」

由比ヶ浜は俺を見つけると手を振ってこちらに急ぐが、下駄に履き慣れていないのか、その足取りはやけに危なっかしい。

「あんまり急ぐとこけるぞ。」

と言ったものの、俺の警告が聞こえなかった彼女はそのままつんのめってこけそうになる。

「……………」

ほら、言ったじゃねえか。」

「えへへ、ごめん。」

完全にバランスを失う寸前に由比ヶ浜の手を掴んで引き上げた。

彼女はバツが悪そうに笑う。

「他の奴らは一緒じゃないのか?」

由比ヶ浜が来たのは待ち合わせの時刻より少し遅い。

戸部や三浦ならいざ知らず、葉山が遅れて来るのは考えにくいので、てつきり一緒に来るものと思っていたのだが――

「あれ?まだ来てないの?」

きよとんとした彼女の表情から俺の予想は外れていたことが分かる。

するとその時、ポケットに入れた携帯がメールが来たことを知らせた。

「すまん、メールだ。」

「あたしも。」

偶然にも同時に来たそのメールを開いた途端、苦笑いが自然と浮かぶ。

To: ハチ

From: 三浦 優美子

件名: 無題

本文：ごめん！

あーしらみんな急用が入っちゃったみたいで行けないから結衣と二人で行つとい

！
……ああ、これは想定外だ。

ちろつと横目で由比ヶ浜を見ると顔を真っ赤にして画面を食い入るように見ている。

ドタキャンに怒り心頭、といったところだろうか。

三浦たちはまだ『比企谷八幡』が由比ヶ浜の恋情の相手だと考えている。

実際には由比ヶ浜の好きだった『比企谷八幡』は既に失われ、由比ヶ浜は俺に恋愛の感情など持ち合わせていない。

それを伝えようにも、彼女達は俺の仮面の下を知らないし、俺も教えるつもりはないのでどうしようもないのだ。

「……なんかすまんな。」

結局、原因は全て俺にあるという罪悪感から由比ヶ浜に謝罪する。

「う、ううん。優美子達が勝手にやったことだから……。」

まだ頬が赤い彼女はそのまま黙りこくってしまふ。

正直、ここで解散というのが理想なのだが……。

そう思って彼女を見る。

由比ヶ浜が着ている薄桃色の浴衣は所々に小さく花が咲き、いつもはお団子を作っている髪は珍しくくいつとアップに纏め上げられていた。

ここまで着飾って来た由比ヶ浜を花火も見ずに帰らせる、というのはいくらなんでも酷いだろう。

かと言つてこのアホの子を一人で祭りに行かせるのもなあ……。

「あー、その、なんだ。」

嫌じゃなかつたら二人で行くか？」

この一言を口にするのが妙に気恥ずかしく、俺は彼女から目をそらしながら言う。

「いいの!?!行く!?!行きたい!?!」

一方由比ヶ浜はやけに嬉しそうに返事をする。

それだけ花火大会を楽しみにしていたのだろう。

「よし、ならさっさと行くぞ。」

言つて、ホームへと歩き出す

祭りに行く人が多く、駅は人で溢れている。

由比ヶ浜とはぐれないように気をつけながら歩きらなるとか俺たちは電車に乗り込んだ。
んだ。

満員、とまではいかないが扉の周囲は人が多く、そこから離れるように由比ヶ浜を誘

導する。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう、ヒツキー。」

一応心配して声をかけると彼女は笑顔で答える。

「ヒツキーってこういうところ優しいよね。」

「そうか？」

「うん。なんか手馴れてるっていうか…。」

他の女の子にもこういうことやってるのかな、とか？」

「何が聞きたいんだよ……。」

昔、小町に仕込まれたからな。

でも二人だけで出かけたことのあるのは小町とお前、あと雪ノ下くらいだぞ。」

彼女の妙な質問に戸惑いつつ答える。

「ゆきのんと二人で遊んだことあるの!？」

由比ヶ浜が急に食いついてくる。

「あ、ああ。」

遊ぶというよりはお前の誕生日プレゼント選びの手伝いだっただけだな。」

そういえば、あの時初めて雪ノ下陽乃に遭遇したんだよね……。」

嫌なことを思い出してげんなりする俺に由比ヶ浜は続けて問うてくる。

「他には？」

「ない。」

部活のこと以外であいつと俺がわざわざ会うわけないだろ？」

「だ、だよね。良かった……。」

全くもって何が良かったのか分からないが、俺がそれを聞き返す前に由比ヶ浜が、そういえば、と話を切り出す。

「あの日からゆきのんに会ったことある？」

あの日、というのは林間学校が終わり、こっちに帰ってきた日のことだろう。

高校の前で先生の車から降りな俺たちを雪ノ下陽乃が待っていたのだ。

彼女は急いでるようで、妹の雪ノ下を半ば無理やり連れて行く形で去っていった。

あの時の雪ノ下のどこか悲しそうな表情は今でも鮮明に思い浮かぶ。

だが、俺たちが何かできる話ではない。

あれは雪ノ下の家の問題であり、その内情を一切知らない俺が介入していいものではないのだ。

「いや、ないな。」

「やっぱり……。」

あたしも何度かメールしてるんだけど、返信ないの。」
寂しそうな表情で由比ヶ浜が呟く。

優しい彼女のことだ、あの時何もできなかったことに負い目を感じているのだろう。

「誘拐されたわけでもなし、そこまで気に病む必要もないんじゃないか？」

それを少しでも和らげられれば、と俺は何の根拠もないことを口にする。

「もしかするとこの祭りのどこかで会えるかもしれないしな。」

「そっか……、そうだよな。」

会えたらいいな。」

「少なくとも二学期には会える。」

「そういえば、由比ヶ浜の浴衣、去年とは違うよな。」

これ以上この話題を続けても良いことはない、と判断して話題を変える。

「覚えててくれたんだ！」

「どう……かな？」

去年着ていたのは黄色の浴衣だったはずだ。

由比ヶ浜が少し恥ずかしそうに両手を広げて桃色の浴衣を見せる。

「こういうのはこっち側の俺の役目じゃないんだが、と思いつながら俺は答える。」

「ああ、よく似合ってると思う。」

——そうして電車での時間は流れていった。

電車から降り、少し歩くと道の両側に屋台の並ぶ通りに着く。

花火が始まるまでにはまだかなり時間の余裕がある。

「さて、どこから行くんだ？」

隣に立つ由比ヶ浜に話しかける。

「うーん……」

顎に手を当てて少し悩んだあと、

「それじゃあ——「あ、結衣ちゃんだ！」

思いついたように彼女が両手をポンッと叩いた瞬間、背後から聞き覚えのある声がした。

「さがみん！久しぶり〜。」

俺より早く振り向いた由比ヶ浜は声の主のところへ駆け寄ったらしい。

さがみん、というのと同じクラスの相模南のことだろう。

これは少しめんどくさいことになった……。

振り向くと、彼女はよく一緒につるんでいる女子二人とここに来ているようで、偶然

見つけた由比ヶ浜に気を取られ、俺にはまだ気づいていないようだ。
「こんなところで会うなんて奇遇だね！」

結衣ちゃんは誰と来てるの？」

もちろん、それも時間の問題で話題が出連れの話に移った途端、彼女とがつり目があつてしまう。

「こんばんわ。」

久しぶり、相模さん。」

とりあえず『比企谷八幡』を作つて彼女らに笑いかける。

「ひ、比企谷くん!？」

あ、ご、ごめんね。うちら、邪魔するつもりじゃなかったの……。」

俺を認識した途端、彼女は驚いて後ずさる。

まあ、当然そう解釈するよな。

このままでは、夏休みが終わる頃には由比ヶ浜と俺が付き合つていふ噂が流布されているだろう。

それは由比ヶ浜にとつて迷惑にしかならないし、俺も望むところではない。

「相模さん、ちよつといいかな？」

彼女たちが逃げてしまう前に何とかしなくてはならない、と俺は相模に話しかける。

「実は三浦たちと一緒に来てたんだけどはぐれちゃったんだ。

あいつら、どこかで見かけなかったか？」

真つ赤な嘘だ。

だが、効果はあつたようで三浦、という名前が出た途端に相模と後ろの二人の顔がひきつる。

カースト最上位に位置する俺たちのグループの中でも權威のある三浦は他の女子からとつてすれば畏怖の対象なのだ。

あいつらとはぐれてしまったことにすれば、相模たちも下手な噂は流せないだろう。

「そ、そうなんだ、大変だね。

ても、うちらも見なかつたよね？」

彼女が後ろの二人に確認を取ると、彼女らもうんうんと首を縦に振る。

まあ、いない人間を見かけられるはずないよな。

そう思いながら俺は自分の仮面に残念、という表情を描く。

「そうか……。

もう少し俺たちは探してみることにするよ。

相模たちは祭り、楽しんでくれよ！」

「ごめんね、力になれなくて。

バイバイ、結衣ちゃんもね。」

そして3人は人混みの中に消えていった。

これでなんとかなっただろう。

後で適当に見つかったよ、とでも連絡しておけば完璧だ。

しかし——

「由比ヶ浜?」

自分としては上手くやったつもりなのだが、彼女は俯いたまま何も言わない。

何かまずいことでもしてしまったのかと思い、俯く彼女の顔を覗き込む。

うわー、目を逸した挙句、唇を尖らして不満を表してらっしやる……。

「えーっと、変な噂が流れないようにしたつもりなんですけど……。」

思わず敬語を使ってしまう。

正直、由比ヶ浜が何にそんなに不満を持ったのかさっぱり分からない。

あー、でも一つまずかったとすれば——

「嘘、ついたのがいけなかったか?」

その瞬間ら彼女が突然ガバツと顔を上げて叫ぶ。

「そうじゃなくて! 否定して欲しくなかったというか、なんというか……。」

最初の勢いこそあったが、後半になるにつれてその声はどんどん小さくなって行き、

よく聞き取れない。

「どういうー」「ヒツキー！」

「はい！」

開きかけた口を由比ヶ浜に押しとどめられる。

そして彼女はプイツとそつぽを向くと、

「りんご飴。」

「はい？」

「りんご飴、奢ってくれたら許す。」

よく分からない要求をしてきた。

何を許されるのかすら分かっていないが、その程度で機嫌を直してくれるなら安いものだ。

「分かったよ。ならさっさと行くか。」

まだ花火まで時間がある。

これならゆつくり出し物を見て回れるだろう。

「……鈍感。」

りんご飴を片手に少し前を行く由比ヶ浜を見失わないようにしながら祭りで賑わう通りを歩き。

右手には小町に頼まれた綿菓子などのお菓子類。

左手には由比ヶ浜に不意打ちで口に突っ込まれた焼きそばの残りが乗った発泡スチロールのトレイ。

「ねえ、ヒッキー！」

次あれ行こうよ、あれ！」

様々な屋台に目移りしながら歩く彼女が次に目をつけたのは射的だ。

このまま由比ヶ浜の出店巡りに

付き合うのも悪くないのだが——

「あー、そろそろ花火の時間だ。

場所探したほうがいいんじゃないか？」

腕時計が指す時刻は花火打ち上げ予定時間の15分前。

彼女も自身の携帯でそれを確認したらしく、驚いて目をまん丸にしている。

「わっ、もうこんな時間じゃん!」

「さすがにメインイベントを逃すわけにはいかんだろ。」

ほれ、行くぞ。」

言つて、花火鑑賞に多くの人が訪れる広場の方へと足を向ける。

一応ブルーシートは用意しているが、果たして空いている場所があるかどうか……。

そんな一抹の不安を抱えながら歩いていると、Tシャツの裾に妙な引っかけかきかきを感じる。

「?……どした。」

ちらりと見ると俺に追いついた由比ヶ浜にちよこん服をつかまれている。

「えへへ、はぐれたら大変でしょ?」

と、照れ臭そうに彼女は笑う。

さつきまでお前は一人で前歩いてただろ、という反論が漏れそうになるが、

「……好きにしろ。」

それを飲み下して再び足を動かす。

今度は由比ヶ浜がついて来られるようにゆっくりと。

「ありがと。」

その小さな声は人ごみの喧騒の中でも確かに俺の耳に届いた。

「うわ、人いっぱいだ……。」

思わず由比ヶ浜が声を漏らす。

俺たちの眼前の広場には人、人、人――。

備え付けのベンチはもちろん、芝生の上にも家族連れやカップルたちが所狭しとシートを広げて座っている。

一部の隙もないその間に潜り込むのは不可能だろう。

「これは座れないかもな。」

ぼそりと呟く。

俺たちのように遅れて来た者は自然と各々道で立つたまま見ることになる。

「あたしは立ったままでもいいよ?」

と、空気を読んだ由比ヶ浜がそう提案するが……

「そういうわけにもいかない。

足、痛いんだろ？」

駅でつまづくくらいには慣れていない下駄を履いてここまで歩きつばなしだった彼女には限界が来ているのだろう。

「あはは、バレてたんだ。」

「そりゃこんな露骨に服掴まれたら嫌でも気付く。」

由比ヶ浜が申し訳なさそうに俯く。

もう少し早く気づいてやるべきだったという後悔の念に駆られながら、俺は彼女の頭の上にポンと手を置く。

「もう少し奥まで行ってみるから頑張れ。」

なに、いざとなったらお前一人くらいはおんぶしてやる。」

「……うん。」

とりあえず周りを見て人の少なさそうな場所を探す。

「ヒッキー、あつちは？」

同じく周囲を見渡していた由比ヶ浜がある方向を指差す。

そつちは確かに人が少ないんだが、と言いかけたところで、背後から女性の声が響いた。

「そこから先は有料エリアだよ、由比ヶ浜ちゃん。」

「……これが雪ノ下に会えるかもな、なんて無責任な発言をした罰なのかもしれないな。」

e p 2 1 彼女は馬鹿げた見世物を見物する

「……これで、よしっと。

はい、どうぞ。」

雪ノ下陽乃は由比ヶ浜の下駄の鼻緒の部分を少し弄った後にそれを彼女に返す。

「あ、ありがとうございます。」

「あくまでちよつとマシにしてくださいだからまた無理して歩くと痛くなつちやうから気をつけてね。」

それともその時は比企谷君がおんぶしてもらうんだっけ？」

底意地の悪い笑みを浮かべながら雪ノ下さんが俺を見る。

「いつから後ろにいたんですか……？」

人でごった返した返した広場で二進も三進もいなくなっていた俺たちは彼女に背後から話しかけられた。

そのまま雪ノ下さんの流れに乗せられた結果、今由比ヶ浜と俺がいるのは一般人なら

入ることすらできない貴賓席だ。

というか大きなベンチなのに何で二人とも俺に寄ってくるのですかね。

両手に花と言えば聞こえがいいが、左側に座る雪ノ下さんは棘だらけ、というレベルじゃないからなあ……。

「比企谷君が由比ヶ浜ちゃんの足の心配をしてた時だね。」

「かなり序盤からいたんですか。」

……でも助かりました、ありがとうございます。」

正直あの状況でこの人に見つけて貰えたのは幸運だった。

貴賓席
ここなら確実に由比ヶ浜を休ませることができる。」

……もちろん、俺の個人的な感情を除けば、の話だが。

一方、俺が会いたくない人ぶつちぎりナンバーワンである雪ノ下陽乃は何故か驚いたように目をまん丸にしている。

「比企谷君って私にお礼言えるんだ!?!?」

「そう思われてるって分かってるのによく声かけましたね……。」

たしかに嫌われてると分かっている声をかけてくる所がこの人らしいと言えそうかもしれないが。

「意外に素直なんだ。」

それとも由比ヶ浜ちゃんのことになると別なのかな？」

「含みのある言い方はやめて下さい。」

それより俺たちをこんなところに連れてきて大丈夫なんですか？」

「もちろん。私——と言うか雪ノ下家はこういう地元の催し事には強いからね。

多少奔放に振舞つても問題なし。」

「セレブだ……。」

それを誇示するわけでも自慢するわけでもなく、むしろめんどくさそうに言う雪ノ下さんに由比ヶ浜が目を輝かせながら呟く。

「むしろ君達が来てくれて助かったよ。」

さつきからつままない挨拶回りばかりで飽き飽きしてたところだった。」

両腕を上にして伸びをする彼女の言葉に嘘は見当たらない。

本当に疲れているのだろう。

たった3度しか彼女と会っていないとしても、その態度が他の時より柔らかくなっているの分かる。

それでも、以前としてその顔に分厚い仮面が張り付いているのは変わらないが。

大変ですね、という言葉が喉までせり上がって来るが、寸前で？み下す。

その重圧を押し量る事すらできない俺が簡単に劳いの言葉をかけるのは間違ってい

るような気がしたからだ。

「長女としての責務、ですか。」

適当に言葉に濁すと、意図が伝わったのか雪ノ下さんは少し笑う。

「ふふ、そういうこと。」

雪乃ちゃんにこういう役目はちよつと重いからね。」

ああ、確かにあいつが社交儀礼の場で愛想を振りまける訳ないよな。

というか想像できない。

「ゆ、ゆきのん来てないんですか？」

そわそわと落ち着きなく周囲を見渡していた由比ヶ浜が尋ねる。

そういえば、こいつは電車の中で雪ノ下に連絡がつかないことを心配していたな、と思いつく。

「残念だけど来てないよ。」

雪乃ちゃんは今も家にいるんじゃないかな。

由比ヶ浜ちゃんは比企谷君とデートだったの？

だとしたらお姉さん、悪いことしちゃったね……。」

言つて、雪ノ下さんは申し訳なきさそうに俯くがよく見ると口角が上がっているのが分かる。

完全に面白がってるぞ、この人。

「デッ、デート……なんて……。」

そして、なぜか由比ヶ浜は顔真っ赤にしなから手をブンブンと振っている。

いや、否定したいのは分かるんだけどね。

「あー、デートなんかじゃないですよ。

もともと大勢で来るつもりだったんですけど、こいつと俺以外が勘違いのせいでドタキャンしました。」

「勘違い？」

聞き返されてミスに気づく。

今のはドタキャンされた、だけで良かったところだ。

勘違いという単語にこの雪ノ下さんが反応しないわけがないというのに。

「……色々あるんですよ、高校生には。」

「ふーん……。」

苦し紛れの発言に雪ノ下さんは意味ありげに頷く。

そのまま俺を挟んでベンチの反対側に座る由比ヶ浜へちろつと目を向けた。

その視線は俺に向けられていないにも関わらず雪ノ下さんの意図が伝わるほど冷たい。

「あ、あ！あっちの方が花火が見やすいかもだから、ちよつと見てくるね!!」

それとほぼ同時にその意味を読み取った彼女がいそいそと立ち上がってあらぬ方向へ歩き出す。

「いや、あんまり無理して歩くとー」「だ、大丈夫だから！ちよつとだけ待っててね、ヒツキー！」

そのまま止める暇もなく由比ヶ浜は去って行ってしまう。

「どういうつもりですか……。」

自然と声に怒気がこもる。

俺はまだしも由比ヶ浜にまでちよつかいを出す必要はないだろう。

「あはは、そんなに怒らなくてもいいじゃない。

よく考えたら二人だけで話す機会なかったでしょ？」

「そんなものいりません。

お礼は言いましたし、俺も行きますよ。わざわざあいつとここまで来たのに肝心の花を見るのが別々というのはあんまりですし。」

言つて、俺も立ち上がろうとするが……

「そんなに時間は取らせないからさ、お姉さんと楽しいお話しようよ。」

左手をがっちり雪ノ下さんに掴まれていた。

「……随分強引ですね。」

「君相手に遠慮してたらこっちが火傷しちやいそうだもん。」

「燃やしきれませんよ。」

「不要な怪我を負う必要はないでしょ。」

「……はあ」

言葉遊びをする雪ノ下さんの目は本気だ。

こうなつては抵抗しても無駄だと悟り、おとなしく半端に浮かした腰を再び下ろす。

「それにしても由比ヶ浜ちゃん、察しが良くて助かるよ。」

それを見た雪ノ下さんは満足そうに頷きながら話し始める。

「比企谷くんにバレたのは当たり前として、まさかもう一人あんな伏兵がいるとは思わなかったな。」

こんなメンバーが揃ってるなんて、私も奉仕部に入りたいよ。」

この話は林間学校から高校の校門前まで送ってもらった時の事だろう。

小町や由比ヶ浜はここで初めてこの人に会ったのだが、二人とも一目でその仮面を看破したのだ。

俺みたいなやつがずっと側にいた小町は当然としても、正直由比ヶ浜が気づくとは意外だった。

彼女なら、なんとなく察して苦手に思うのだろうと思ったのだが、実際は俺の後ろに隠れる程には雪ノ下さんを恐れていた。

「奉仕部は心よりあなたを歓迎しないので来ないでくださいよ。」

……あいつが分かったのは似たようなのが近くにいたからですかね。」

「似たようなの、ねえ。」

含みのある言い方で雪ノ下さんが呟く。

俺たちが似ていなくて何が似ているというのだ。

素顔を隠して本音を隠して嘘で塗り固めて仮面を被って本心を心の奥底に沈めて

……だから俺はあなたが大嫌いなのに。

しかし、確かに引つかかることはある。

俺は雪ノ下陽乃が嫌いだ。この人の眼前に立つとまるで鏡を見ているように感じる

から。

なら、どうして逆は起こらないんだ。

なぜ雪ノ下陽乃は鏡を見て笑っていられるのか、と。

「それじゃあ、比企谷くん。ここでクイズを一つ。」

「はい？」

不意に、ふざけた口調でにこやかに笑いながら雪ノ下さんが口を開く。

「あるところにとても足の速いA君がいました。」

けれど、その目は真剣なままで

「けれど、その子のクラスにはその子より足の速いB君がいました。」

声色は口を挟むことが許されないほどに冷たい。

「さて、その二人がかけっこをすることになりました。」

結果はA君の惨敗。でも負けず嫌いのA君はB君に勝ちたくて仕方ありません。

まあ、1位は1位なりの責任があることをA君は知らないだけだね。」

だから、

「さて、君がA君ならどうする?」

この質問は本気なのだと理解できた。

「……答えるメリットは?」

「私の気に入る答えだったら解放してあげる。」

挑戦的な笑みを浮かべてながら雪ノ下陽乃は言う。

俺ならどうする?」

B君に負けないくらい足が速くなるように努力する?」

「……ありえないな。」

どんなに努力したって届かないものはある。」

99%の努力じゃ秀才にしかねれずに、本物の天才には勝てない。最善手はそもそも勝負をしないこと。

それでも勝ちたいのなら、俺の答えは決まっている。

「パンを食べる練習をします。」

同じ土俵で闘うべきではない、と。

しばしの沈黙。

俺の返答が意外だったのか雪ノ下さんはほかんと口を開けて動きを止めた後――

「ぶっ、っははははははー！」

思いっきり笑い出した。

「……はあはあ、笑い死ぬかと思つたよ。

やつぱり比企谷くんは最高だね。」

一通り笑つた後、雪ノ下さんは目尻に涙を浮かべながら言う。

「ほんと、雪乃ちゃんにはもつたいたいなあ。

お姉さんと仲良くする気はない？」

「冗談でもやめてください。」

即答する俺に、冗談じゃないのになあ、と不満そうに漏らした後、彼女はどこか寂し

げに笑つた。

「……いつになったら気づいてくれるのかな。」

その儂げな表情は、いつか雪ノ下雪乃が部屋で見せたものとよく似ている。視線が勝手に引き寄せられるのを感じながら、今度こそ完全に立ち上がる。

「はて、俺には何のことやら分かりません。」

俺はもう行っていいですよね？」

無理やり雪ノ下さんから目を背ける。

このままだと話を続けたいと思ってしまうかもしれないから。

「もちろん。」

比企谷くんのそういうところ、好きだよ。」

「こんなに嬉しくない告白は初めてです。」

「……それじゃ。」

軽口を叩きながらぺこりと頭を下げてさっさと歩き出す。

腕時計は花火開始まで残り2分を指し示している。

体感的には1時間くらいに感じたこの問答も、実際は4〜5分程度だったのだ。少し歩みを早めて由比ヶ浜を探しながら、あの質問の真意を探る。

いや、正確には探るまでもなく理解している。ただ信じたくないだけだ。

それじゃあ、比企谷八幡。ここでクイズを一つ。

雪ノ下陽乃と比企谷八幡は似ているか？

雪ノ下陽乃は何のために仮面を被ったのか。

それは雪ノ下雪乃の前に立ちほだかるためだ。

妹の指針となるため。優秀な妹に更にながめと成長を止めさせないため。

妹に汚れた大人の世界を見せないため。不器用な妹が社交辞令の場に出なくて済むため。

そのために雪ノ下陽乃は仮面を被った。

長女だけのことだ。次女が迷惑を被らないように。

例えその結果、妹に嫌われるとしても。

事実、家庭環境において彼女に選択肢はなかったのかもしれない。

そうせざるを得ない状況だったのかもしれない。

それでも、雪ノ下陽乃は笑ったのだ。

雪ノ下雪乃の越えるべき壁として在ることに。

結局、雪ノ下陽乃は他者のためにその仮面を手に取ったのだ。

では、比企谷八幡は何のために仮面を被ったのか。

家族のため？

友人のため？

彼女のため？

全てノーだ。

逃げるためだ。目をそらすためだ。

我慢できないものがあつたから。見たくないものがあつたから。

弱いことで背負わされる責任から逃れるために『強いふり』をした。

俺に選択肢はいくらでもあつた。

心のどこかで正解がどれかも分かつていて、実際に正しい道を示してくれた人さえいた。

それでも、俺は間違えたのだ。

自分がこれ以上傷つきたくなかつたから。

つまり、比企谷八幡は徹頭徹尾、自分のためだけにその仮面を手を取ったのだ。

では、答え合わせ。

雪ノ下陽乃と比企谷八幡は似ているか。

ああ、表面上は似ているだろう。

素顔を隠して本音を隠して嘘で塗り固めて仮面を被って本心を心の奥底に沈めて……だから俺はあの人が嫌いなのだと思っていた。

でも、根っこが、始まりが違う。

動機も目的も対象も異なるものを果たして同じものだと、似ていると断じることではできないのか。

——答えは否である。

きっと他人のために磨かれた仮面は鏡のように美しいのだろう。

俺の顔が映り込むくらいには。

きっと自分のために磨かれた仮面は岩肌のように醜いのだろう。

雪ノ下さんの顔が映り込む隙などないくらいには。

だからこそ、

俺は雪ノ下さんがひどく嫌いで

雪ノ下さんは俺にひどく興味を持ったのだ。

つまり、結局のところ比企谷八幡が雪ノ下陽乃に抱いていた感情は同族嫌悪などではなく

ただの自己嫌悪だった。

由比ヶ浜は貴賓席と一般席の狭間にある木に寄りかかつて俺を待っていた。

「由比ヶ浜。」

「あ、ヒツキー。急に席外しちゃってごめんね？」

「大丈夫だ、気にしてない。」

あの手合いには関わらないのが一番だ。

なんなら俺も一緒にあの場から逃げ出したかったまでである。」

下駄を直してくれた恩を忘れ、二人でくすくす笑う。

「花火、もうすぐだよね。」

「悪いな、結局立ったままになった。」

「ううん、大丈夫だよ。」

陽乃さんと何話してたの？」

「……ま、色々とな。」

少し考えてから適当に誤魔化して答える。

「そっか……」

人ごみの喧騒が遠い。

一方は有象無象が一樣に夜空を見上げる広場。

一方は魔王が一人座る貴賓席。

そのどっちつかずな場所から俺たちは空を見ていた。

雪ノ下さんはあの表情のまま花火が上がるのを待っているのだろうか。

それとも、すっかり仮面を被りなおしてお手本のような笑顔を貼り付けているのだろうか。

どっちにしろ、もう俺には分からないことだ。

ヒュルルルという気の抜けた音とともに一発目の花火が夜空に咲いた。

e p 2 2 およそ比企谷八幡の芝居は影にすぎない

人気者になる。そう決意したのは中学に上がる少し前のことだったか。

しかし、万人から好かれるなど不可能だ。

人の価値観は千差万別、可能なのは出来る限り多くの人々から好かれるキャラ付けを
することだけ。

だから、人気者の『比企谷八幡』を作るにあたって一番苦労したのは、他人からの評
価を正確に把握することだった。

人当たりの良い表情、穏やかな物腰、人を魅せる話術、加えて勉強やスポーツなどの
基礎スペックの向上、雪ノ下に言わせれば努力、俺に言わせれば保身でそれらを身につ
けたのも全てはその前提条件があつてのことだ。

一方で好かれても嫌われても、やることは簡単だ。

“その人にとつての比企谷八幡”を演じること。

好かれてるならば好かれてるなりに、嫌われているなら嫌われているなりに振る舞え
ばいい。

それを行う上で身につけた技術があるだけで、最も大切に苦労したのはその演じる

キャラクターを理解することだった。

努力して、保身して、そして身につけた今の『比企谷八幡』は我ながらよくできたものだと思っっている。

だから、間違いに気づかなかった。

心のどこかで慢心していたのだろう。

ここまで培った『比企谷八幡』なら例え相手が雪ノ下陽乃であろうと読み違えることはない、と。

だが、結果はどうだ。

もちろん、間違いに気づいたところで彼女のことが好きになつたわけではない。

けれど、同族嫌悪と評して雪ノ下さんを徹底して嫌悪した挙句、結局それは醜い自分に対する自己嫌悪でしかなかつたのだ。

情けない。結局他人に見られ、他人に見せた俺は『比企谷八幡』であつて『俺』ではなかつたのだ。

そんなことにも気付けない自分が苛立たしくて仕方ない。

仮面の下の俺は他者からの評価に疎いのだろう。

分かりやすい評価なら問題ないのだ。

雪ノ下雪乃は俺に明確な嫌悪を示し、

葉山隼人には面と向かって嫌いと言われ、
雪ノ下陽乃には面白と言われ、

比企谷小町にはどこまでいっても俺の味方だと宣言された。

——だが、彼女は？

『俺』を知つてもなお離れようとせず、いつも笑顔で俺に接する彼女はどうかんだ？
一度間違えた。

なら、今の俺が認識している由比ヶ浜結衣からの評価も間違えているかもしれない。
故に、これはきつと俺の自己満足だ。

分からないから知りたい。知って安心したい。知らないことで怯えたくない。
そんな傲慢から生まれた、おぞましい自己保身だ。

帰り道の電車の中は当然のように人でごった返していた。

それでもあまり圧迫感を感じないのは行きと同じようにヒッキーがあたしを庇う形

で立っていてくれるからだ。

けど、ヒツキーは花火が終わってから……ううん、ちゃんとと言うなら陽乃さんのところから戻って来てからずっと上の空。

学校でのヒツキーを知ってる人なら後ずさりしそうな濁った目のまま窓の外を眺めている。

こんなにぼーっとしているヒツキーは珍しい。

というか、こんなヒツキーを見るのは林間学校のカレー作りの時に話しかけに行った時だけ。

普段のヒツキーは——教室でも部室でも——ずっと気を張っていてこんな隙だらけの姿を見せることはまずない。

だからこそ、あたしが追い出された後のヒツキーと陽乃さんの間に交わされた会話が凄く気になる。

「ヒツキー？」

「……」

意を決して彼の名前を呼ぶけど反応はない。

相変わらず虚ろな瞳で窓の外に流れる景色を眺めている。

「……ヒツキー？」

二度目の呼びかけ。

ようやく届いたあたしの声にヒツキーはびくりと肩を震わせた。

「つと、すまん。考え事してた。」

何かあったか？」

それを聞きたいのはこつちだよ、ヒツキー。

「ううん、なんかぼーつとしてたから大丈夫かなって思っただけ。」

「あー、大丈夫だ。」

ちよつと色々な……。」

やはりヒツキーは歯切れの悪い言葉を返してくる。

「……あれだ、少し反省と後悔してた。」

そのまま無言でじとじとした目をヒツキーに向けていると、バツが悪そうに頭をかき

ながらポツリポツリと話し始めた。

「反省と後悔？」

「ああ、雪ノ下さんのことを誤解してた。」

観察眼は結構頑張つて養つたつもりだったんだがな。」

聞き返すと、ヒツキーは少し悔しそうに足元に視線を向けながら言う。

誤解つてどうということなんだろ？

側から見て、少なくともあたしから見てヒツキーはあまり陽乃さんのことが好きじゃないように見えた。

それを誤解ってことは、陽乃さんのことが好きになった、ってことなのかな？
続けてその質問をぶつけようとして、

「ねえ、それってー」

と口にしたその時、事務的な車掌さんの声があたしの最寄駅の名前を呼んだ。

「お前、ここだよ。」

「あつ、うん……」

聞きたいことがあつたけど、時間切れなら仕方ない。

この後電話で……するよな話じゃないし、どうしようかなあ、と考えながら駅に降りる。

振り返って電車の中にいるはずのヒツキーに手を振ろうとしてー

「うわっ！」

閉まった電車の扉とあたしの間にヒツキーが立っていた。

「うわってなんだよ……」

さすがに傷つくぞ、俺も。」

思わず出た声に彼が不満そうに文句を言う。

「ご、ごめん。まさか降りてきてるとは思わなくて。というか、大丈夫なの？」

ヒツキーの最寄駅とあたしの最寄駅は結構離れてる。

あたしの家からヒツキーの家歩いて帰るには距離があるし、ここで降りたらヒツキーが帰れるのかなり遅くなるんだけど……。

「まだ話の途中だったろ。」

それにいい時間だから送ってくわ。」

照れているのか、ヒツキーはぷいっとそっぽを向きながらぶつきらぼうに言う。

そんな彼の姿にあたしは思わず吹き出してしまう。

「ぶっ、なにそれ。」

「いや、なんで笑うんだよ。」

まあ嫌って言うなら別に構わんが。」

「う、ううん！一緒に帰ろ！」

胡乱げな視線をぶつけてくる彼を慌てて止める。

ヒツキーが送ってくれるとか嫌なわけないじゃん。

「……へいへい、ならさっさと行くぞ。」

ヒツキーはもう一度じとつとした目であたしを一瞥すると、改札の方へ歩き出そうと

して……ピタリと足を止めた。

彼はそのまま振り返ってー

「後な、さっきの質問の返答だが、雪ノ下さんは今でも嫌いだぞ。

むしろ好きか嫌いかと聞かれたら大嫌いだ。」

と、言い放った。

「へ？」

唐突な発言に間拔けな声が漏れてしまう。

そんなあたしにヒツキーはバツが悪そうに頭をかきながら続ける。

「さっき言いかけてたのは俺が雪ノ下さんを好きになったのかっていう質問だろ。

その返答だ。」

ヒツキーは懇切丁寧に説明してくれるけど、問題はそこじゃない。

「あたしの考えてること、分かるの？」

あたしの質問にヒツキーは大きくため息をついて答える。

「……はあ、そんなの分かるわけないだろ。」

ただの予想だ。嘘だったとはいえ、伊達にお前と一年近く過ごしてないからな。」

あ、そっか。

あたしがちゃんとヒツキーを見れるようになったのは最近だけど、ヒツキーは一年生

の頃からずっとあたしを見てくれてたんだ。

「そっか、見ててくれてるんだ……。えへへ」

それを自覚すると、なんとなく頬が緩んでしまう。

「おい、なんで急に笑いだすんだよ。」

一方、ヒッキーは呆れた表情でこつちを見て、

「……というか、お前も相当雪ノ下さんのこと嫌いだろ。」

と、一言。

「うえ!!？」

……いや、そのー、嫌いというか、苦手、かなあ……」

予想外の返しにしどろもどろになりながら言う。

「それ女子言葉的には同義だろ。」

「だ、だよね……」

嫌い、というよりは苦手、もつと言えば怖い。

それがあたしの陽乃さんへの印象だ。

まだ2回しか会ったことないけど、なんというか、底が見えない。

あの、素顔を見せずにつつとニコニコと笑ってる感じは前のヒッキーと似てる、とい

えばそうなんだけど……。

なんか違うんだよね。

ヒッキーとはやりたいことが違うって言うか、何を見てるのか分からないって言うか……。

とにかく、よく分かんなくて、それがすごく怖い。

「あー、すまん。」

聞くべきことじゃなかったな。」

「ううん、大丈夫。」

ちよつと考え込んじゃってただけ。」

「……そうか。」

まあさつきも言ったが、ああいう輩には近づかないのが一番だ。

ほれ、行くぞ。」

言つて、ヒッキーはそのまま改札を出て行く。

慌ててその背中を追いかけると、彼は迷うことなくあたしの家へ続く道に足向け
る。

「こつちだったよな?」

「うん!」

覚えててくれたんだ。」

実はヒツキーがこうして送ってくれるのは今日が二度目だったりする。

一回目は一年前の今日、去年の花火大会の時だ。

一年経つてもあの時のことを覚えててくれてたことが少し嬉しい。

「二応、な。」

どこか照れ臭そうにヒツキーはそう言うと、プイツとそっぽを向いてさっさと歩き出してしまふ。

普段のヒツキーなら絶対にしないその仕草に、また新しいヒツキーが見れたな、と頬が緩むのを感じる。

彼が全てを打ち明けてくれてからひと月と少し、最初はそのギャップに戸惑うことも多かったけど、今では見たことない彼を見るのが楽しいって感じてる。

でも、実際のところ、ヒツキーはあんまり変わってなかったりする。

変わったところといえば、

目が死んでることとか、ノリが悪くなったこと、そもそもあんまり喋らなくなったこと、なのに口を開けば小町ちゃんのことばかり話してること、あたしへの対応が雑になつてること……。

あれ、挙げてみると結構多いかも。

けど、根本的にはヒツキーなんだな、って感じることもある。

基本何でもできるし、気を使ってくれるし、シスコンを除けば話題も多いし、何よりすつごく優しいし……。

だから、きつとヒツキーはみんなの理想の“比企谷八幡”を演じなくてもいいんじゃないかな、つてたまに思う。

たしかに今ほど人気でも、友達が多くなるわけでもないけど、そのヒツキーの魅力を分かつて受け入れてくれる人はきつといる。

あたしやゆきの人もそうだもん。

……だけど、そんなこと思ってるくせにこのままでいいかな、なんて思ってる自分もいる。

ヒツキーが自分を隠さなくなっても優美子とか戸部つちとか隼人君は彼を受け入れて、今の彼にあつたまた別のグループができるんだと思う。

でも、そうなつたら今数歩先を歩いている彼は、ぶっきらぼうで寡黙で、目立たなくて、とつても優しい彼は、あたしだけが知ってるヒツキーじゃなくなっちゃう。

あたしはみんなが知らないヒツキーを独占できてるつていうこの状況がなんとなく嬉しくて、続いて欲しいつて思ってるんだ。

「由比ヶ浜。」

だから、

「少し話したいことがある。」

時間、大丈夫か？」

なんで『今』なの？

じとつとした熱気のせいで浴衣が肌に張り付く。

本来ならもう家に着いて、エアコンの効いた部屋の中で今日の楽しかった出来事を思い返しているはずだ。

でも、今あたしがいるのは家の近くの公園にあるベンチ。

向かいの道のT字路を右に折れたらすぐにあたしの家だ。

ヒツキーの誘いを断れなかったあたしは、その「話したいこと」を聞くためにこの公園に入った。

「ん。」

「ありがと。」

蒸し暑い夏の夜、彼がが気を利かせて買ってきてくれた飲み物を受け取る。

受け取った天然水のペットボトルはすぐその自販機で売られてたものなのにもう汗をかいていた。

プシュ、という小気味いい音とともに隣に座った彼が黒と黄色のハイカラな缶の封を開ける。

「……」

「……」

ちよつとの間の沈黙。

ヒツキーは無言で缶を傾け、あたしは冷たいペットボトルを両手で包んでぼーつと眺める。

なんとなく、彼の話の内容を理解しながら。

「とりあえずお前に嘘ついたこと、謝る。」

口火を切ったのはヒツキーだ。

「電車の中で考えてたのは反省と後悔と……昔のことだ。」

手にした黄色と黒の缶をじっと見つめながら彼は続ける。

「あんまり思い出さないようにしてるんだが、案の定あの人に掘り返された。」

あの人が、っていうのは間違いなく陽乃さんのことだよな。

「昔のこと？」

聞き返すと、ヒツキーは覚悟を決めたように大きく息を吐く。

「ふう……」

俺が『みんなの比企谷八幡』になった時のことだ。

聞いてくれるか？」

……やっぱり、そうだよな。

忘れるわけがない、これはあたしの誕生日にヒツキーと交わした約束だ。

いつかあたしが選ぶためにヒツキーが嘘をつく理由を話してくれるっていう大切な約束。

なのに、

聞きたくないって思ってるあたしがいる。

だって、この約束はヒツキーがあたしのそばにいてくれるという楔くわでもあるから。

それでも、彼の真剣な面持ちに押されて、軽く頷いてしまう。

それを合図にヒツキーは口を開いた。

「昔もな、そこそこ友達はいんだ。

少なくとも俺は友達だと思ってる奴らが。

それで、あれは小5だったか。その友達がイジメに遭ってるのに気づいたんだ。」

ヒツキーはあたしを見ながら淡々と語る。

でも、その目はあたしを通して別の何かを見ているみたいだ。

「まあそこそこな正義感があつたバカな俺は友達をいじめてる奴らに言ったんだ、
んなことはやめろ”って。
その後は分かるよな？」

「……うん。」

標的の変更。

何度かそういうのは目にしたことがある。

周りに流されるばかりだったあたしはそれを遠くから眺めることしかできなかつたけど、ヒツキーは手を差し伸べることができたんだ。

そして、ヒツキーは留美ちゃんと同じような目に遭つてたんだ。

「テンプレは大体受けたな。

上履きは残ってる方が珍しいし、鞆の中から見覚えのない女子の体操服。

机の上には落書き、ああ、花瓶が置かれて時もあったな。

椅子なんて無いに等しいし、机の中身はなんらかの液体か虫の死骸だらけ。

……つと、すまん、今は関係ないな。」

イジメの内容を一つ一つ挙げていくヒツキーはそんなに辛そうじゃない。

むしろ指を一本一本折り曲げて数えながら語る彼は昔を懐かしんでるのかもしれない。

「まあ正直その程度は何ともなかった。

それよりも当時のバカな俺は自分にスケープゴートしたことで、友達が助かったならそれでいいか、くらいに考えたんだ。」

偽善もいいところだな、とヒツキーは自嘲的に笑う。

「一月後くらいだったか、決定的な出来事があったのは。」

そして、彼の笑みが歪む。

「階段から突き落とされたんだ。

気絶はしたが、打ち身程度で済んだ分不幸中の幸いだったな。

問題だったのは……」

最後まで言ってくれなくても分かる。

分かっってしまう。

「落ちる寸前に見えた光景は、ニヤニヤ笑いながら腕を突き出す『友達』だったってことだ。」

予想通りの結末に息がつまる。

そんなのあんまりじゃん。

ヒツキーが勇気を出して、きつとあたしにはできないことをやってのけたのに、その結果がこの仕打ちだなんて。

「……それが理由？」

声を絞り出す。

『これで終わりであつてくれ』というあたしの身勝手な願望が含まれたその言葉に、しかし彼は首を振る。

「まさか。さすがにこれは結構こたえたが、これで終わりなら俺は他人に怯えるただのぼっちになつてたはずだ。

間違つても今みたいにはならん。」

「そう……だよね。」

「……続けるぞ。」

一呼吸置いてからヒツキーが落ち着いた声で再び口を開く。

「当然、落とされた俺は放置されてたわけだが、目が覚めたら女の子が一人、そばに立つてたんだ。」

「女の子？」

「ああ。」

そう言つて頷くヒツキーは見たことないほど優しいほほ笑みを浮かべていて、

今にも消えてしまいそうなくらいおぼろげだった。
そんな彼に

「……まるで夢を見てるみたい

と、そんな場違いな感想を覚えた。

彼がそつと夏の夜空を見上げる。

花火大会が行われた今日の空は雲ひとつない快晴だ。

都会の真ん中に位置するこの公園からでもまん丸とした月は美しく輝いている。

「別にそいつは俺を介抱するわけでもなく、ただ近くに立ってただけだったんだ。

それで、目が覚めた俺になんて言ったと思う？」

「友達になろうよ」だぜ？」

言つて、心底楽しそうに笑うヒッキーはそれでも消えてしまいそうで、

「もちろん俺は断つたよ。」

今しがたその友達とやたらに裏切られたところだしな。」

あたしは

「でも、そいつは妙に俺につきまとつてな。

結局やつと離れたのは俺が家に着いてからだったんだ。」

聞きたくない、

「俺は家族にイジメのことは隠してたからな、次の日も嫌々学校へ行つた。

その日ももちろん、もはや日常になった嫌がらせを受けて、それを受け流しつつ下校時刻になったんだ。

それから、学校を出て帰り道に着いたら、昨日のそいつが俺を待ってた。」
聞きたくない、

「その時も俺は邪険にあいつを扱ってたんだ。

友達なんてろくなもんじゃないと、人間なんて簡単に裏切るんだって、ようやくその思考に俺は行き着いたからな。

でも、あいつは本当にしつこかった。

ずっと俺を待ち伏せして、楽しそうに笑いながら話しかけてきて、結局俺が根負けした。」

だって、これ以上聞いたら、

「それから、あいつと俺の奇妙な関係が始まった。

相変わらずイジメられてる俺とずっと笑顔で、たまにイジメの現場から助けてくれるあいつ。」

手を伸ばせば届く距離にいるはずのヒッキーが遠くに行ってしまうそうで。

「思えばずっと助けられてた。

あの時に自暴自棄にならなかつたのは全部あいつのお陰で、そのくせ俺はあいつに何もしてやれなかつた。」

月を見上げる彼は今にも空に消えてしまいうそで。

「イジメられてる俺とこんな関係を持つたらあいつがどんなことになってるかなんて考えたらすぐ分かることだったのに。」

実際、あいつと会つてたのは帰り道か休日に互いの家に遊びに行くのだけで、校内で話すことはなかつたしな。」

これ以上聞いたら、

「そんな関係が一年くらい続いた。」

そして――」

あたしは選ばなきやいけなくなっちゃう。

~~~~~♪

場の雰囲気こそぐわなない間の抜けた音楽が流れた。

「あ、あたしの携帯だ。」

「ごめん、出るね。」

逃げ出すように携帯を耳に当たると、ママの声が聞こえてくる。

帰りの遅いあたしを心配してくれたようだ。

今近くの公園でヒッキーと話してること伝えたら、ママは遅くなりすぎないよ  
うにね、と言つて電話を切った。

「……由比ヶ浜。」

隣に座るヒッキーがあたしの名前を呼ぶ。

話の続き。

彼の理由。

あたしが聞くべき話。

その責任から——

「ご、ごめん、ママが早く帰って来いって。」

あたしは逃げ出した。

「……そうか。」

物憂げに彼は俯く。

ベンチから立ち上がったあたしはせめて何かを言うべきだと思つて、

「続きはゆきのんもいる時にね？」

大切な友人のせいにした。

そのままベンチに座るヒツキーを背中に、あたしは公園から逃げ出す。

T字路の角を曲がって、彼が見えなくなる寸前にちらりと後ろを振り返って……

怒ってるわけでも、

困ってるわけでも、

泣いてるわけでも、

悲しんでるわけでもない、

そんな見たことのない表情のベンチに座ったままのヒツキーと目があつて

——ああ、失望してるんだ

と、理解してしまった。

すぐに振り返って、街灯だけが照らす道を歩き出す。

彼が買ってくれた水はとつくにぬるくなっている。

家はもう目の前だ。

玄関のドアを開ければ、ママが笑顔で迎えてくれるはずだ。

なのに、あたしは多分笑えない。

——あたし、最低だ。

せっかくヒッキーが話してくれたのに、あたしは逃げ出した。

彼の話が終われば次はあたしの番だから。

その答えを出すのが怖かったから。

今の関係が変わるのを恐れたから。

今のあたしはぬるま湯に浸かって、殻を閉ざして、変化することを恐れてる。

ヒッキーは嘘をつかなかった。

いつか話すと言ってくれて、今この時に話してくれた。

あたしは嘘をついた。

いつか理由を教えてくれたら、選ぶって言ったのに。

ヒッキーの決意をあたしは拒んで、きっと彼を傷つけた。

あまつさえ親友を理由にして。

——なんだ、一番の嘘つきはあたしじゃん。

きっと報いは受ける。

この夏の夜の夢のような出来事を受け入れなかった罰はいつか下される。



その時、絶対あたしは後悔する。

今日逃げ出したことを。

だからあたしは、去り際に見えたヒツキーのあの表情が目に焼き付いて離れないんだ。

e p . 2 3 どうしても比企谷八幡は舞台に立ちたくない

夕暮れの廊下。

最終下校時刻目前の今、一年生の教室が並ぶ廊下に人影はない。

無論、教室や廊下の明かりも消されており、唯一の光源はゆつくりと傾いて行く夕陽だけだ。

俺が入学してから3ヶ月、実際のところ事故のせいで2ヶ月足らずしか経っていない  
高校生活は順風満帆と言って差し支えないだろう。

1ヶ月のブランクを埋めるために奔走し、俺は何かサッカー部の葉山隼人という人  
物を中心としたグループに潜り込むことに成功した。

見た目もノリも影響力も間違いなくスクールカーストトップのグループだ。

俺の嘘がバレた様子もなく、このまま穏やかな高校生活を送れば良いのだが、なぜ  
か今日は当の葉山に呼び出されたのだ。

グラウンドから運動部員達の声が薄っすら聞こえてくる。

初夏の西日がどうしようもなくうつとおしい。

ジトつとした汗が首筋を濡らすのが嫌で、俺は窓の間の柱影に身を隠す。そして微かに聞こえる学生の喧騒をBGMに俺はそつと目を閉じた。

——不意に、無秩序の音の中に規則的な足音がこちらへ向かってくる。

待ち人來たり、と目を開けると10番の赤ビブスを着た葉山が夕日の中に立っていた。

『やあ、待たせて悪かったね。』

呼吸をするように爽やかな笑顔を浮かべながら彼は言う。

『気にすんな。』

それで、話ってなんだ？』

俺も同様に人気者の仮面を被ろうと表情を動かして——

『そういうの、やめにしないか？』

困ったように肩をすくめながら、しかしそれでもはつきりとした声で葉山隼人は“比企谷八幡”を看破した。

……バレてるのか。

呆気にとられたのは一瞬だけで、直ぐに俺の頭はこの状況の処理へ向けて動き出す。見れば、あいつは俺の反応を待つかのように黙っている。

いつからだ？ どうしてバレた？ どうしてバレたことに気づけなかった？ このまま取り繕うべきか？ 潔く認めるべきか？

ああでも無いこうでも無いと多くの考えが浮かんでは泡のように消えてゆく。

いつのまにかグラウンドから運動部員の声は聞こえなくなっていた。

当然のように校舎内も耳が痛いほどの静寂に包まれている。

変化があるのはゆっくり沈んで行く西日が作る影の角度だけ。

柱の陰に立つ俺と夕日に照らされる彼の場所の間には影の境界線が明確に刻まれ、夕日が沈んで行くにつれて影の領域が大きくなる。

黙りこくる俺に対して、葉山隼人はその境界線に近づくように一歩踏み出し、

『そんなもの仮面なくたって俺たちなら友達になれるよ。』

爽やかな笑みを浮かべ、あいつは一番の爆弾を躊躇なく投下した。

途端にそれまで考えていたことが吹き飛ぶ。

苦悩も焦燥も恥辱も全てかき消え、唯一残ったのは怒りの感情とそれにそぐわぬ歪んだ口角だけだった。

その感情に身を任せ、口を開く。

『お前、何言ってるんだよ。』

ああ、きつと今自分は酷く醜い笑みを浮かべているのだろう。

しかし葉山はそんな俺に怯むことなく口を開く。

『だから—— 『俺がこうまでしてお前と近づいてる理由、分かってんのか？』  
葉山、お前は凄いやつだよ。』

俺が苦勞して手に入れたものを持っていて、それを自然に使うことができる。  
クラススのヒーロー像を集めたようなやつで、誰からも好かれる人気者だ。

——そして、 “みんな仲良く” なんてくだらない理想を掲げる愚か者だ。

『え?』

『お前みたいなやつと友達になりたくないし心底思ったからだ。』

偽りのない本心。

下手をすればこいつと付き合い始めてから初めて出した本心かもしれない。

『なあ、葉山。俺はお前みたいなやつのことを知ってるぞ。』

そうだ、俺は知っている。

なるべくして人気者になったような人物を。

人の好感情に囲まれて、それゆえに悪感情に疎い人間を。

——何もかもを救おうとして、結局あいつを追い詰めた人間を。

『みんな仲良く、なんて馬鹿げた理想を掲げて孤立した者を引き入れようとした。』

『!』

『そのくせそいつは周りにさらに迫害された。』

『その時になってようやく、"こんなつもりじゃなかったんだ"、と自分の間違いに気づくんだ。』

葉山の顔が歪む。

凶星だったのか、そういう体験を既に行っているらしい。

『安心しろ、葉山。』

お前の周りから人はいなくなならない。ずっと万人の好感情を買い続けて、その分の悪意をごく一部に押し付けるだけだ。』

行き過ぎた善意は気づかぬうちに悪意へと塗り替えられる。

むしろ本人の意思とは関係なく牙を剥くそれは単純な悪意より悪質かもしれない。

夕日はその姿をほとんど消してしまった。

気づけば葉山と俺が立っていた間にあつた影の境界線はほとんどおぼろげだ。

今度は俺が一步葉山に近づく。

『そして何も学んでいないお前は、今回も同じことを繰り返す。』

いつか、いや近いうちにお前一人では解決できない問題が出てきて、そのまま今のグ  
ループはおじやんだ。』

その時も葉山は一人にならないだろう。

悪者は周囲であくまで葉山隼人は被害者だ。

理由は簡単、葉山隼人は“人気者”だから。

先ほどの笑顔はどこへ行ったのか、葉山は険しい表情で俺を睨みつける。

『……君に、何が分かる。』

『分かってないのはお前だ、葉山。』

何も分かってなくて、何も学んでないから俺と友達になれるなんて戯言を吐ける。』

『っ！』

固く拳を握りしめたまま葉山は俯く。

『なら……なら、俺はどうすればいいんだ。』

それは俺に向けられた問いではないのだろう。

実際、それはまるで何かを悔やむように絞り出された言葉に聞こえる。



しかし、そうと分かっても俺は口を開いた。

『簡単な話だ、俺を使えばいい。』

『え?』

とぼけた表情で葉山の顔が上がる。

『グループの不和、不仲。すれ違いは俺がなんとかしてやる。』

関係が崩れないように、壊れないように、続くように今の環境を俺が整えてやる。

だからお前は「葉山隼人」としてそこにいればいい。

代わりにそのグループに俺の立ち位置を作れ。』

俺が葉山のグループを存続させる代わりに、葉山はその名前を俺に使わせる。

友達なんて馬鹿げた関係ではなく、利害の一致した関係性。

あくまで対等な関係として、俺は葉山に契約を持ちかけた。

『……それは、脅してるのか?』

『まさか。』

お前が拒絶すれば俺は別のグループに移動してお前のグループが崩壊して行くのを傍から楽しませてもらうだけだ。』

——ああ、しかしこれはきつと悪魔の契約なのだろう。

葉山がグループに俺を組み込めば俺は言った通り立ち回れる自信はある。

しかし、そうすれば葉山は何も変わらない。

他人の悪意に鈍感で、他人の善意を信じて、結局いつか俺が離れた時に同じ過ちを繰り返すだろう。

そして、俺も変わらない。

仮面を被ったまま、嘘をつき続けて偽物の自分を演じ続けるただの道化になるだけだろう。

つまるところ、この約定はいつかお互いがぶち当たる行き止まりを先延ばしするだけでしかない。

それを分かった上で俺はこの話を持ちかけた。

いつか過去を清算できる日が来たとしても、それでも俺は嘘これでいいをつくど決めたのだから。

行き着く先が行き止まりでどこにも行けないとしても、俺はこれで構わないのだ。

一方、葉山がそれを理解したのかは分からない。  
しかし長い沈黙の後――

『分かった、比企谷の話に乗ろう。』

と、この提案を承諾した。

『なら、明日からも同じように立ち回ってくれよ。』

話は終わりだ、俺は帰るぞ。』

言つて、俺はさっさと葉山に背を向けて歩みを進める。

一歩、二歩と進み――

『比企谷、』

葉山が俺の名前を呼ぶ。

『悪いが君とは友達になれそうにない。

君のそのやり方は、嫌いだ。』

後ろを向く俺にあいつの顔は見えない。

だが、葉山がどんな表情でその言葉を紡いだのかは容易に想像できた。

『……お互い様だ。』

今度こそ俺は歩き出す。

気づかないうちに日は完全に沈んでしまっていた。

廊下を照らすのは校内に設置された頼りない街灯の光だけ。

確かに存在した陽と影の境界線はなくなり、葉山と俺が立っていた廊下は影に包まれていた。

\*\*\*

柄にもなく昔の出来事を思い出す。

いつか崩れる関係、どこにも行けない契約。

そんなことを思い出したのは——

「いつか君とはこうなると思っていたよ。」

言つて、腕時計を外す葉山と、

「今なら引き返せるぞ、葉山。」

同じように腕時計を外し、軽く腕を振る俺がいるからだろう。

「譲れないのはお互い様だろう。」

「まったくだ。」

最後の会話を終え、俺は葉山の顔を見据えながら息を吐く。

そして腕を振り上げ——

\*\*\*

「いやー、凄かったね。」

二人ともすっごく本気だったもん。」

隣を歩く相模がキヤイキヤイとはしゃいでいる。

こいつと俺が向かう先は文化祭実行委員会が行われる会議室だ。

「まあ……そう、だな。」

1クラスにつき男女1人ずつが選出される文化祭実行委員だが、早々に決まった女子  
枠の相模と違い男子枠は中々決まらなかった。

最終的に葉山と俺がその1枠を取り合うことになり、厳正なるじゃんけんの上、俺が

実行委員となったのだ。

結局のところ、形式上は『相模が決まったあとに男子枠を葉山と比企谷が取り合った』という事実が相模にとっては嬉しいのだろう。

実際は海老名監督のBLミュージカルのダブル主人公に葉山と俺が選出予定という話を聞いて俺たちが目の色を変えただけなのだが。

絶対そんな舞台には立ちたくない……。

そんな裏事情など知らない相模はどこか嬉しそうに俺の隣を歩いている。

相模南、俺のクラスのナンバー2カーストグループのリーダー的存在。

自分をよく見せたい、他者から羨まされたい、などと自己顕示欲がよく見られるごくごく一般的な女子高生だ。

普段から関わることはほとんどないが、トップカーストの俺や葉山の前では猫を被っているので実行委員として利用するのには困らないだろう。

横目で彼女を盗み見ながらそんな最低なことを考えている内に会議室にたどり着く。

基本的に文実はクラスであり目立たない部類の連中が選ばれることが多い。

目立つ部類はむしろ表舞台に力を入れることが多く、俺も海老名さんの一件がなければそっちにいったつもりだったのだ。

がらりと扉を開ける。

中には既に十数人の生徒が集まり、談笑していた。

当然のように視線が俺に向けられる。

さつきも言ったように文実は目立たない部類の輩が集まるのだ。

その中に俺が入るなんて連中からしたら意外もいいところだろう。

そんな視線に俺はテンプレ通りの苦笑を浮かべながら中に入り、2—Fと書かれたプ

レートの置かれた席に着く。

「ねえねえ、今日って何するんかな?」

当然、俺の隣に座った相模が興奮気味に話しかけてくる。

「今日は顔合わせ程度じゃないかな。」

後は委員長みたいな重要な役職決めとかな。」

「比企谷君、委員長やらないの?」

比企谷君が委員長ならみんなめっちゃ頑張れると思うよ!」

ふむ、確かにその考え方もありだが、実際のところ委員長表になつて文化祭方を成功させ

る努力よりも、クラス表の出し物台に力を注いだほうが結果的に得られる名声はコスパ的に

上だったりする。



そもそも、そうでなかったなら俺は1年生から生徒会長になってただろう。

「それはどうだろうな。誰が委員長でもみんな頑張るだろうし。

俺も今のところやるつもりはないな。

クラスの方も——」

しかし、最後まで言い終わることないままに言葉が途切れる。

俺が会議室に入った時と同じような、いやそれ以上の視線が入り口へ向けられていく。

それと同時に皆一様に口を閉ざしたのだ。

そんな凍りついた部屋に堂々と入ってきたのは——

当然、雪ノ下雪乃だった。

周りから、あの雪ノ下さんが？とヒソヒソ話が聞こえてくる。

もちろんそれは彼女にも聞こえているであろうに、当の本人は気にするそぶりも見せない。

雪ノ下は一瞬、自分の席を探そうとしたのか教室を見渡し……俺と目があつた。

『どうして貴方がここに？』

氷のように冷たい瞳が訝しげに俺を貫く。

『成り行きだ。』

負けじと睨み返すと意図が伝わったのか雪ノ下は小さくため息をつく。今度こそ俺から視線を外して自分の席に向かった。

それにしても、あいつがこういつた催し事の運営に参加するとは思わなかったな。そもそも文化祭の雰囲気自体が苦手そうだし。

「……なんか意外。」

不意に、俺たちの冷戦に気づかなかった相模が小さく呟く。

「雪ノ下さんってあんまりこういうのに興味ないって思ってた。」

やるからには委員長やるんかな？」

俺と同じ疑問を持った彼女の一言。

そんな小さな呟きにも関わらず俺は余計なことを思い出し……

「……さあな。」

『俺』らしくないぶつきらぼうな返事を漏らした。

## e p. 2 4 そうして彼と彼女の文化祭が幕を開ける

ガラリと扉を開ける。

委員会が開かれた会議室とは違い、部室の中にいるのは2人の女子生徒のみ。

「あ、ヒツキー、やつはろー!」

「遅かったわね。」

今日はもう来ないと思って安心していたのだけれど。」

雪ノ下と由比ヶ浜、二人の相変わらざるの反応に苦笑しながら弁明する。

「安心してたところ悪いな。」

城廻先輩に捕まっていたんだ。」

会議終了が30〜40分前だから丸々その時間だけ俺は先輩に捕まっていたのだ。

というのも、文実の委員長決めの件である。

生徒会と各クラスから選考された文化祭実行委員、監督の教師を含めた今日の会議は

予想通り役職決めだった。

まずは委員長の選出だが、そもそもこれが難航した。

立候補を募っても誰も手を挙げない。

結局、耐えかねた教師の厚木が雪ノ下を推し、一方生徒会長である城廻先輩が俺を推薦したのだ。

しかし、意外というかやはりというか、雪ノ下は推薦をばつさり切り捨て、もちろん元々やる気のない俺も困ったように笑っていた。

そんな時に委員長立候補として手を挙げたのが同じクラスの相模南だったのだ。

こう言うとなんか救世主じみているが、まあ……それはない。

いや、彼女に委員長が務まるかどうかと聞かれれば俺は可能だと答えるだろう。

そもそも雪ノ下や俺がオーバースペックなだけで、普通の生徒にだって務まるのが文実の委員長だ。

なのにこんな言い方をするのは、本人のやる気のせいである。

ノリで手を挙げちゃった、などと取り巻きに吹聴するような奴だ。

城廻会長が不安になって俺に副委員長を推してくるのも当然だろう。

「会長こ？」

副委員長の件についてかしら。」

「そういうことだ。」

あの人相手だと断りづらい。」

「断りづらいならなつてしまえばいいのに。」

副委員長に、と雪ノ下な意地悪そうに笑う。

「なりたくないってのは分かつてんだろ。」

仕事でもない限り平社員のもりだ。」

「というか、ヒッキー会長と知り合いだつたんだね。」

由比ヶ浜に尋ねられる。

「まあな。」

あの人の選挙の時にちよつとな。」

俺が同学年である一年生の票を取るために動いたのだ。

まあその後には書記になつてくれ、会計になつてくれ、としつこく迫られたのは嫌な思  
い出だが、それ以上に生徒会長への繋がりは必要だと思つたのだ。

「……。」

と、そこまで考えたところで二人の表情が微妙なことに気づく。  
というか明らかに疑念のこもつた視線を俺に飛ばしてきている。

そして――

「……………不正？」

「違うわ！」

半ば予想していた由比ヶ浜の質問をバツサリと切り捨てる。

「いや、現会長の名誉のために言うが不正はしてない。」

ハチマンウソツカナイ、ホント。

「疑われても仕方ない自分の普段の行いを省みなさい。」

どうせあなたのことだからあからさまな不正よりも法の抜け目を潜ったグレーなことをしたのでしょう？」

超が付くほど楽しそうな笑顔を浮かべながら雪ノ下が追い打ちをかけてくる。

「何の弁護にもなつてねえ……。」

そんなことよりも頼み、というか提案があるんだが。」

堂々巡りになりそうな話題をさっさと切り上げて俺は奉仕部に来る前に考えていたことを口にする。

「クラスの出し物だけじゃなくて文実もやることになったんだ。」

さすがに奉仕部までは手が回らん。

だから文化祭までは休部という形にしてくれないか？」

俺が参加する以上、文化祭そのものもクラスの出し物も成功させなければならぬ。

なら必然的にこの部活に割ける時間も減るだろう。

同じことを考えていたのか、雪ノ下も素直に首を縦に振る。

「ええ、私もそう思っていたわ。」

文化祭が終わるまで奉仕部の活動は休止ということにしましょう。

由比ヶ浜さんもいいかしら？」

「うん！」

「決まり、だな。」

そう言いながら鞆を持って立ち上がる。

暫くはこの部室ともお別れということだ。

もつとも、雪ノ下とは文実で由比ヶ浜とは普段の生活で嫌でも顔を合わせるのであまりやることは変わらないが。

と、そこまで考えたところで扉の前に誰かがいることに気づく。

一人ではない。なら葉山と戸部辺りか？

いや、あいつらなら扉の前でまごつくことなく入ってくるだろう。



コンコン、とノックの音が響く。

俺はそつと仮面を被り、

由比ヶ浜はちらりと雪ノ下に目をやる。

「ぶひひひ。」

そして、雪ノ下が一息入れた後に凜とした声で返事をした。

おずおずと扉が開き、3人の女子生徒が入ってくる。

先頭は文化祭実行委員会委員長、相模南だった。

\*\*\*\*

「……つまり、委員長の仕事を補佐すればいいのね？」

相模たちは奉仕部に由比ヶ浜や俺がいたことにひとしきりはしゃいだ後、依頼について話した。

雪ノ下がまとめた通り、その内容はあまりに無責任だった。

ノリで委員長になっちゃった、などと言っただけのことはある。

無責任に役職を引き受け、結局は他人頼りか。

そう思っているのは俺だけではない。

雪ノ下や由比ヶ浜も微妙な表情を浮かべている。

平塚先生の紹介でここに来た、とは言っていたがあの人も何考えてるんだ。

当然、雪ノ下は断るだろう。

とかこうかこういう輩があいつにとっては一番嫌いな人種のはずだ。

仮に俺が部長だとすればこの依頼の断り方に困るが、雪ノ下ならバツサリ切り捨てられるだろう。

そう思っただけで彼女に視線を向け——

『いつになったら、気づいてくれるのかな。』

不意にあの人の言葉を思い出した。

「ならー」

そして考えるより先に口が動いた。

「雪ノ下さんと俺が副委員長になって相模さんの手伝いをしたらいいんじゃないか？」  
「あ！それいいやん！」

でも副委員長つて一人だけじゃ無かったっけ？」

「慣例上一人になってるけど生徒手帳には男女一名ずつて書いてあるから大丈夫だ。」  
言いながらちらつと横に視線をやる。

二人とも驚いたように目を見開いて俺を見ている。

「ちよつと、比k「由比ヶ浜にはクラスの方で協力して貰えばいい。」

どうだ？」

制止の声を振り切つて俺は続ける。

確かにこここの部長は雪ノ下だが、相模南にとつて発言力があるのは同じクラスの人気者である俺だ。

「うん！ありがとう。」

それじゃあ雪ノ下さんも結衣ちゃんもよろしくね！」

言つて、相模はさっさと立ち上がり取り巻きと共に部室から出て行く。

あまりに強引な決め方だったが相模にとつては好条件も良いところだろう。

もしも不信感を抱かれたとしても、それくらい『比企谷八幡』ならどうとでもなる。

問題は――

「比企谷君。」

隣で氷より冷たい怒りのオーラを纏う雪ノ下だ。

「どういふことかしら。」

怒気たつぷりの声色で聞いてくる、というよりは詰問してくる雪ノ下と彼女と俺の間

でおろおろしている由比ヶ浜。

二人を見据えながら口を開く。

「勝手に話を進めたのは悪いと思つてる。すまん。」

一息入れた後、彼女の鋭い視線を正面から見据え、

「だけどな、雪ノ下。お前、この依頼を受けるつもりだったろ。」

と言いつ放った。

「つ!?何を根拠に――」  
「違うのか?」

見透かされたような発言に一瞬言葉が詰まらせた彼女に続けて問いかける。

「……私一人でもやるつもりだったわ。」

「奉仕部は暫く休部って話になっただろ。」

「なら私個人の範疇でやればいい。」

あなたたちに迷惑はかけないわ。」

「それは詭弁だ、雪ノ下。」

相模たちは「奉仕部」に依頼を持つて来たのであつて雪ノ下雪乃に頼みに来たわけじゃない。

「だったら奉仕部として依頼を受けるべきなんじゃないか？」

「俺はあくまで冷静に返すが、彼女はそれでも腹の虫が収まらないようだ。」

正直これに関しては俺が悪いので仕方ないが。」

「それでも俺が強引に決めたのは謝る。」

由比ヶ浜も、何も確認取らずにすまなかつた。」

「ここまで口を開かなかつた由比ヶ浜が話を振られてビクツと反応する。」

「う、ううん。大丈夫。」

「ヒッキーがそれでいいならあたしもそれでいい、かな。」

「……もういいわ。」

どうせ受けようとしていたことは事実なのだし。」

由比ヶ浜の歯切れの悪い返事を聞いて雪ノ下も観念したように認める。

「けれどー」

だが、雪ノ下雪乃の追求が止むことはない。

「依頼人に嘘をつくのはいただけないわね。

どうするつもり？」

「え？嘘ついたの!？」

彼女の発言に由比ヶ浜も反応する。

というか、さすが雪ノ下。バレてたのかよ……。

「通例、なんて言っていたけれど副委員長は明確に一人よ。

男女一名ずつなんて書いてないわ。」

言いながら雪ノ下は生徒手帳を取り出して該当のページを開き、それを覗き込むように由比ヶ浜が彼女の後ろに回り込む。

「え、えつーと、何これ。」

役職生徒の……ノウメン？」

「それは罷免、と読むのよ。」

委員長や生徒会長を辞めさせることのできる信任投票がある、ということね。

由比ヶ浜さん、問題のページは反対よ。」

「うえ?! えつと……」

『生徒会は会長、副会長、会計、書記、庶務について、各委員会は委員長、副委員長について各一人ずつとする。』

……ほんとだ。」

由比ヶ浜が生徒手帳のルールを読み上げる。

読み慣れていないのでたどたどしい音読だが、むしろ読み慣れていない方が自然だ。

普通は生徒手帳なんて入学式の日にもらってから開くことなくカラオケとかの割引に使うくらいだろう。

だから、相模にもこの嘘は当然のように通じたのだ。

もつとも、普通とは言い難い雪ノ下はこんな隅まで生徒手帳を読み込んでいたみたいだが。

「実際そうなんだが、これに関しては何とかかなると思う。」

弁明するように俺は口を開く。

「今回だけ特例にして貰えば良い。」

元々雪ノ下は厚木に、俺は城廻会長に委員長推薦を受けてるんだ。

その二人が副委員長になるって言うなら誰も文句を言わないだろ。

それにこの依頼を持って来させた平塚先生だって協力的なはずだしな。」

雪ノ下雪乃と比企谷八幡はなんだかんだ言ってこの学校のビッグネームなのだ。

反感を買うどころかむしろ推奨されそうな気もする。

——ただ、一つだけ懸念があるが。

「そんなに上手くいくかしら?」

「上手くいかせるんだよ。」

俺が言い出したことだからな、明日の集まりまでにはこの話を通しておく。」

その懸念を飲み込んで俺は今度こそ立ち上がる。

そんなつまらないリスクを考える前にそもそもこの話を実現させるために動く方が大切だ。



「……そ。

なら後はあなたに任せるわ。」

どこか不機嫌そうに——十中八九今日の俺の態度のせいだが——雪ノ下も立ち上がって部室から出て行く準備をする。

「えつと、じゃあ明日から放課後ここに集まることはないってことだよね？」

由比ヶ浜がそれに合わせて最後の確認と言わんばかりに口を開いた。

「そうね。由比ヶ浜さんは一人で動いてもらうことになるけれど……。」

「ううんーそれは大丈夫。」

元々クラスの方は優美子達と頑張るぞ、って気合い入れてたから！

それよりもあたしがゆきのん達の方全然手伝えなさそうでごめんね。」

「そんなこと気にしなくていいわ。」

その男が勝手に割り振ったもの。

むしろ何かあれば遠慮なく比企谷君に仕事を押し付けなさい。」

しよんぼりと肩を落とす由比ヶ浜を雪ノ下が励ますように声をかける。

励ますにしても俺をダシに使うのはやめてほしいんだけどな……。

いや確かに正論なのだが。

「……ま、そういうことだ。」

何かあればすぐに声をかけてくれ。」

最後にその声をかけてから部室のドアを開ける。

「う、うん。」

また明日、ヒツキー。」

「さようなら。」

「おう。」

二人の声を背にしながら俺は家路についた。

\*\*\*

「そういえば比企谷が副委員長やるって本当なのか？」

次の日の昼休み、昼ごはんを食べながら不意に葉山が話題をふってくる。

昨日の今日だつてのに耳が早いやつだ。

「正確にはやるつもり、だな。」

立候補はしたがまだ確実にやるってわけじゃない。」

あの後すぐに平塚先生と城廻会長に二人で副委員長をやりたい、との旨を伝えるメー

ルを送った。

平塚先生からは二つ返事で了承。

一応他の先生に確認をとるがおそらく大丈夫だろう、と返信が来た。会長からは少し待ってほしいとの返信。

その辺の事務作業は生徒会の仕事らしく、前例のない二人の副委員長が通るかどうかわからないそう。

もつとも、本人は雪ノ下と俺が立候補したことにノリノリなので心配はなさそうだが。

「でもハチがやるって言って反対する奴なんかいないっしょ。」

なぜかつまらなさそうに携帯をいじりながら三浦が答える。

「そりやそうだべ。」

むしろハチがやってくれるなら今年の文化祭は成功間違いなしだべ！」

「そうだな。」

騒がしい戸部と対照的に静かに頷く大和。

「つーか姫奈、ハチが副委員長なるなら配役変えなきゃでしょ。」

「あ、そっか。」

そんな二人の反応を聞き流しながら三浦が顔を上げて海老名に声をかける。

「配役?」

「ああ、比企谷には言っていなかったな。

文実やるにしても脇役ぐらいでも比企谷にやって欲しいって姫奈の強い希望があったね。」

にこりと笑う葉山の配役は当然主人公だろう。

じゃんけんに負けたとは言え、俺にも多少の被害を与えてくるあたり、ただでは転ばない覚悟というやつだろう。

副委員長になったおかげでその配役からは外れるみたいだが、正直ミュージカルの脇役と仕事の多い副委員長なら後者の方がしんどい気がするけどな。

「はい、これ。」

そんな彼の笑顔を半目で睨みつけていると海老名がゴソゴソと鞆から取り出したプリントを押し付けてくる。

「お、おう。」

反射的にそれを受け取ってさっと目を通す。

ところどころ台詞の上にある丸で囲まれている“ヒ”という文字が俺の配役なのだろうが……それにしてもこれは——

「これ、『ロミオとジュリエット』か?」

「そーさすが比企谷君！」

このページだけで分かってくれるとはね〜。」

ずいっと興奮気味の海老名が顔を寄せてくる。

そんな彼女からやんわりと離れながら口を開く。

「有名だからな。」

結構原文と違うみたいだが、これは海老名のアレンジか？」

というかジュリエットの性別が変わってますよね？

「よく気づいてくれました！その通りです！」

これは私、海老名姫奈が監修した腐女子の腐女子のための『BLロミオとジュリエット』!!

当初の作戦ではハヤ×ハチのー「はいはい、そこまでにしときな。」

鼻血を出しながら興奮する彼女を三浦が宥める。

いつもの光景といえばそうなんだが、今回ばかりは乾いた笑いが出る。

……文実やってよかった。

「わ、悪いな。さすがに演劇までには手が回りそうにない。」

役を割り振るのは勘弁してくれ。」

「ん、わかってる。」

どうせ奉仕部関連なんっしょ？

普段ハチつてそんなに目立つ役にいこうとしないし。」

割とあっさり炎の女王様の許しが出る。

そもそも今の発言も含めて三浦はよく周りを観察してるし、本人がきちんと言葉にして伝えれば物分かりのいいオカン体質なのだ。

もつとも、嫌いな奴はとことん嫌うが。

それにしてもクラスの出し物は演劇になったのか。

カフェみたいな飲食店をやるなら隙を見て手伝うこともできただろうが、演劇となると……小道具の作成くらいしかやれることが思い当たらないな。

演技には多少なりとも自信はあるがぶっつけ本番で舞台に立つのは不安が残るし、そもそも演劇の内容自体が不安しかない。

「ああ。」

でも他にやれることがあるなら遠慮せず言ってくれ。」

社交辞令、というよりは「比企谷八幡」が言いそうな言葉を残す。

それに対して三浦は小さく笑って、  
「大丈夫だって。」

ハチは心配しすぎだから。」  
と。

「こつちのことは任せておいてくれ。」

文実の方が大変そうだしな。」

それに同調した葉山が一言。

しかもそのまま視線をちらりと教室の隅にいる相模に向けた。

一瞬だったせいで気づいたのは俺だけだが、間違いなくこいつは事情を知っているの  
だろう。

本当にこいつはどこでそんなことを調べてくるんだらうか。

「了解。しばらくは文実に集中させてもらおう。」

と、答えたところでポケットに入れてあった携帯が震える。  
悪い、と一言断つてからスマホの画面を見る。

TO: 比企谷くん

From: 城廻 めぐり

件名: 上手くいったよ!

本文: 二人の副委員長の承認が通ったよ!

比企谷くんと雪ノ下さんがやってくれるなら安心だよ。  
これからみんなで頑張ろう!

とりあえず作戦は成功したってところか。